福岡市西区

徳永アラタ古墳群

（本文編）

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第56集

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

1980年

福岡市教育委員会

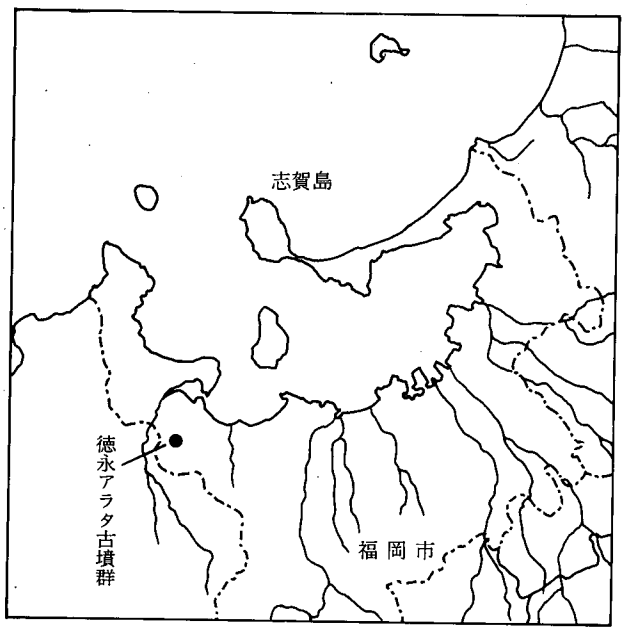
徳永アラタ古墳群正誤表

頁	行	誤	正
2	30	小石石墓	小石室墓
6	27	両側谷地形	西側谷地形
25	2	大刀	直刀
	3	大刀	直刀
30	18	石室墓底面からの掘り方 上場	石室墓底面からの掘り方 上端
33	15	22	60
	16	23	63
	26	格子文の切き	平行切き目
37	16	両袖型横穴式石堂	両袖型横穴式石室
39	3	1目安	一目安
40	14	純い	鈍い
	16	純い	鈍い
42	3	丘	丘陵
48	3	天上部	底部
49	28	(121～133)	(H—5～H—17)
	29	121・122・125	H—5・H—6・H—9
	30	129	H—13
	31	133	H—17
	33	134	H—18
59	20	4号墳	5号墳
	21	窮がわれた	窺がわれた

福岡市西区

徳永アラタ古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第56集



1980年

福岡市教育委員会

巻頭写真　徳永アラタ古墳群調査区全景

序　　文

本市の西郊に位置する今宿・周船寺の南部一帯の丘陵部は，国指定史跡である丸隈山古墳，今宿大塚古墳を始めとして，非常に多くの古墳が群集している丘陵地帯として著名な地域であります。

今回，発掘調査の対象となった徳永アラタ古墳群は，民間の農地造成に伴なって，教育委員会が調査主体となり，国庫補助を受けて発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の結果は，報告書にみられるように，この地域の古墳の形成過程や，当時の墓制の形式，さらには生活様式の一端を知る上で重要な成果を得ることができました。

本書が古代史研究の手懸りともなり，郷土の文化財の保存と育成への契機ともなれば，誠に幸いかと存じます。

なお，調査にあたりまして，地元関係者ならびに，酷暑の時期にもかかわらず作業を遂行された作業員の方々の御協力に対して厚く謝意を表する次第であります。

昭和55年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　西　津　茂　美

例　　言

1．本書は，福岡市教育委員会が国庫補助を受けて，昭和54年6月18日～10月2日にかけて実施した，民間農地造成に伴なう，徳永アラタ古墳群の緊急発掘調査の報告書である。

2．報告書は，本文編と図版編とに分冊した。

3．本書の付論として，大澤正己氏による，アラタ5号墳出土の鉄滓に関する報告をいただき収録した。

4．本文中に用いた古墳各部の名称は，先に刊行された広石古墳群の調査報告書の用例に準じている。

5．挿図の縮尺は以下のように統一した。

　　墳丘土層断面図……60分の1
　　石室実測図……60分の1
　　小玉・丸玉・耳環……3分の2
　　鉄 製 品……2分の1
　　土　　器……3分の1または6分の1

6．本書に用いた地図（Fig.1)は，国土地理院発行の2万5千分の1の地形図「福岡西南部」および「福岡西部」の一部であり，国土地理院の許可を受け複製した。なお承認番号はである。

7．出土遺物，各種実測図面，記録写真，及び調査日誌は福岡市教育委員会文化部文化課に保管されている。

8．諸般の事情により本文のかなりの量を割愛せざるを得なかったが，図面をなるべく多く掲載するよう努めた。

9．各遺構の実測は，渡辺，塩屋，田中，原田，山崎が行ない，製図は田中が行なった。

10．遺物実測および製図は田中が行なった。

11．本書の編集・執筆は田中が担当したが，塩屋の助言と協力を得，渡辺，原田の補助を受けた。

徳永アラタ古墳群

本 文 目 次

本文頁
Ⅰ．序　　説……1
1．はじめに……1
2．調査の経過……2
Ⅱ．徳永アラタ古墳群の調査……4
1．位置と環境……4
2．古墳群の立地と現状……6
3．調査の概要……8
Ⅲ．調査の記録……9
1．アラタ1号墳……9
2．アラタ2号墳……17
3．アラタ3号墳……20
4．アラタ4号墳……30
5．アラタ5号墳……37
6．アラタ6号墳……42
7．アラタ7号墳……54
8．その他の遺構と遺物……55
Ⅳ．ま と め……58
付　論　　アラタ古墳群5号墳出土鉱滓の調査　　大澤正己……61

挿 図 目 次

本文頁
Fig 1． 周辺主要遺跡分布図（1 / 25000）…… 3
Fig 2． 徳永アラタ古墳群現況地形測量図 （1 / 600）…… 5
Fig 3． 徳永アラタ古墳群墳丘遺存状況全体図（1 / 600）…… 7
Fig 4． アラタ1号墳墳丘土層断面図（1 / 60）……10
Fig 5． アラタ1号墳石室実測図 （1 / 60）……11
Fig 6． アラタ1号墳遺物実測図 小玉，耳環（2 / 3）……13
Fig 7． アラタ1号墳遺物実測図 鉄製品 （1 / 2）……13
Fig 8． アラタ1号墳遺物実測図 須恵器Ⅰ（1 / 3）……14
Fig 9． アラタ1号墳遺物実測図 須恵器Ⅱ（1 / 3）……15
Fig10． アラタ1号墳遺物実測図 須恵器Ⅲ（1 / 3）……16
Fig11． アラタ2号墳墳丘土層断面図（1 / 60）……17
Fig12． アラタ2号墳石室実測図 （1 / 60）……18
Fig13． アラタ2号墳遺物実測図 鉄製品 （1 / 2）……19
Fig14． アラタ2号墳遺物実測図 須恵器 （1 / 6）……19
Fig15． アラタ3号墳墳丘断面図 （1 / 60）……21
Fig16． アラタ3号墳石室実測図 （1 / 60）……22
Fig17． アラタ3号墳遺物実測図 小玉，管玉（2 / 3）……23
Fig18． アラタ3号墳遺物実測図 鉄製品Ⅰ（1 / 2）……24
Fig19． アラタ3号墳遺物実測図 鉄製品Ⅱ（1 / 2）……25
Fig20． アラタ3号墳遺物実測図 須恵器Ⅰ（1 / 3）……26
Fig21． アラタ3号墳遺物実測図 須恵器Ⅱ（1 / 3）……27
Fig22． アラタ3号墳遺物実測図 須恵器Ⅲ（1 / 3）……29
Fig23． アラタ4号墳墳丘土層断面図（1 / 60）……31
Fig24． アラタ4号墳石室実測図 （1 / 60）……32
Fig25． アラタ4号墳遺物実測図 須恵器Ⅰ（1 / 3）……34
Fig26． アラタ4号墳遺物実測図 須恵器Ⅱ（1 / 3）……35
Fig27． アラタ4号墳遺物実測図 須恵器Ⅲ（1 / 3，1 / 6）……36
Fig28． アラタ5号墳墳丘土層断面図（1 / 60）……38
Fig29． アラタ5号墳石室実測図 （1 / 60）……39
Fig30． アラタ5号墳遺物実測図 小玉，耳環（2 / 3）……40

Fig31. アラタ5号墳遺物実測図　鉄製品　（1／2）……40
Fig32. アラタ5号墳遺物実測図　須恵器，土師器（1／3）……41
Fig33. アラタ6号墳墳丘土層断面図（1／60）……43
Fig34. アラタ6号墳石室実測図　（1／60）……44
Fig35. アラタ6号墳遺物実測図　小玉，丸玉，耳環（2／3）……45
Fig36. アラタ6号墳遺物実測図　鉄製品　（1／2）……46
Fig37. アラタ6号墳遺物実測図　須恵器Ⅰ（1／3）……47
Fig38. アラタ6号墳遺物実測図　須恵器Ⅱ（1／3）……48
Fig39. アラタ6号墳遺物実測図　須恵器Ⅲ（1／3）……50
Fig40. アラタ6号墳遺物実測図　須恵器Ⅳ（1／3）……51
Fig41. アラタ6号墳遺物実測図　須恵器Ⅴ（1／6）……52
Fig42. アラタ6号墳遺物実測図　土師器　（1／3）……53
Fig43. アラタ7号墳平面及び断面図（1／40）……54
Fig44. アラタ7号墳遺物実測図　小玉（2／3）……55
Fig45. 竪穴遺構実測図（1／40）……56
Fig46. その他の遺物実測図（1／3）……57

表　目　次

Tab1. 徳永アラタ古墳群古墳一覧表……8
Tab2. 各古墳出土杯形態分類対比表……59
Tab3. 徳永アラタ古墳群出土玉類計測表……60

図　版　目　次

PL1. 徳永アラタ古墳群5号墳出土鉱滓の顕微鏡組織（×100）……62
PL2. 同上外観写真（1／2）……62

I 序 説

1．はじめに

徳永アラタ古墳群は，1970年に実施された今宿バイパス建設に伴なう予備調査時に，県文化課によって確認されており「アラタ古墳群」として登録のなされている周知の遺跡である。

1977年に，当古墳群の一角を所有する柴田正行氏による，地目変更のための農地造成計画がなされたために，1979年市教育委員会は，当該地の分布調査を行なった。その結果，造成予定地内には少なくとも5基の円墳が存在することが確認され，また新たな古墳の存在も予想された。これによって，市教育委員会は柴田氏との間で，造成計画の変更，保存等の問題をも含めて，数回の協議を行なったが，諸般の事情により造成による古墳群の破壊は避けられないこととなり，発掘調査による記録保存の措置が必要となった。その結果市教育委員会は，国庫補助を受け，当該地の発掘調査を実施することとなった。

調査は，1979年6月16日から10月2日までの約3ヶ月間にわたり実施した。期間中，地主である柴田氏もこの調査に参加され，発掘が経過するにつれて，氏は文化財に対する深い御理解を示され，保存の措置を講じたいという意見を我々は得ることができた。現在，その意見に沿って保存に関する諸問題について検討中であることを明記しておく。なお調査関係者は以下のとおりである。調査にあたって多大の協力を得ました。記して感謝の意を表します。

調 査 関 係 者

福岡市教育委員会

	教 育 長	西 津 茂 美	
	文化部長	志 鶴 幸 弘	
	文化課長	井 上 剛 紀	
庶務会計	埋蔵文化財第二係長	柳 田 純 孝	
		岡 島 洋 一	
発掘調査		塩 屋 勝 利	
		田 中 寿 夫	
	補 助 員	渡 辺 和 子	
	整理補助	原 田 順 子	山 崎 由 実 子

地元協力者（敬称略）

柴田正行，安河内祥司，福島辰三郎，高取勇，津田浅次郎，徳永英一，土井良雄二，池シズ，井上真由美，坂本政子，塩手ミヨ子，庄野崎チタカ，徳永千鶴子，富田礼子，古藤ヒサ子，中島英子，股野安枝，松下良子，和田幸代

特に宝珠寺住職，赤津瑞孝氏には宿舎の提供を，福島氏には数々の助言を得ました。

1）調査の経過

ここに掲げたのは，昭和54年６月18日から10月２日までの約３ヶ月間にわたって実施した，本古墳の調査経過を，調査日誌より抄録したものである。調査はその当初梅雨に見舞われ，遅々として進まず，また梅雨明け後は連日の猛暑のため，作業員が倒れるなどいろいろとあったが，幸いにも大事故にはいたらず，調査は無事終了した。

６月18日（晴）　仏式にのっとり起工式を行なう。古墳被葬者への鎮魂と作業安全を祈願し合掌。

６月19日（曇ときどき雨）１号墳より伐採を開始。伐採作業は，他の作業と併行しながら７月６日まで断続的に行なった。面積にして3000㎡ほどを伐採。

６月22日（曇ときどき雨）測量用の基本杭を各古墳に打ち，１・２号墳の現況地形測量を行なう。墳丘及びその周辺に限ってコンタは25cm毎とした。（古墳現況地形測量は７月９日までで終了）

７月６日（晴）　２号墳より墳丘及びその周辺の表土剝ぎを行なう。本格的な発掘開始とあって，調査関係者一同緊張する。（２号墳の発掘調査は，馬蹄形溝の露呈も含めて７月14日までで終了）

７月11日（晴）　１号墳の発掘開始。主体部埋土の除去と表土剝ぎを並行して行なう。（１号墳の調査は，７月23日までで終了。玄室内床面上土砂の水洗選別開始）

７月25日（晴）　３号墳，４号墳の調査にとりかかる。暑さきびしく，作業能率が落ちる。作業上の衛生及び安全を考慮し，なるべく休憩を多くとるよう努める。（３号墳・４号墳の調査は，８月23日までで終了。墓道の検出と露呈に時間を費やした。３号墳は複室墳と判明しその大きさに一同感嘆す。）

８月８日（晴）　５号墳，６号墳の調査にとりかかる。特に，４号墳の墓道と，５号墳の馬蹄形溝との切り合い関係が注意された。水洗選別の効果があがる。）

８月12日～８月19日　この間盆休みで，調査作業は休止。

８月31日（晴）　５号墳の調査終了，６号墳の墓道の露呈作業と，馬蹄形溝の調査を行なう。

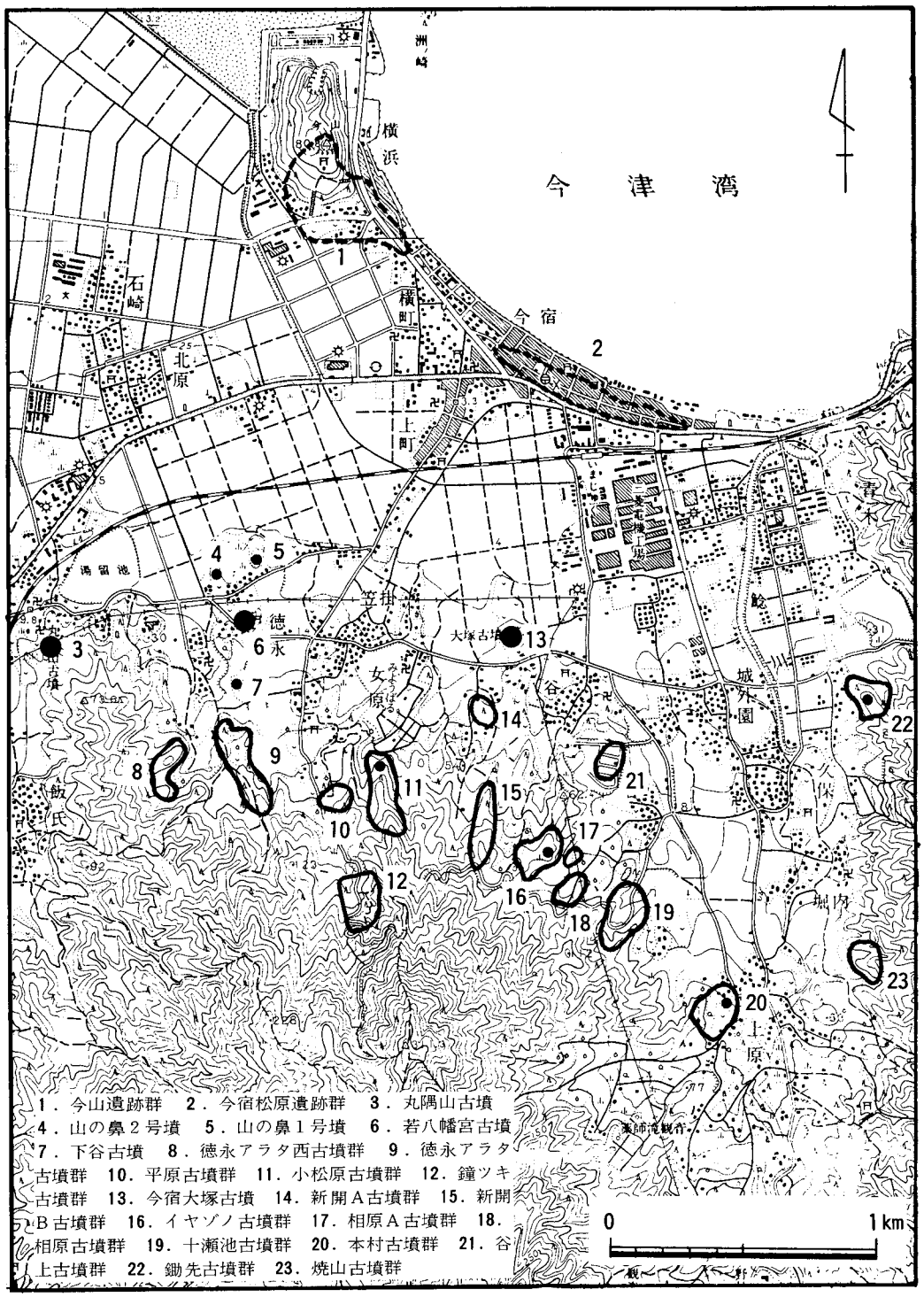
９月１日（晴）　発掘作業はほぼ終了し，本日より，各種の実測図の作成にとりかかる。７月11日より始めた水洗選別を作業員全員でとりかかり９月10日に終了。

９月６日（曇）　名島小学校６年生の遺跡見学会を行なう。

９月19日（晴）　未掘部分等の検討中，２号墳から４号墳にいたる緩斜面上に７号墳（小石石墓）を発見。

９月20日～９月29日　調査終了写真撮影，現況地形測量図の補正作業を行なう。

10月２日（雨）　器材を撤収し，調査を終る。



1．今山遺跡群　2．今宿松原遺跡群　3．丸隅山古墳　4．山の鼻２号墳　5．山の鼻１号墳　6．若八幡宮古墳　7．下谷古墳　8．徳永アラタ西古墳群　9．徳永アラタ古墳群　10．平原古墳群　11．小松原古墳群　12．鐘ツキ古墳群　13．今宿大塚古墳　14．新開Ａ古墳群　15．新開Ｂ古墳群　16．イヤゾノ古墳群　17．相原Ａ古墳群　18．相原古墳群　19．十瀬池古墳群　20．本村古墳群　21．谷上古墳群　22．鋤先古墳群　23．焼山古墳群

Fig. 1　周辺主要遺跡分布図　（1／25,000）

Ⅱ．徳永アラタ古墳群の調査

1）位置と環境（Fig.1）

徳永アラタ古墳群は，福岡市西区周船寺大字徳永字アラタ，真竹ヶ浦，および大字女原字浅ヶ谷に所在している。今回調査した7基の古墳は，柴田正行氏の所有する大字徳永字アラタ372～382 番地に所在し，徳永アラタ古墳群の一部をなすものである。この地点を国土地理院発行の 25000分の1の地形図「福岡西南部」に求めれば，東側線より42.1cm，北側線より 6.7cmを測る線の交点に該当する。

本古墳群の位置する今宿地区平野部は，博多湾沿いに展開する狭小な海岸平野である。福岡平野の西に長く横たわる，叶嶽・長垂山山塊を東端として，今津湾に流入する瑞梅寺川下流東岸までの東西約3km，南北にして約1kmほどの範囲を占めるこの平野部の南縁には，高祖山から派生した舌状の台地が八手状に張り出している。これらの台地上には，13～15群に分かれて分布する総数 300基以上の後期古墳，および10基の前方後円墳が造営されている。本古墳群は分布範囲の西端に位置しており，27基の円墳から構成されている。

ところで，弥生時代における今宿地区の景観は，糸島水道が現在の様に完全に閉じておらず，その海岸線は，現在の標高4～5mの等高線を辿って，瑞梅寺河口より今山南麓を経て今宿にいたり，そのあたりで南へ転回し，女原・徳永の台地の縁辺を抜け，周船寺北辺からさらに西南へ向きを変えて二丈町の加布里まで続いていたであろうと推定されている。その後の河川の沖積作用を考慮しても，深く湾入したその景観は，後の古墳時代においても大きな変化はなかったものと思われる。このことを踏まえると，当時の平野部は非常に狭いものとなり，八手状に張り出した台地間に形成された狭い谷地形が唯一の可耕地ではなかったかと考えられる。

こうした状況を反映するかのように，弥生時代の遺跡は，長垂山から今山にかけて細長く形成された海岸性砂洲上，および現在の今宿小学校周辺に点在しているが，その例は少なく，また遺跡内容も貧弱である。玄武岩製太形蛤刃石斧の製作址として著名な今山遺跡(**1**)や，細型銅剣を出土した今宿横浜遺跡，弥生前期末から中期にかけてのカメ棺墓である今宿松原遺跡(**2**)，遺物散布地としての今宿小学校遺跡などがあげられる。しかし後の古墳時代への発展的過程を間接的にでも裏付けるような弥生時代の遺跡を今宿地区には認めがたい。

先述した10基にも及ぶ前方後円墳は，4世紀に遡るとされる若八幡宮古墳(**6**)を初現として，山の鼻1号墳(**5**)・同2号墳(**4**)，5世紀後半と考えられている丸隈山古墳（**3** 国指定史跡），鋤先古墳(**22**)，今宿大塚古墳（**13** 国指定史跡），6世紀前半～中葉とされる下谷古墳(**7**)，小松原1号墳(**11**)，谷上古墳(**21**)，本村5号墳(**20**)まで，ほぼ古墳時代の全時期を通じて営まれており，さらに後期にいたっては，群集墳が形成されるという現象は，可耕地の狭小さを考慮した場合，今宿

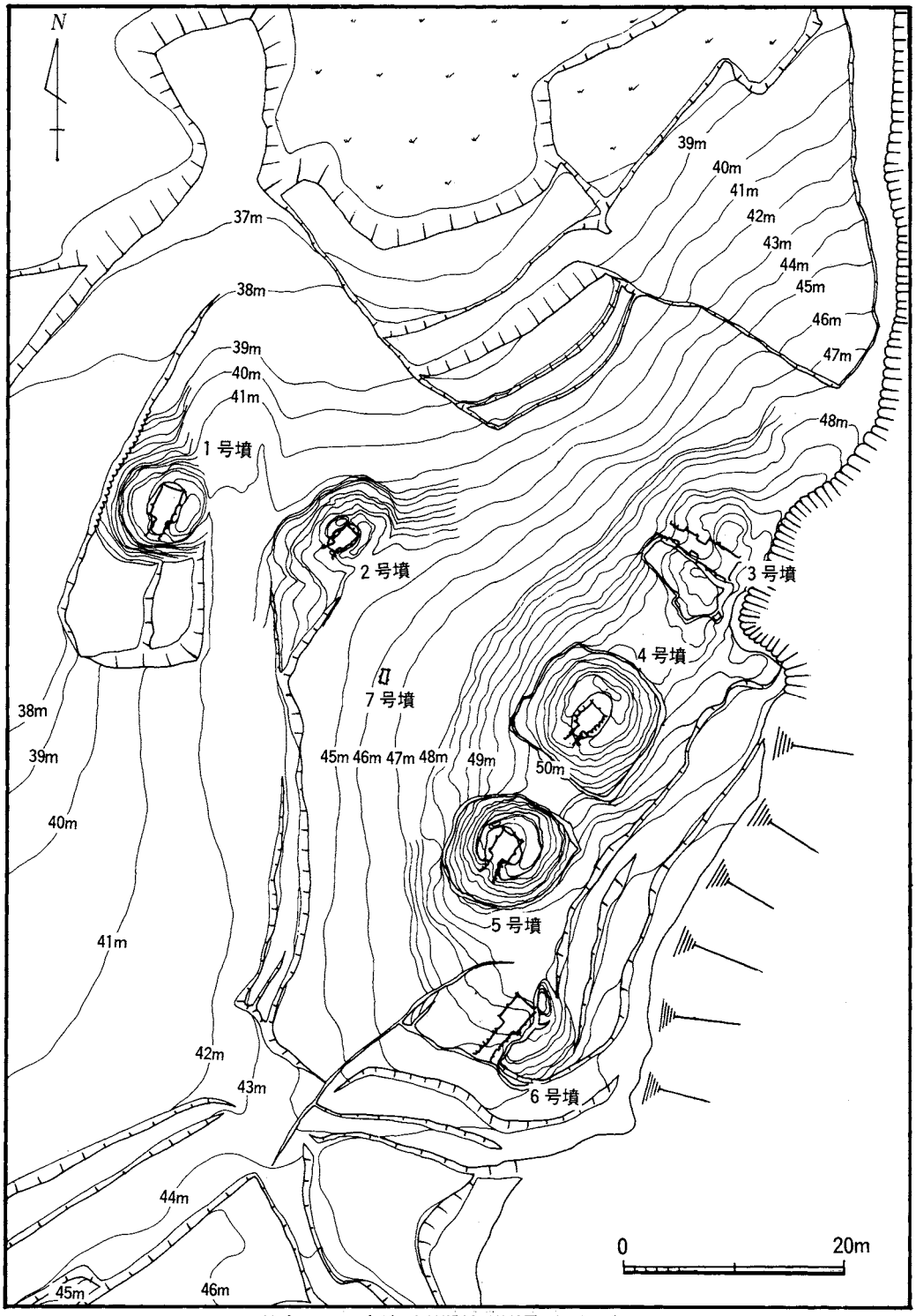


Fig. 2　徳永アラタ古墳群現況地形測量図（1/600）

地区の古墳時代における何らかの特異な歴史的背景を反映するものであると考えられよう。

この今宿地区と，叶嶽—長垂山山塊を介して隣接する早良平野の南縁から西縁の山麓に分布する早良古墳群は，広大な早良平野をそのヒンターランドとして形成された総数 700基以上を越す古墳を有すが，前方後円墳は現在のところ発見されていない状況であり，前方後方墳である京の隈古墳が幾内型古墳の例として知られているにすぎない。

こうした他の地域との比較を通じて，さらに当地区の特異な面は注目されるところとなるが，しかし，この地区における考古学的調査は，今宿イヤゾノ古墳群，若八幡宮古墳，丸隈山古墳，相原古墳群，徳永アラタ西古墳群，および今回の徳永アラタ古墳群の6遺跡しか行なわれておらず，しかも，古墳のみに限定され，さらにそれらが個別的な調査であることより，その実態の解明までに至っていないのが現状である。この地区に前方後円墳が集中的に築造された契機，および群集墳の築造開始期とそれらの被葬者の実態の解明などは今後に残された問題である。

2）アラタ古墳群の立地と現状（Fig.2）

アラタ古墳群の立地する舌状に延びた丘陵は，高祖山山麓からの急な傾斜を保ちつつほぼ真北へ延び，今回調査した6号墳の東南部にみられる谷地形付近でその傾斜を弱めると同時に，北東へその向きをかえて山の鼻1号墳の立地する地点まで大小の起状を織りまぜながら続いている。丘陵の東西には，高祖山から派生した同様な丘陵がほぼ平行して北へ延びており，これらにはさまれて，奥の深い谷地形が形成されている。東側は急峻な斜面となっており，杉の造林がなされている。3号墳の立地する地点より北側は，人為的に削平され崖面となっており，地肌を露わにしている。西側斜面は，比較的ゆるやかで，谷の奥では畑地が，入口付近では水田が現在営まれており，可耕地として適した，沖積扇状地となっている。集落は，本丘陵の舌部から，西側斜面にかけての比較的小高い地点に占地して営まれている。

1号墳から7号墳は，高祖山から延びてきた尾根が北東へ向きを変える地点から以北の平坦な尾根上及び，西に面する斜面上に占地している。地形的なまとまりで分けると，27基を数えるアラタ古墳群は，6号墳より以北の尾根及び緩斜面に分布する12基と，谷をへだて，丘陵基部に集中する15基の2群に分けられる。これらの古墳はすべて円墳である。いずれも盗掘され墳丘頂部は楕円形状に陥没している。これによりおおよその開口方向を推定できるが，調査した1～7号墳を初めとして，いずれも両側谷地形の方向へ開口していると思われる。

徳永アラタ古墳群が立地する丘陵先端部には，先にあげた4基の前方後円墳が存在する。丘陵舌部（北）からあげれば，山の鼻1号墳，山の鼻2号墳，若八幡宮古墳，下谷古墳の4基である。いずれも，アラタ古墳群とは独立して単独に築造されたものであり，下谷古墳を除いた3基は先述したように築造時期もかなり遡るものである。

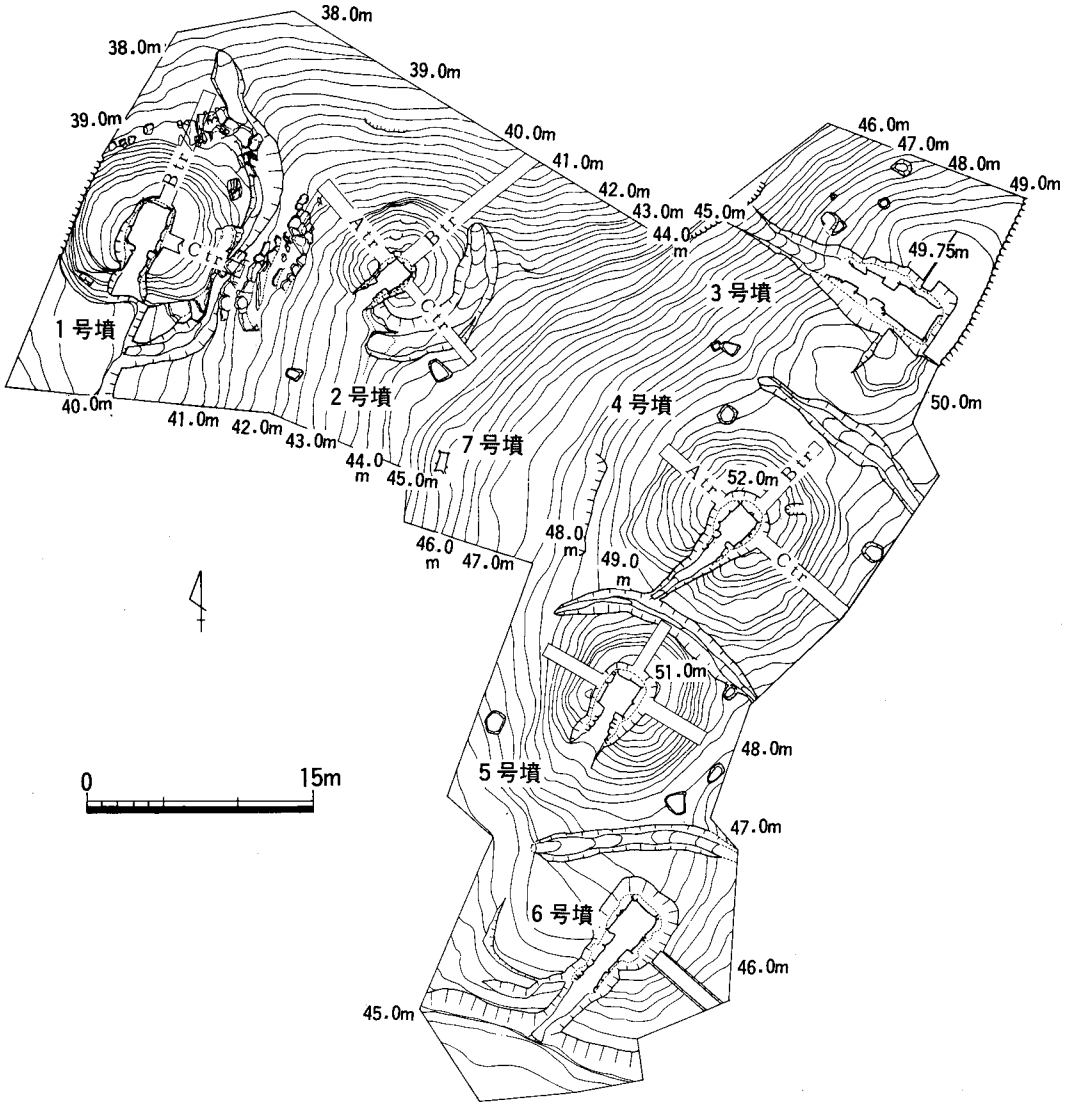


Fig. 3　墳丘遺存状況全体図　(1/500)

2）調査の概要

発掘調査の当初においては，調査対象地内には5基（1号～5号墳）しか遺存していないという予想であったが，発掘の途中及び終了まぎわに新たに6号墳と，7号墳とが確認され，計7基の古墳の調査となった。以下調査の方法と，概要について記す。

調査の方法　調査は，伐採，現況地形測量，各古墳の主軸方向の設定，トレンチ掘削，主体部掘り下げ，墓道・周溝等の外部施設の検出と観察，石室内床面直上の埋土の水洗選別作業，実測作業，最終的な調査の見直しの順に概ね行なった。伐採によって6号墳を見直し調査により，7号墳を新たに確認した。現況地形測量と，墳丘遺存状況測量においては，墳丘及びその周辺に限って25cmコンタを追うことにより，墳丘の遺存状況をなるべく的確に把握することにつとめた。トレンチは，主軸方向に沿ってBtrを，主軸に直交するAtr，Ctrをそれぞれ設け、地山整形の状況，主体部の掘り方の観察，外部施設の検出を行なった。外部施設の検出にあたっては，古墳築造に付随する他の遺構の存在が予想されたため，墳丘周辺をなるべく広範囲にわたり調査区を広げた。なお調査区は，石室の主軸方向および，主軸に直交する線により4分割し，まず左開口部周辺をⅠ区とし，そこより時計回りにⅡ区（左奥壁部周辺），Ⅲ区（右奥壁部周辺），Ⅳ区（右開口部周辺）とした。これにより，墓道の一部，(3・4・6号），馬蹄形溝（1～6号），竪穴遺構（13基）が検出された。なお墳丘は，地主の希望を考慮し現状のままとし，将来の保存に備えた。各古墳の概要は次表のとおりである。

号	墳形	径(m)	高(m)	石室 形式	主軸方向	全長	玄室長	玄室幅	副室長	副室幅	羨道長	羨道幅	石材	出土遺物 玄室	副室	羨道	墓道	墳丘	時期	備考
1	円墳	11.5 (12±)	2.1 (5)	横穴式石室 (両袖 単室)	N/20°30′/E	右側長 5.28 左側長 5.06	右側長 3.01 左側長 2.94	奥幅 1.94 前幅 1.98	— —	— —	2.21 2.12	1.10 1.30	花崗岩	小玉 管玉 耳環 鉄鏃	—	—	—	杯 杯蓋 高杯 脚付壺 提瓶	六世紀後半	溝より 甕 有蓋高杯蓋，白磁
2	〃	9.0 (10±)	1.8 (2.5～3)	横穴式石室 (両袖 単室)	N/40°30′/E	3.03 2.97	1.92 1.86	1.46 1.24	— —	— —	1.11 1.11	0.58 0.90	花崗岩	刀子 ?	—	—	—	甕	六世紀後半	
3	〃	(14±)	3.40 (4.5～5)	横穴式石室 (両袖 複室)	N/37°20′/E	7.83 6.96	3.45 3.30	2.32 2.28	1.06 1.45	1.90 1.70	3.32 2.21	1.03 1.45	〃	小玉 管玉 大刀子	鉄鏃 提瓶 耳環		土師器 杯、皿	杯 高杯 平瓶 提瓶 大甕	六世紀後半	墓道より 土師器
4	〃	13.5 (10±)	2.75	横穴式石室 (両袖 単室)	N/43°/E	3.95 3.95	2.30 2.40	1.70 1.65	— —	— —	1.36 1.05	1.07 1.00	〃	—	—	土師器	土師器 高杯	杯 高杯 提瓶 大甕	六世紀後半	
5	〃	9.70 (10±)	1.70 (2.5～2.7)	横穴式石室 (両袖 単室)	N/31°40′/E	4.21 4.41	2.30 2.32	1.94 1.86	— —	— —	1.91 (1.51) 2.09 (1.69)	0.84 1.32	〃	小玉 耳環 鉄鏃 鉄滓 刀子	—	—	—	杯 平瓶 脚付坩	六世紀後半	溝より 杯(須)
6	〃	(10～11)	3.30 (4.5～6)	横穴式石室 (両袖 単室)	N/39°10′/E	6.34 6.65	2.78 2.75	2.1 2.1	— —	— —	3.52 3.94	1.17 1.30	〃	土師器 高杯 小玉 丸玉 耳環	—	耳環	耳環 提 脚付壺	杯 高杯 甕 高杯(土) 坩(土)	六世紀後半	
7	小円墳 ?	(5～6±)	(2±)	小石室	N/14°30′/E	長 1.18 1.15	幅 0.52 0.62	—	—	—	—	—	〃	ガラス製 小玉	—	—	—	—	七世紀 ?	

Tab. 1　徳永アラタ古墳群古墳一覧表

Ⅲ．調 査 の 記 録

1．アラタ1号墳

1）位置と現状

北東へ続く丘陵尾根は，3号墳付近で西側斜面に若干の高まりを残し終っている。この高まりは緩斜面となり西へ続き1号墳付近で再び北へ向きを変え，現市道沿いに細長く続いている。この細長い高まりに1号墳は存在しており，墳丘東側裾部の花崗岩露頭を介して2号墳と約15m離れて立地する。墳丘頂部は盗掘と石室の崩壊によって長楕円形に陥没していた。

2）墳　丘（Fig.4）

地山整形　本墳の地山整形は，花崗岩露頭の掘削と削平が行なわれ，斜面の走行に直交して石室の構築が行なわれている。古墳築造の地点は必ずしも条件のよいところではないが，石材採取も兼ねた選地がなされているようである。

墳　丘　墳丘盛土は，基盤である糸島花崗閃緑岩を基底面とする。盛土は本墳の立地の関係上墳丘北西部の流失が著しい。西側は新設道路の工事の際に墳丘中復まで削平されているが，全体的に墳丘の遺存状況は良好である。盛土の形成過程は大きく3段階に分けられ，それに対応する土層の変化が各トレンチ（B・Ctr）で観察できた。すなわち，石室構築時の裏込め，石室側壁上半分から天井部までの被覆，墳丘整形の順である。盛土に用いられた土砂は，岩盤の削平（地山整形），および溝の掘削時に生じた砕石を多く含む花崗岩バイラン土を主とする。ただし，裏込めおよび石室側壁までは，この土よりも粘着性の強い赤褐色粘質土を用いており，墳丘整形および，天井の被覆には先述したバイラン土を打ち固めつつ構築している。墳丘の現存高は玄室床面を基準面として 2.1m を測る。またその径は約11.5m である。復元高と径はそれぞれ，約4.5～5m ならびに約12～13m 程度と考えられる。

3）石　室（Fig.5）

石室は単室の両袖型横穴式石室である。主軸をN－20°30′－Eにとり，南に開口している。天井部と側壁上半部は欠失しており，石室内に多量の土砂と共に埋没していた。石室は岩盤を掘削した掘り方の内側に構築されている。石室の平面形は長方形の玄室と，やや開き気味の羨道を付した形態で，左右両袖が張り出されている。石室全長は左側壁で5.06m，右側壁で5.28m を測る。石室石材は，玄武岩を用いた第1・第2梱石を除いた他はすべて花崗岩である。

石室掘り方　掘り方の観察はB・Ctr で行なった。掘り方の東半分は，花崗岩露頭にかか

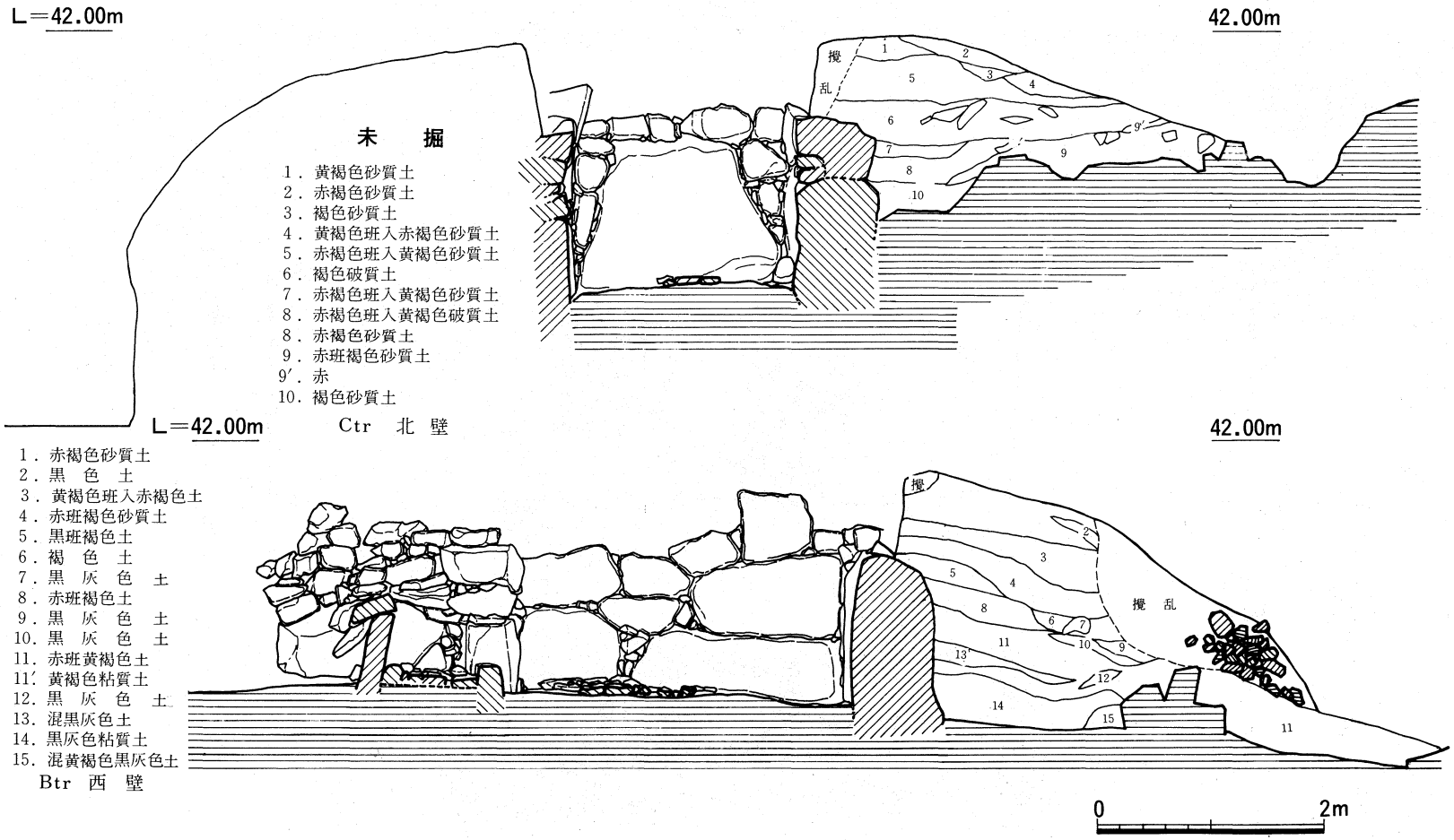


Fig. 4　1号墳丘土層断面図（1/60）

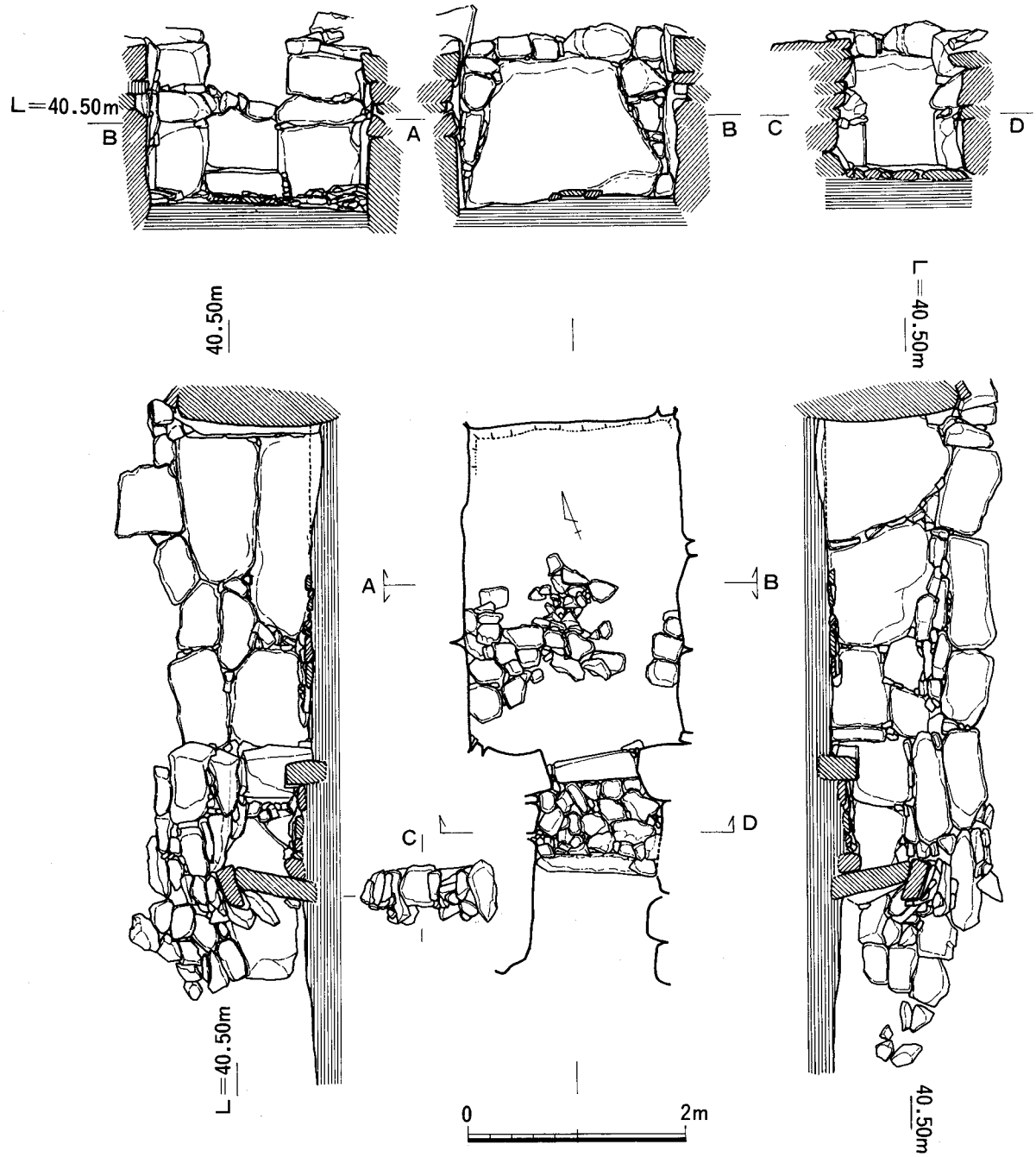


Fig. 5　1号墳石室実測図　(1/60)

っており，必然的に花崗岩岩盤をくり抜かねばならない位置にあたる。しかし露頭を削平するのではなく露頭の起伏を石室の掘り方として利用している伏もある。

玄　室　平面形は長方形である。奥幅1.94m，前幅1.98m，右壁長3.01m，左壁長2.94mをそれぞれ測る。石室壁体の構築は，まず奥壁に高さ 1.4m，幅 1.8mほどの面どりのなされた大石を据えた後，両側壁から挟みこむようにして，ひとまわり小さな割石を横位に据えて腰石としている。両側壁の二段目から三段目にかけては，やや小ぶりの石を水平に目路が通るように若干せり出し気味に横積みしており，奥壁の一枚岩の高さに等しくなるように造作している。左側壁の一部に，持ち送りのなされている三段目の割り石が残るが，その傾斜とせり出した壁体の状況からみて，天井までの高さは床面より2.5～2.7mほどと考えられる。なお床面の敷石は中央から玄門にかけて若干残るのみである。

羨道および閉塞状況　羨道はその天井部を欠失しているものの両壁の遺存状況は良好である。羨道は，右壁長が2.21m，左壁長2.12m，奥幅1.10m，羨道端前幅 1.3mをそれぞれ測る。両壁は，1.0×0.4mほどの転石を腰石として据え，その上方に人頭大の転石を，除々に持送りながら横積みしている。右側壁は若干雑な作りとなっているが，全体的に整然とした構築状況である。袖石と羨道中央に配された2個の梱石間には，扁平な転石が敷きつめられており，羨道前半部とは異なった配慮がなされており，副室への移向形態とも考えられよう。この第2梱石を根石として，0.7×0.6mほどの平石をたてかけ，石室は閉塞される。

4）遺　物(Fig. 6～10)

出土状況　遺物は，墳丘，石室，馬蹄形溝より出土したが，すべて二次堆積であり，原位置をとどめてはいなかった。しかし遺物が出土する地点は，開口部周辺がもっとも多い。供献されていたと思われる**10**や**11**はⅠ区墳丘の中腹からの出土である。小玉類は小さいため土砂の水洗選別によって検出したため出土地点ならびに状況については不明である。

小玉・管玉・耳環（Fig. 6　1～32）　小玉は　28点，管玉は1点，耳環は3点出土。小玉は**1～26**までがガラス製で，色調が青色透明のもの（**1～16**）と青緑色半透明のもの（**17～18**），緑色透明のもの（**19～26**）に分けられる。孔はすべて一方向からであり，裁断面の磨きは丁寧に施こされている。大きさは，径が3mm前後で厚みが 1.5mmほどの小粒のものと，径が 5.5mm前後で厚みが3mmほどのやや大粒のものとがあるが色調のちがいとは対応しない。**27・28**は石製品である。灰色を呈し磨きは丁寧である。管玉**29**は両面からの穿孔がなされておりその後裁断面及び側面の磨き仕上げが施こされる。濃緑色の碧玉製である。耳環**30～32**は銅環を芯体として金張を施こしている。腐食が著しく緑青が吹き出している。

鉄製品（Fig. 7　1～9）　**1**は平根の三角形式で，身の中央からやや内湾しながら逆棘りが外へ張り出す。身は両丸造りである。**2**は，尖根の柳葉式で茎部を欠失している。身は片丸

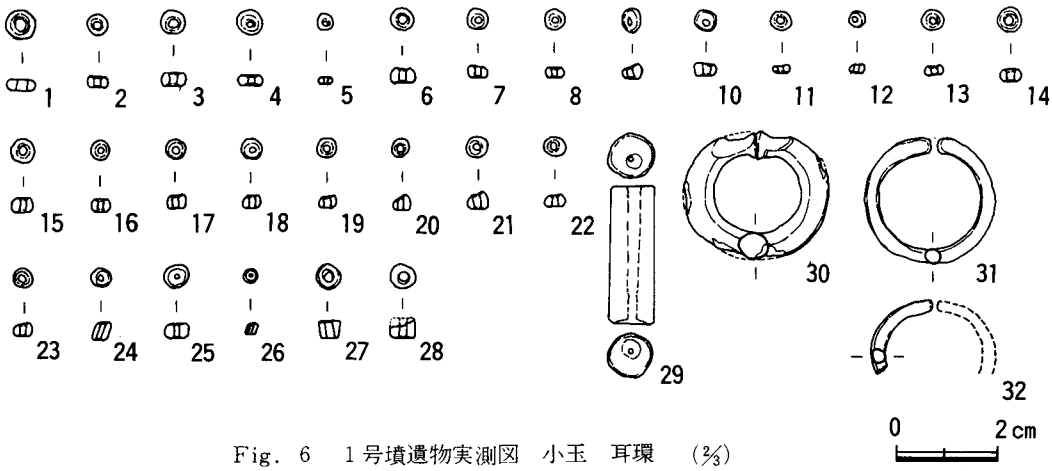


Fig. 6　1号墳遺物実測図　小玉　耳環　(⅔)

造りで箆被部は扁平な方形をなす。**3**～**8**は箆被部ないし茎部の破片である。箆被部断面は方形をなし，茎部のそれは円形となる。いずれも尖根式に属するものと思われる。**9**は刀子の茎部であろう。

須恵器（**Fig. 8**～**10**）　杯蓋，杯身，高杯，高杯脚部，短頸壺蓋，脚付壺，小型甕，提瓶，等が出土しているが出土量は少ない。開口部周辺の墳丘よりほとんどが出土しているが，原位置を留めているものはなく，二次堆積土中からの出土である。

杯蓋（**Fig. 8の3，5**）　2点出土している。**3**は，口径14.8cm，器高 4.8cmを測る。天井部の1/2の範囲にヘラ削りが施こされている。天井部と体部との境には明瞭な沈線を施こしている。口縁部はやや尖り気味で若干内側に閉じ，内面には段を有す。内面天井部には，同心円叩き目に以た，『シッタ』の跡が残る。体部および内面は横ナデにより仕上げる。焼成，胎土とも良好である。杯**6**とセットの可能性あり。**5**は,口径14.6cm，器高 4.1cmを測る。平坦な天井部にはその1/2の範囲にヘラ削りが施こされる。天井部と体部との境には鈍い沈線が施こされる。丸みを帯びた口縁部はやや外につまみ出され，また内面にはかすかな沈線がみられる。内面には**3**と同様『シッタ』の跡が残る。ロクロ回転は**3**・**5**とも時計回りである。

杯　(**Fig. 8の6**)　口径13.0cm，器高5.0cm，立ち上がりは 1.1cmを測り受部から直線的に内傾し，口縁端は丸い。受け部は真横に伸び，立ち上がりとの境には沈線が走

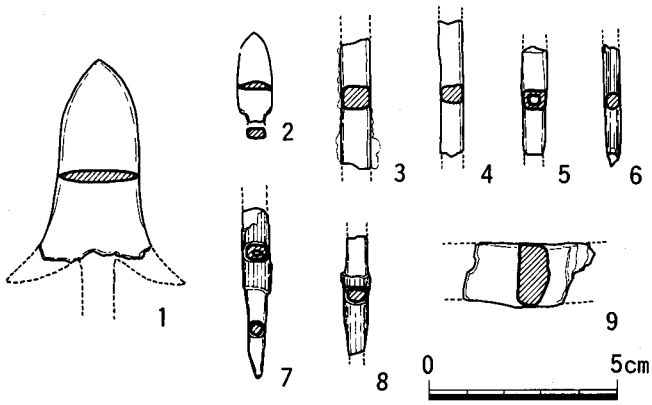


Fig. 7　1号墳遺物実測図　鉄製品　(½)

る。底部にはヘラ削りが2／3ほどの範囲で施こされている。内面には杯蓋**3**・**5**同様『シツタ』の跡が残り，また焼成・胎土ともよく以る。ロクロ回転は時計回り。

高　杯（Fig.9の7・8）　**7**は3方より透しのはいる高杯脚部の破片である。内外面とも横ナデにより仕上げている。脚端部はわずかに肥厚させ丸く仕上げる。**8**は有蓋高杯である。杯部は口径 12.6 cm，器高 4.6cmである。立ち上がりは 1.1cmで内傾して口縁端部へ伸びる。口縁端部はやや尖り気味である。受け部は真横へ伸ばされ，立ち上がり基部との境には，細い沈線が施こされる。底部に約1／3ほどの範囲で施こされたヘラ削りは，脚部との接合後，回転ナデ調整によって消されている。脚筒中央には2本の沈線が施こされ，それを介して三方より長方形の透しが二段に配されている。脚端部は丸く肥厚し，外へ開く。内外面とも横ナデにより仕上げられている。胎土は精緻で，焼成良く，堅くしまる。器高17.6 cmを測る。

短頸壺蓋（Fig.9の2）　口径10.4cm，器高 4.0cmを測る。天井部と体部との境には弱い稜が走る。平坦な天井部はその1／2の範囲にヘラ削りが残る。口縁端はやや外反し内面には段を有す。胎土はやや粗いが焼成は堅緻である。ロクロの回転方向は逆時計回りである。

脚付長頸壺（Fig.9の9）　現存高24.1cmを測る。頸部はその上半部を欠失する。体部には，やや張った肩から底部にかけて6段の斜行列点櫛描文がカキ目調整後施文されている。脚部は中央部よりやや下方に施こされた2本の沈線を介して，3方からの長方形の透しが配される。

甕（Fig.8）　口径14.7 cm，器高26.1cm。口縁は上下につまみ出され，中央に鈍い凹線が走る。頸部は強く外反し,最大径は肩部のやや下にある。外面には平行叩き目が残る。

提　瓶(Fig.10の10・11)　**10**は肩部に鉤手状の把手を，**11**は環状把手を有す。**10**は器面をヨコナデによって調整。器壁が厚く焼きも甘い。**11**は体部前面にカキ目を残し，腹面はヨコナデによる調整を行なっている。胎土は細かく焼成堅緻である。自然釉が前面にかかる。

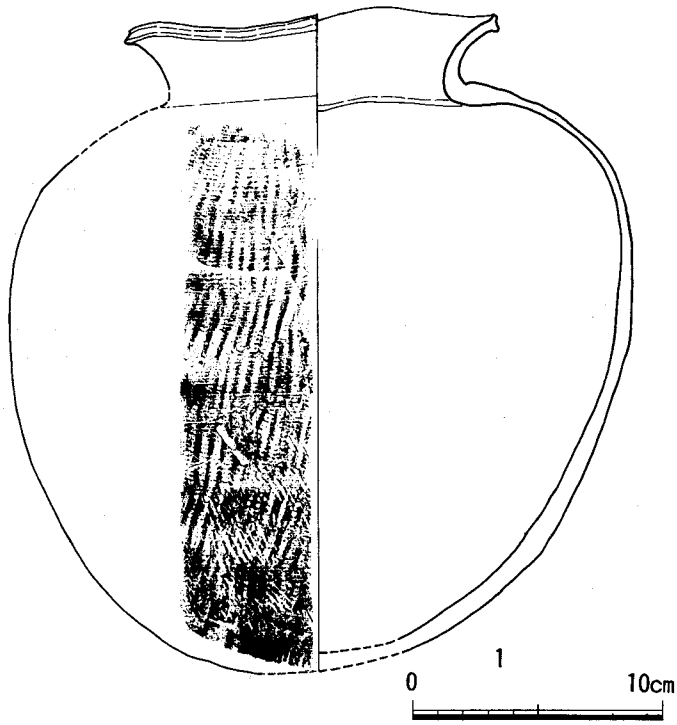


Fig. 8　1号墳遺物実測図　須恵器Ⅰ　(1/3)

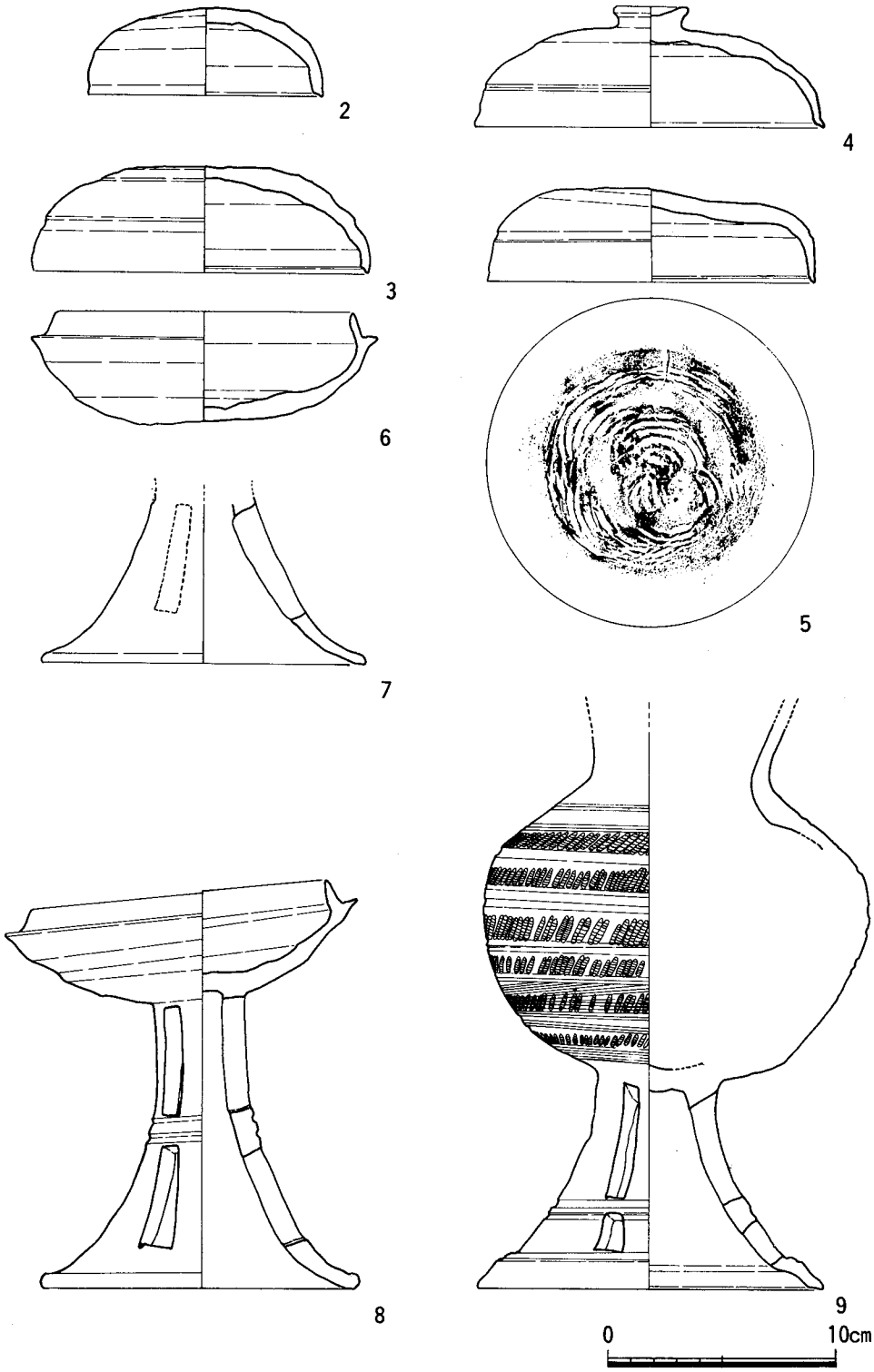


Fig.　9　1号墳遺物実測図　須恵器Ⅱ　(⅓)

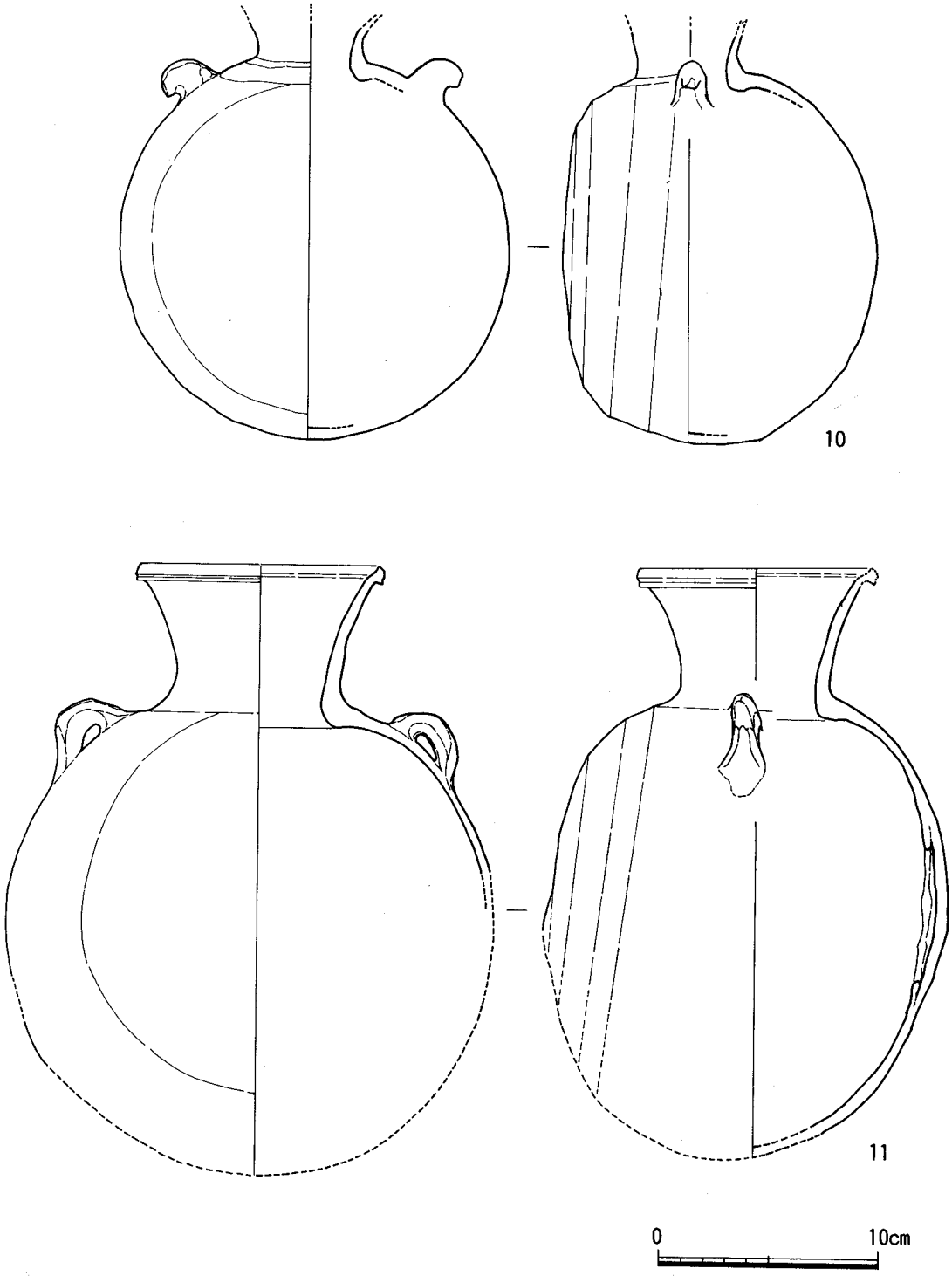


Fig. 10　1号墳遺物実測図　須恵器Ⅲ　(1/3)

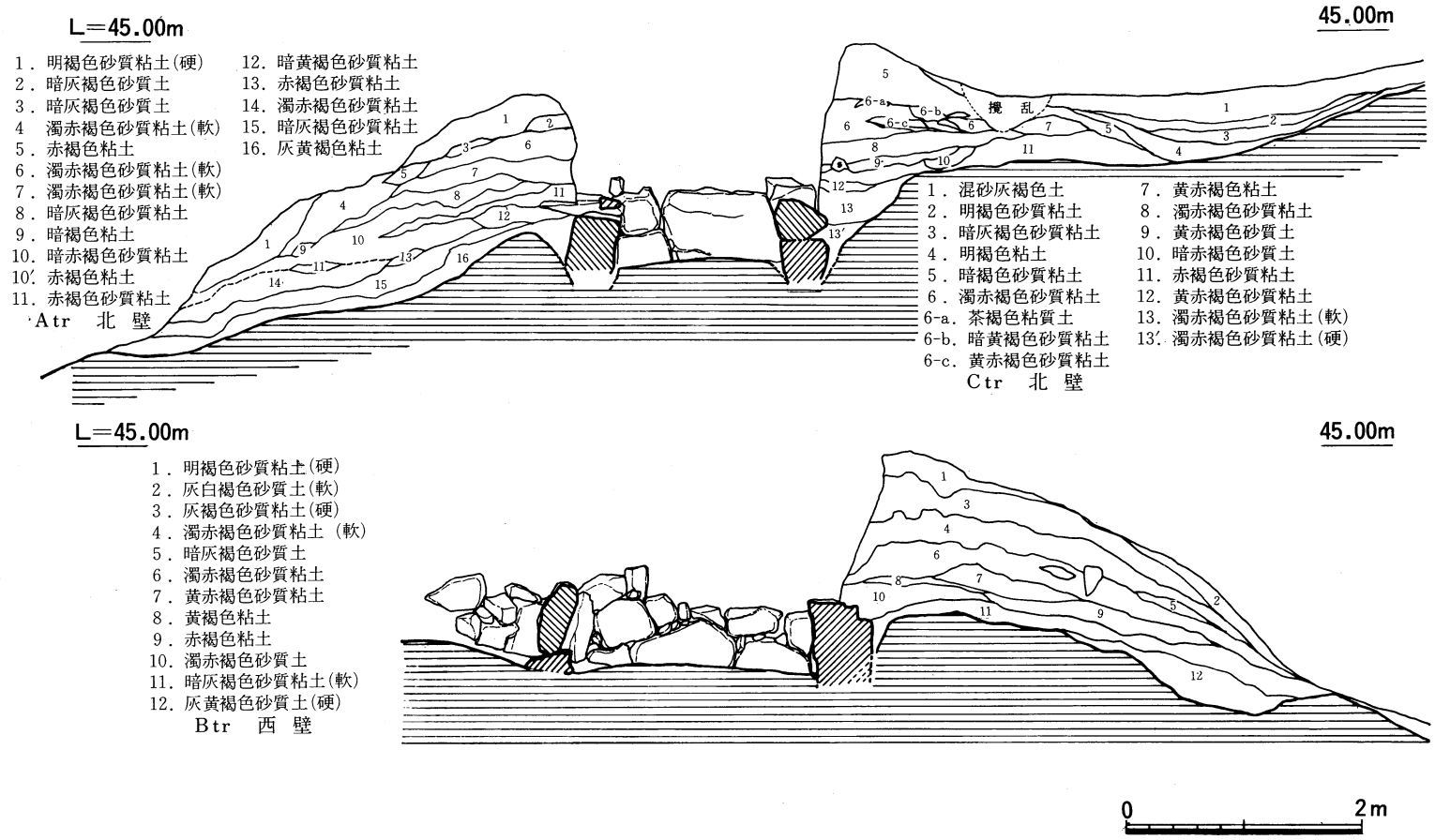


Fig. 11　2号墳墳丘土層断面図（上．A·Ctr 北壁　下．Btr 西壁　(1/60)

2．アラタ2号墳

1）墳　丘（Fig. 11）

地山整形　古墳構築に伴なう地山整形は，丘陵斜面の高い側（東南側）の馬蹄形に半周する溝の掘削と，その内側である墳丘基底面の地山整地の二つの造作が行なわれている。馬蹄形溝上端は，標高 43.75m を測り，地山整形は斜面の傾斜に沿って削平がなされている。溝の両外端は自然に消滅しており，その間約11.5m を測る。溝の東南部ではゆるやかな曲線を描き墳丘裾部へ続いており，上端と下端との比高差は南側で1.52m，北側で1.80m である。地山整形はこの溝によって区画された12.0×10m 程の円形の範囲である。

墳　丘　盛土は溝内側の整地面を基底にして行なわれており，大きく3層に分けられる。これは，①石室構築時の裏込め，②石室壁体から天井部まで被覆，③墳丘整形の三段階を表わしている。盛土のたたきしめは，②までの層位では顕著である。墳丘の現存高は玄室床面より 1.8m，径 9.0m を測る。復元高は約2.5～3.0m，復元径は現存径とほぼ同規模と思われる。

2）石室　（Fig. 12）

石室は単室の両袖型横穴式石室である。その主軸はN—40°

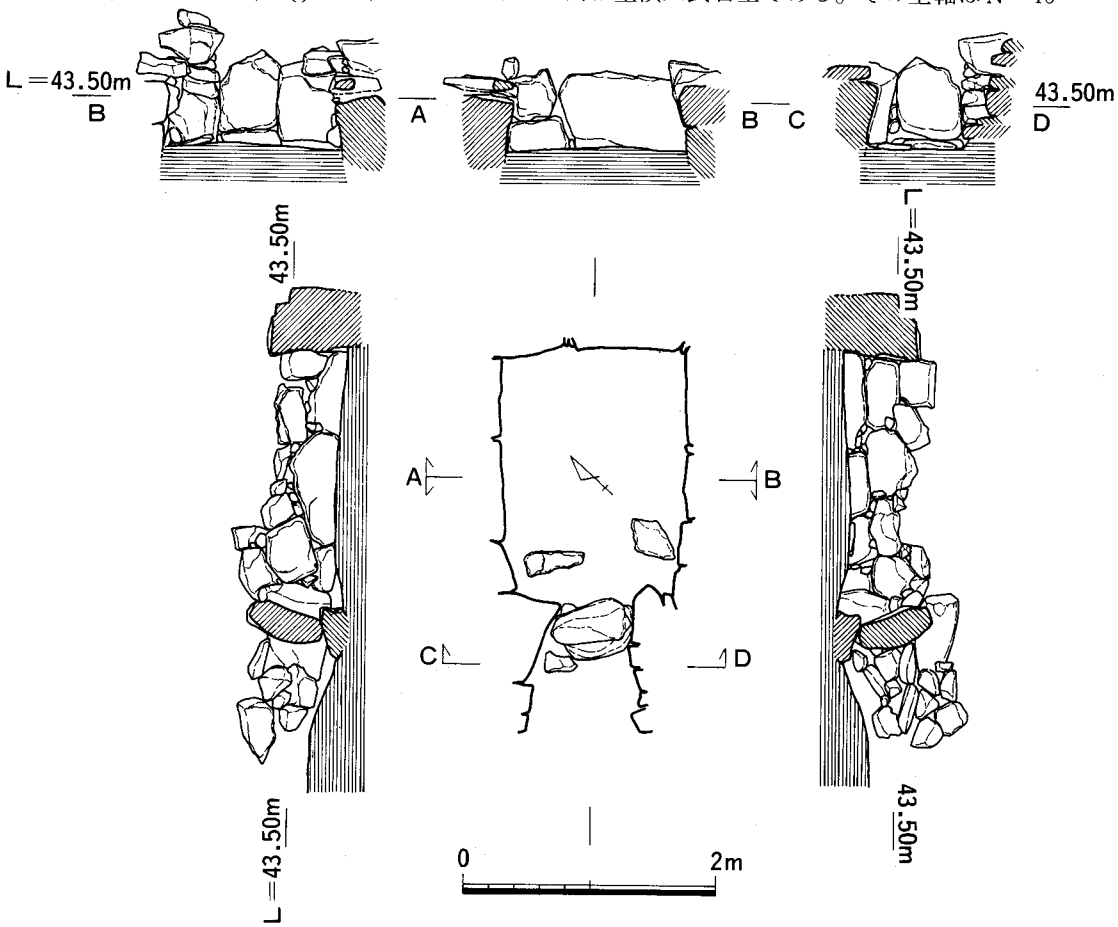


Fig. 12　2号墳石室実測図　(1/60)

30′ —Eの方向をとり南西方向に開口している。石室天井部，側壁上半部は欠失しており，腰石から3段目まで遺存しているのみである。石室長は,右側壁で3.03m ,左側壁で2.97m を測る。

玄　室　平面形はやや胴張りの長方形をなす。奥幅1.46m，前幅1.24m，右壁長1.92m，左壁長1.86m を測る。壁体の構築は，奥壁2石，右側壁4石，左側壁3石のやや大ぶりの割石（一部転石も用いられている）を据えて腰石とする。壁体は，腰石から内傾させて構築している。天井石までの復元高は，床面より 1.5m 程度であったと思われる。石材は花崗岩である。

石室掘り方　掘り方は溝に区画された整地面のほぼ中央に位置すると考えられる。壁面は45° 程度の角度で，Ctrで約70～80cmほど，Btr で50cm，Atr で約40～50cmほどの深さで掘りこまれる。形状は不明であるが羨道中央部よりその一隅が始まり，玄門あたりで一旦くびれる長方形をなすものと思われる。腰石は掘り方いっぱいに配置される。

羨道及び閉塞状況　羨道は玄門付近から除々に開いた「ハ」の字形の平面形をとり，床面は羨道端にゆくにつれせり上がっており，奥幅は梱石付近で0.58m，羨道端で0.90m を測る。壁体の構築は玄室と比べ粗雑で壁面の凹凸が激しい。閉塞石は，0.70×0.62m を測る扁平な割石を用いており，玄門に配された梱石の上に直接据えられていた。

3）遺　物（Fig 13・14）

わずか2点のみの出土である。Fig13の**10**は，器種不明であるが，刀子とも思われる。玄室内埋土より検出。Fig14の**12**は口径22.7cm，胴部幅45.1cmを測る須恵器甕である。口縁部は肥厚し外へ突き出ており，1本の沈線が下端に廻る。外面は平行叩き目で，内面はナデで仕上げる。

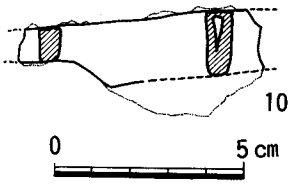


Fig. 13　2号墳遺物実測図　鉄器　(½)

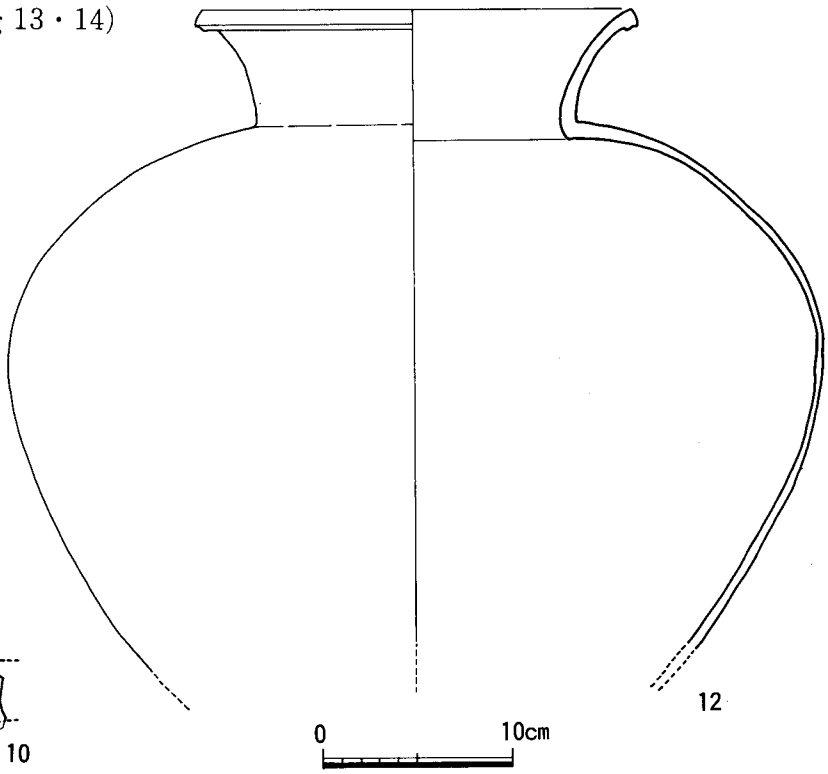


Fig. 14　2号墳遺物実測図　須恵器　(⅙)

3）アラタ3号墳

1）位置と現状

本墳は，北北東に延びる丘陵尾根の先端部に位置し，玄室床面で標高48.0m を測る。東側は人為的な削平による崖が接近し，北側から西側にかけてはやはり急峻な傾斜面となっている。発見当初は本墳周辺にかなりの量の石材が転がっており，墳丘も半分以上が林道造設時に破壊され消滅しているという状況であった。石室がどの程度遺存しているか懸念されたが，石室の掘り方が予想以上に深いものであったことが幸いし，破壊は深部まで及んでおらず，良好な状態で遺った複室の横穴式石室が検出できた。

2）墳　丘（Fig.15）

地山整形　本墳の地山整形は，丘陵尾根という立地上の特性から自然地形を利用してその造作を行なっているようである。すなわち，突き出た尾根頂部を削平し墳丘基底面を作り，その中央付近に，尾根走行方向に直交して石室を構築している。削平面は，さほど広くなく，14.0× 7.0m ほどの隅丸方形のプランをなしていたと思われる。

墳　丘　墳丘の遺存状況は悪く，Atr およびC tr付近にわずかに残るのみであった。墳丘盛土の基底は先述した削平面である。遺存状況が悪いため明確に把握できなかったが，墳丘はこの削平面の範囲内に盛土された，比較的規模の大きいものだったと推定される。盛土の形成過程は，石室構築時の裏込め，および側壁体の被覆の2段階が観察できた。盛土は，石室掘り方及び地山整形時に生じたバイラン土を用いている。石室に用いられた石材が大きいためか，石材固定のための小石や粘土は用いられていないが，石材の積み重ねに並行して行なわれた裏込めは，よく叩きしめられている。削平面までの埋土が終了すると次に側壁体から天井にかけての盛土が行なわれている。これと平行して墳丘の築造もなされていることが，水平に長く堆積している土層の状況によってわかる。墳丘の現存高は玄室床面より3.40m を測る。復元すれば，4.5～5m ほどの高さを有していたものと思われる。

3）石　室（Fig.16）

石室は複室の両袖型横穴式石室である。主軸をN—37°20′—E にとり北西に開口している。天井部，側壁上半部は欠失しており，腰石から二段目ないし三段目までが遺存している。石室はかなり深い掘り方内に構築されており，羨道部の先に，急な傾斜で北西方向に落ちる墓道が連結する。石室全長は右側壁で7.83m ,左側壁で6.96m を測る。石室石材はすべて花崗岩である。

石室掘り方　北北東へ続く尾根に直交して，石室掘り方は設けてある。掘り方は，玄室付近では，方形となり直線的であるが，副室の両側で若干外に張り出し，そして羨道部へすぼまりながら続いている。その規模は全長約9 m（羨道端まで），最大幅5.20m，玄室床面までの

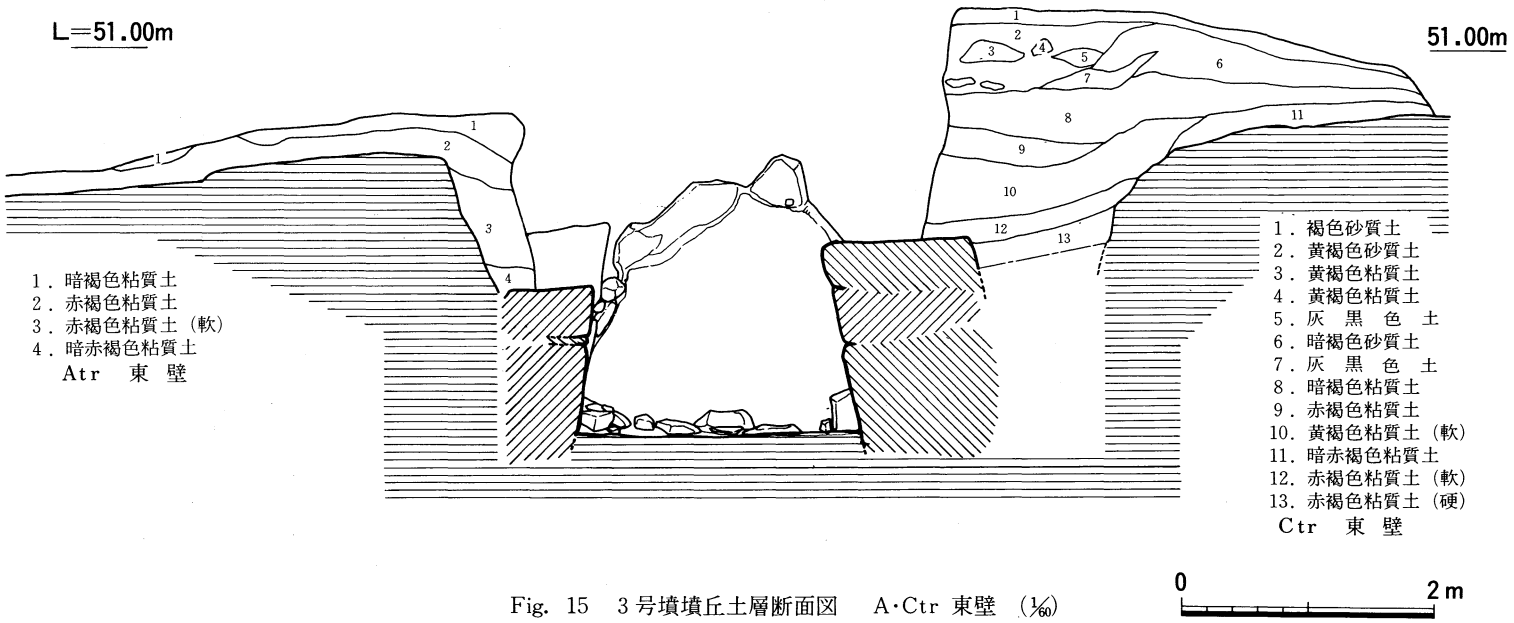


Fig. 15　3号墳墳丘土層断面図　A·Ctr 東壁（1/60）

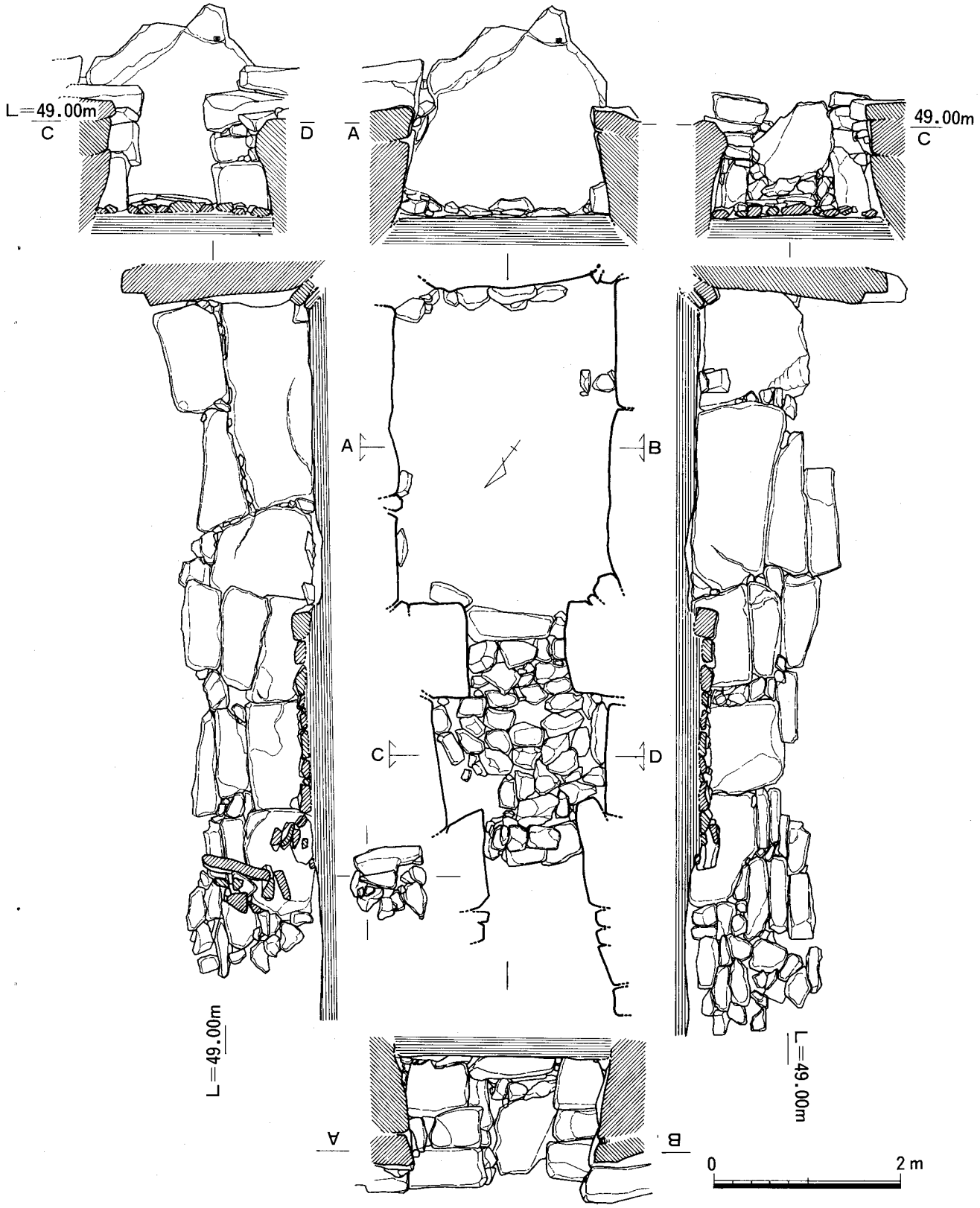


Fig. 16　3号墳石室実測図　(1/60)

深さは2.55m を測る。また深さは丘陵傾斜にそって低くなっており羨道付近では1.5～1.7m である。なお，梱石，腰石等の配置にあたっては，その安定を計るため一段深く掘り下げている。

玄　室　奥幅2.32m，前幅2.28m，右側壁3.45m，左側壁3.30m を測る。平面形は長方形であるが奥壁右隅角がやや内側にせり出している。壁体はまず奥壁に高さ2.30m，幅2.10m を測る扁平な一枚岩を据えた後，両脇から挾みこむように左右両壁の構築が行なわれている。腰石は，左右両壁とも２石ずつ据えている。奥壁と腰石には，根石が基底面との間に挿入してあり，それらの安定を計っている。腰石からすでに内傾されており，３段目まで残っている壁体の水平面に対する角度は80°強を測る。壁体の石積みは両壁とも徐々にせり出させながら かなり整美に面を合わせている。床面の敷石は盗掘時にかき出されており原位置をとどめるものはなく，攪乱は地山面まで及んでいる。石室の復元高は2.50～2.70m ほどと考えられる。

副　室　玄門部奥幅1.90m，羨門部前幅1.70m ,右側壁長1.06m,左側壁長1.45mを測る。長軸が石室主軸に直交する長方形をその平面形とするがやや歪んでいる。床面は二重床となっており，図示した敷石は上位面のものである。追葬時に設けられたと思われる。腰石は左右壁とも１石であり，いずれも内傾して据えている。前左隅角の壁にもたれるように提瓶（完形）**50** が，左側壁中ほどに束ねた状況で鉄鏃がそれぞれ出土している。

羨道および閉塞状況　羨道は，前幅1.45m，奥幅1.03m を測りやや開き気味となって開口している。1.0×0.45m ほどの転石を両壁に据えその間に第２梱石を配して副室と分かち羨道部を形成している。両壁の構築は粗雑で，ひとかかえほどの転石を持ち送りながら積み上げている。閉塞石は，羨道に堆積した土砂の上に据えて立てかけられており追葬時の所産かと思われる。扁平な平石を立てかけて閉塞した後人頭大の転石を無造作に積み重ねている状況であった。

墓　道　羨道に連接して，西北へ向って延びる墓道が設けられている。最大幅 2.2m，右壁で7.80m，左壁で6.70m を測る。深さは羨道端部で1.20m を測るが傾斜に沿って次第に浅くなり，その先端では消滅してしまう。断面形はやや開いたＵ字状をなす。地形から判断して，墓道は１号・２号墳の方向へ等高線（44m ないし43m）に沿って，徐々に低くなりつつ続いていたものと推定される。

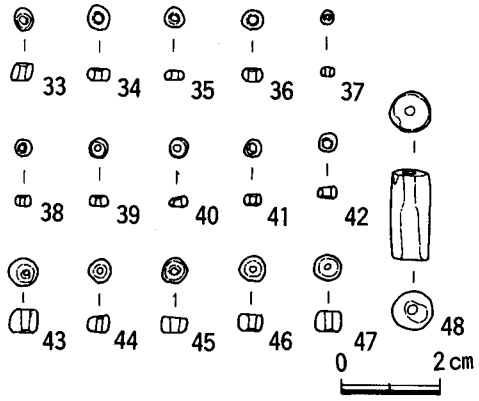


Fig. 17　３号墳遺物実測図　小玉　管玉　(⅔)

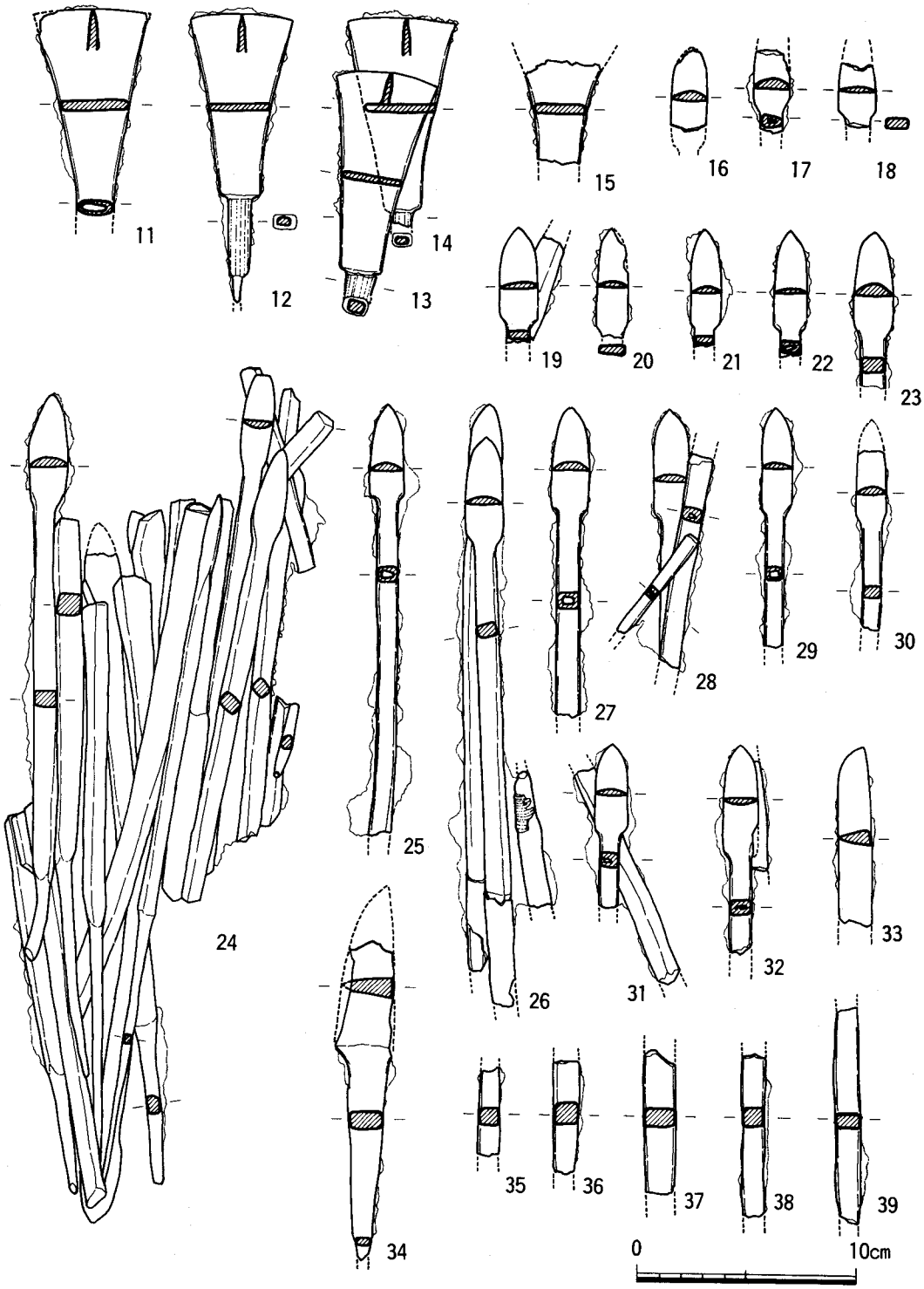


Fig. 18　3号墳遺物実測図　鉄製品　(½)

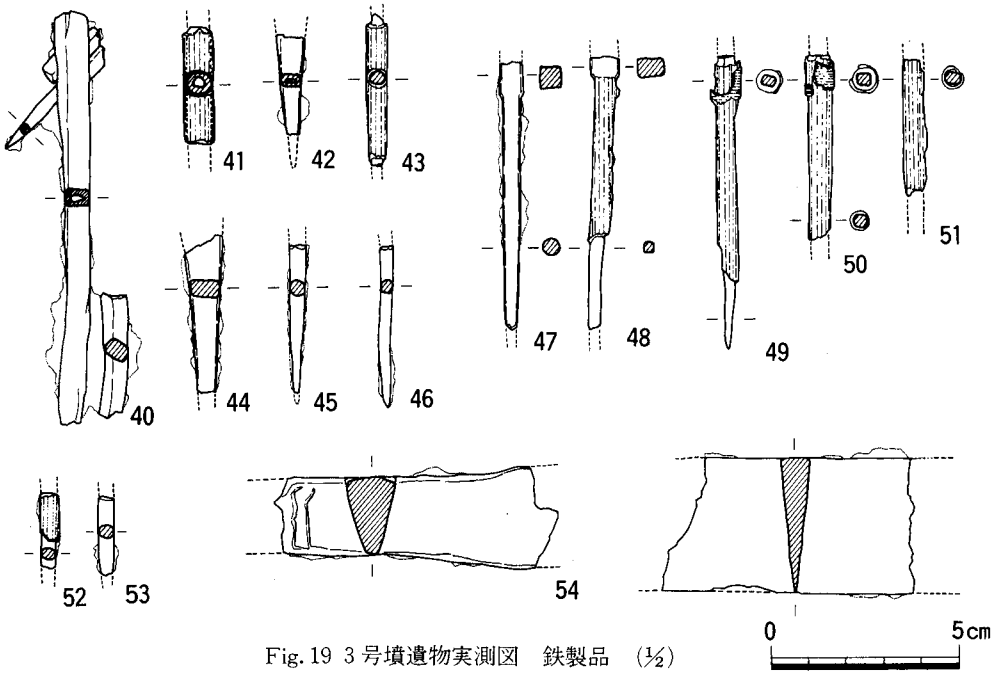


Fig. 19 3号墳遺物実測図　鉄製品　(½)

4）遺　　物 (Fig.17～22)

出土状況　小玉，管玉，鉄鏃，大刀，刀子，杯蓋，杯，無蓋高杯，甕，平瓶，大甕，提瓶などが出土している。小玉，管玉，大刀，刀子は水洗選別によって玄室床面直上の埋土より検出された。副室の羨門部左隅角に検出された提瓶（Fig 22の**50**）を除いた他の須恵器はすべてⅠ区ないしⅣ区の墳丘から検出されたものである。Ⅰ区では，杯群，甕と高杯，大甕の3群に別れ，ほぼ供献時の状況で検出された。Ⅳ区は盗掘によって攪乱を受けており，したがって遺物は原位置を保っていなかった。鉄鏃は束ねられた状況で副室の左側壁際の中央に検出されたが，先述した二重床の下位面にあたる床面上に遺存していた。追葬が何度行なわれたか不明であるが，少なくとも，当古墳が数回にわたって葬送に用いられたことを物語るものであろう。

小玉・管玉 (Fig.17)　小玉は15点，管玉は1点出土した。**33**～**42**は青緑色を呈し，透明である。**43**～**47**は濃紺色で半透明。46は非常に濃く一見黒色を呈す。いずれもガラス製で，裁断面，体部の磨研は美しく，鈍い光沢を放つ。管玉**48**は，泥質粘板岩製で，一方向より穿孔したものである。風化が進んでおり，表面は灰白色を呈す。

鉄製品 (Fig.18・19)　鉄鏃　30本以上検出されている。**11**～**15**は平根の斧箭式でいずれも円頭をなす。細部の形態もほぼ同一である。円頭をなす頭部からやや内湾しつつ関を造り，茎部へと続き，篦被をもたない。茎部は扁平な方形をなす。頭部幅は3.3cm，身長5.5cmをいずれも測る。なお**12**～**14**は茎部に木質が残る。**12**～**32**は尖根式で，身はすべて柳葉形をなす。形態における細部の変化は少なく法量に若干差があるのみである。**24**の中に1本完形のものがある。

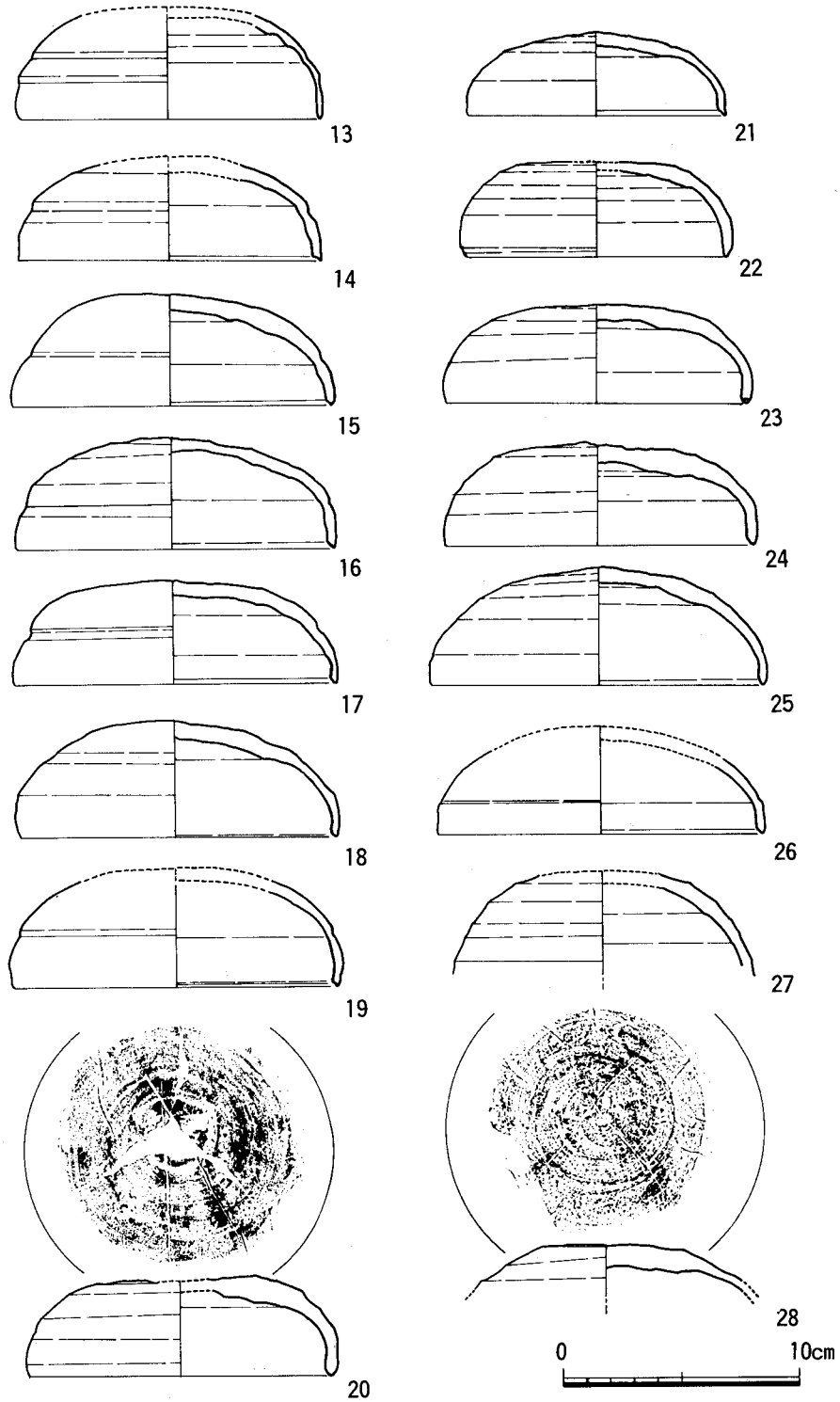


Fig. 20　3号墳遺物実測図　須恵器Ⅰ（⅓）

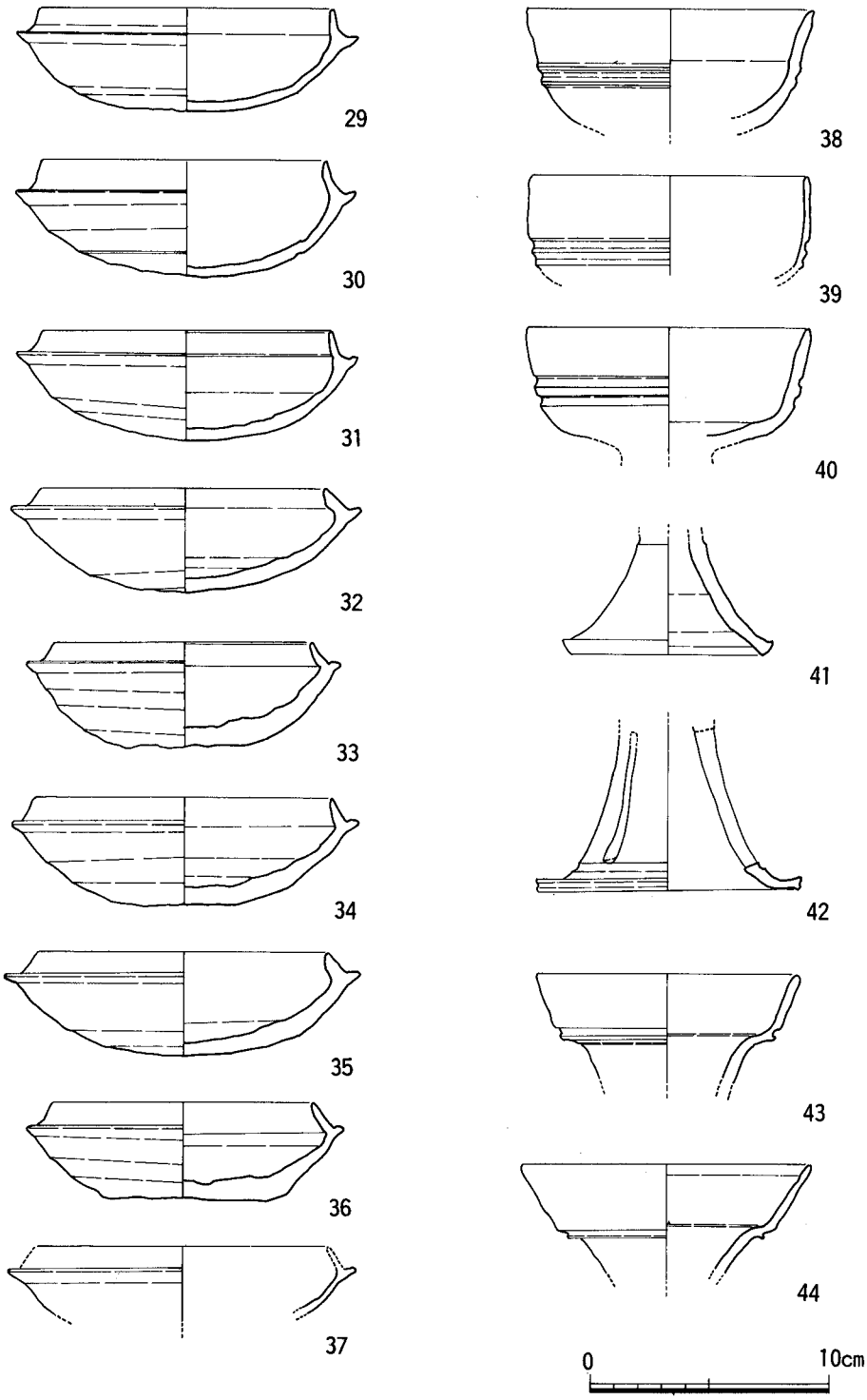


Fig. 21　3 号墳遺物実測図　須恵器Ⅱ　(1/3)

身から茎部端まで21.2cmを測り，身長3.1cm，身幅1.1cm，篦被10.0cm，茎部8.1cmである。**33**は尖根の片刃式である。身の断面は二等辺三角形をなす。**35**～**53**は尖根式の篦被と茎部である。刀子**34**は，復元長約12.0cmを測り小振りの部類に属する。直刀**54・55・54**は茎部である。いずれも断面が二等辺三角形をなす。

須恵器（Fig.20～22）

杯蓋(13～28)　形態上の属性より7類に分類できる。Ⅰ類　**14・15・16・17・18・19・22 25**　は口径13.2～13.9cm，器高4.1cm～4.9cmを測る。口縁部の形態からa 類　**14・15・16・17・19**　とb 類　**18・22・25**　に細分される。丸みのある天井部と体部との境に凹線をいずれも有し，焼成はやや甘い。a 類は口縁内面に鈍い段を，b 類は丸くまとめられる。Ⅱ類　**20・23・24**。口径12.6～12.8cmで，器高4.1cm～4.5cmを測る。全体的に鈍重な作りで，胎土が粗く器面は赤味がかった灰色を呈す。Ⅲ類　**13**　復元口径13.2cm，器高 4.8cm。天井部と体部との境には段を有す。口縁は丸く仕上げられる。Ⅳ類　**21**　口径11.1cm，器高 3.6cm。焼成，調整はⅢ類に似るがより小型である。口縁内面に鈍い段を有す。Ⅴ類　**26**　，Ⅳ類　**27**　，Ⅶ類　**28**は小片のため口径，器高とも不明であるが，いずれも焼成よく天井部にはヘラ削りが残る。ロクロ回転はⅠ類が逆時計方向の他はすべて時計回りである。

杯（29～37）　杯蓋の分類基準にあわせて，大きく3類に分類できる。Ⅰ類　**29・30・31・32・35**　は口縁形態によりa 類　**29・30・31**　とb 類　**32・35**　とに細分できる。a 類は，口径12.0cm強，立ち上がり1.1cm～1.2cm，器高4.5～5.2cmを測る。口縁はやや内傾して立ち上がり，受け部はやや上向きに横へ伸びる。b 類は，a 類よりもやや部厚く作られ，口縁部がかなり内傾するものである。焼成，胎土はa 類と酷似する。Ⅱ類　**33・34・36**　形態的にはⅠb 類に類似するが，胎土粗く，器表面が赤味がかる。Ⅲ類　**37**　非常に薄手であり，作りが鋭い。小片のため口径等は不明である。

高杯(38～42・48・49)　いずれも無蓋である。3類に分類できる。Ⅰ類　**38～40・42**　底の深い杯の体部に二本の沈線を有するものである。口縁が直立するもの　**39**　とやや外反するもの　**38・40**　とがある。**42**は，それらの杯の脚部と考えられる。3方より透しがはいるもので口縁端は外へかなり開く。Ⅱ類　**49**　は，杯の体部がその中央で若干屈曲し，屈曲部に鈍い沈線がはいる。Ⅲ類　**32**　全体的に丸みを帯びた作りであり，杯部は浅い。脚部にカキ目が残る。

瓶(43・44・47)　**43・44**は，外反した頸部が段を作って外方へやや内湾気味に伸びるもので，口縁は丸くおさめる。47は，高杯48とセットで出土したものである。頸部および体部に櫛状施文具による波状文が施こされている。**平瓶（46）**　口頸部が漏斗状をなす。体部はゆるやかに湾曲し，底部は平担となる。**提瓶（50）**　体部の肩に環状把手がつく。口縁端は上方につまみ出され，内面には鈍い沈線が，また外面には2本の沈線がはいる。体部前面には，カキ目が，側面には，叩き目が残るがナデ消しされる。

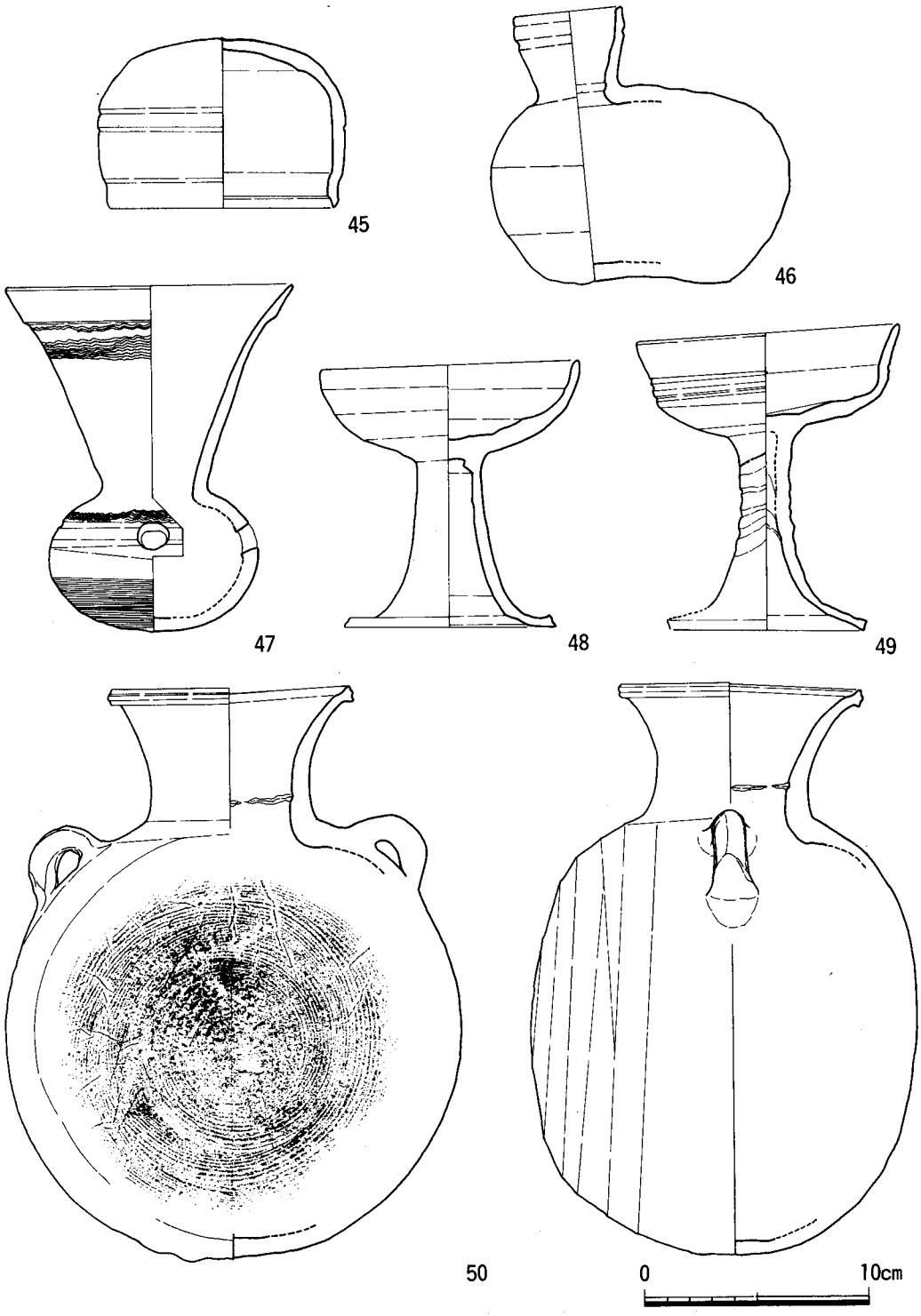


Fig. 22　3号墳遺物実測図　須恵器Ⅲ　(1/3)

4．アラタ4号墳

1）位置と現状

本墳は南々西から北北東にのびる尾根上に占地し，北方18m の位置に3号墳，南方13m の位置に5号墳があり，これら3基の古墳は至近の位置関係をもって一線上に並ぶ。調査前の状況は，墳丘の保存状態は良好であったが，頂部が陥没しており石室は相当の破壊が予想された。

2）墳　丘（Fig. 23）

地山整形　墳丘を除去しない調査のため詳細は不明であるが，トレンチ観察によれば，尾根頂部の自然地形を利用し，等高線に直交する北側を深く，平行する東西は簡単に地山整形を行なっている。北側の墳丘基底面は東西に比べて中心部から近く，地山を深く削ることによって，墳丘の盛土と同じ効果をつくり出している。

墳丘　墳径は13.5m，石室基底からの現高2.75m を測り，東西の墳丘基底は地山整形とほぼ一致する。北側は玄室中心より4.5m の位置から盛土が行なわれ，整形により見かけの墳丘は同じく6.0m の位置より始まる。盛土は地山と同質の赤褐色，黄褐色粘土質を互層に盛っている。

3）石　室（Fig. 24）

等高線と平行に構築した横穴式石室であり，主軸をN —43°—E にとりほぼ南々西に開口する。平面長方形の玄室に短かい羨道を連結する両袖型単室構造のもので，石室全長は3.95m を測る。構築石材は全て花崗岩を用いている。

石室掘り方　石室周囲の地山を傾斜角約60°で掘っており，石室基底面からの掘り方上場までの高さは0.80m ～1.10m の間である。平面は不整長円形で，玄室部では幅約4.0m と広く，羨道になるにつれてすぼまり，羨道端付近で墓道掘り方と一致する。

玄室　奥幅1.70m，前幅1.65m，右壁長2.30m，左壁長2.40m を測り，平面はやや胴張りの長方形である。周壁の石積みは，各壁ともに幅0.50m ～1.00m，高さ0.6m ～0.9m の加工石材を腰石として据え，その上に小ぶりの割石，転石をひかえ積みするものであるが，2段までしか残存しない。腰石は奥壁2枚，左右両壁3枚の石材を組み，前部に同様な石材を両側より張り出して袖石となす。玄門部床には，大小2個の角石を横たえて梱石となしている。

羨道および閉塞状況　石室掘り方斜面に小ぶりの石材を数段積み上げて羨道をつくる。羨道上面の高さは玄室より約0.50m 高く残り，玄門部天井石1枚が構架されていた。袖石外端からの羨道長は左壁で1.05m，右壁で1.36m，奥幅1.07m，前幅1.00m を測る。閉塞は玄門部から行われており，梱石に 0.6m × 0.5m，厚さ0.25m の扁平な板石をかませるように立て，そ

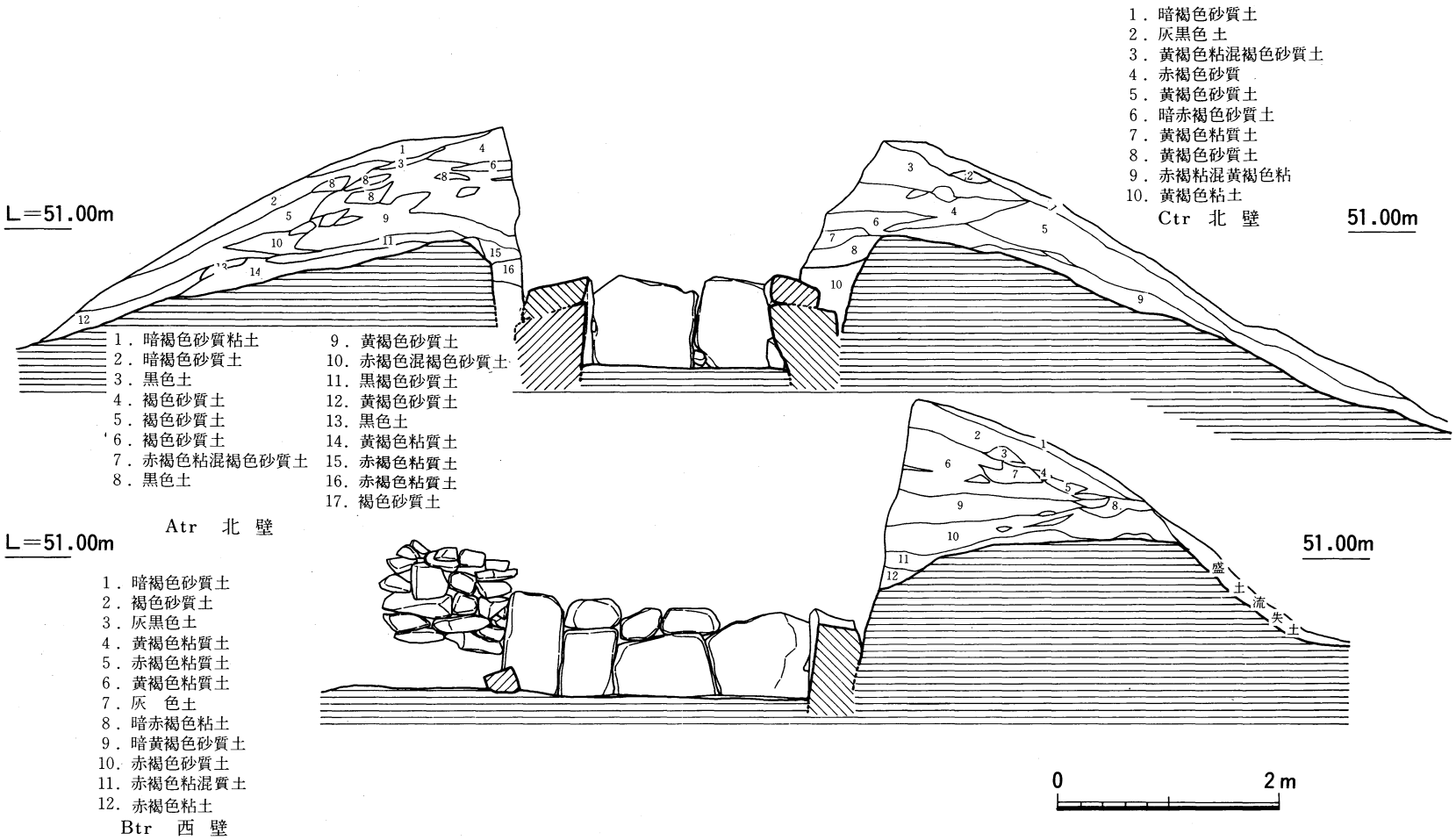


Fig. 23　4号墳墳丘土層断面図上．A・Ctr 北壁　下．Btr 西壁(1/60)

の上に小形の転石を乗せ，さらに人頭大の転石を積み上げて行なっている。

墓道　石室掘り方に連続しやや西方に偏しながら直線的にのび，羨道端から約4.5mで5号墳の溝に切られている。羨道端からの長さは約4.5m，断面は逆台形を呈し，先端はすぼまる傾向を見せ溝との出合部の幅は0.75mを測る。

馬蹄形溝　3号墳とのほぼ中間の位置に，尾根西側傾斜面付近より西から東へ掘られた溝状遺構を検出した。幅約1.5m，深さは0.25mで断面浅皿状を呈す。この溝は4号墳を囲むというよりは東方へのびており，墓道あるいは3号墳と4号墳を画すための溝であろうか。

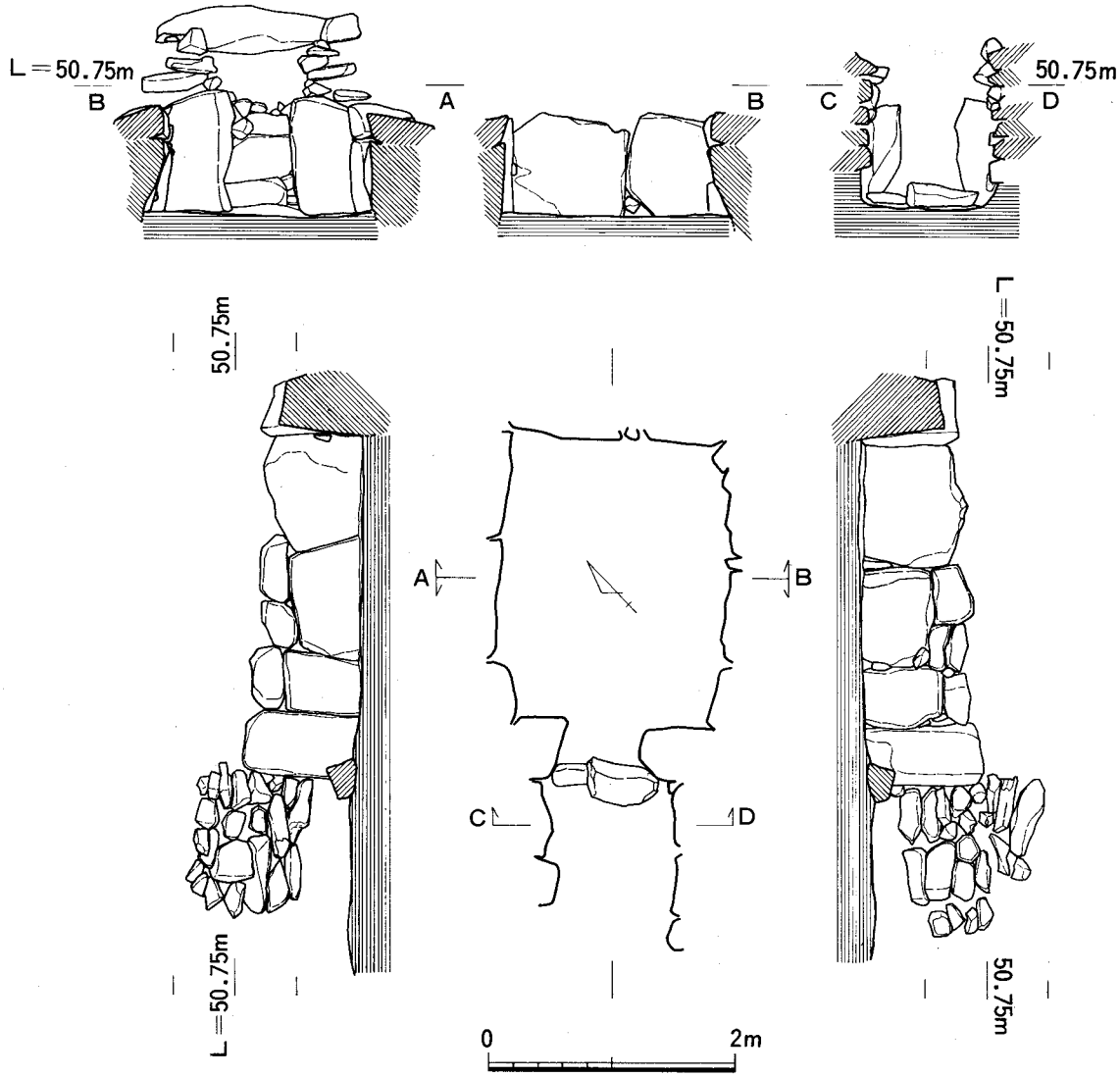


Fig. 24　4号墳石室実測図　(1/60)

4）遺　物

出土状況　石室内からの副葬遺物の出土は無く，Ⅰ区とⅣ区の墳丘裾から供献用須恵器，土師器が出土し，馬蹄形溝埋土中からも少量の須恵器，土師器片が出土した。

須恵器（Fig. 25～Fig.27）　蓋杯21個体以上，高杯３個，提瓶破片２点，瓶１個，大甕１個の器種がある。**蓋（51～61）**　形態上の諸特徴から３類に分類できる。**Ⅰ類**は口径が14.6cm内外，器高4.0～4.2cmの間にあり，天井部と体部の境は稜をつくらず，凹線をめぐらし境となす。口縁端内側には鈍い段を刻み，天井部の回転ヘラケズリは，体部の２分の１の範囲にあり，口辺部内外ともヨコナデ調整である。**55**と**57**がこの類である。**Ⅱ類**は口径，器高が各々13.0cm～14.0cm，器高3.8cm～4.5cmと小型化し，口縁端内側の段も退化する。**51，52，53，56，58，60，61**が本類に入る。**Ⅲ類**は口径12.8cm前後，器高3.3cm前後でさらに小型となる。**54，59**が本類に属する。**杯（62～71）**　３類に分類できる。**Ⅰ類**は**62**だけで，口径14.2cm，器高4.1cmを測り，他の類に比べて大型で蓋受けが長く，起ち上がりが急である。**Ⅱ類**は**Ⅰ類**よりも口径が小さくなり，蓋受けの起ち上がりは短かく内傾度を増し，端部はそのまま収める。**63，64 67，68，71**が**Ⅱ類**に含まれる。**Ⅲ類**は非常に小型化しているもので，口縁端内側に段を残すもの（**65，69**）とそのまま収めるもの（**66，70**）の２類に細分できる。これらの蓋杯の中で**22**と**23**がセットとなって出土している。**無蓋高杯（72，74）**　平坦気味の底部から外広する口縁に続く杯部に細長くラッパ状の脚を接合するもので，**72**は底部に１段，**74**は２段の稜をつくり**73**は波状文をめぐらす。各々の器高は，**72**が14.7cm，**73**が13.1cm，**74**が17.2cmを測り，脚の透し孔は３方にあり，**72**のみが１段，他は２段である。調整はナデが主であり，**72**は脚裾から底部下半までカキ目が施されている。**提瓶（75～76）**　把手部の破片であり，環状をなさず，釣手状をなす。胎土は良好，焼成は普通で器面は黄灰色を呈す。**瓶（77）**　球形の体部に外反する口頸部を接合する。口縁下は段をなし，口縁部はやや内湾して端部は平坦面をつくる。底部下半はナデ，上半部から口縁部にかけてカキ目調整し，口頸部はさらに櫛描波状文を配す。口径11.0cm，器高13.3cmを測り，体部と口頸部の比は１：１である。**甕（78）**　口辺部を欠いた大甕で，丸底の底部から卵形の体部が続く。現高57.0cm，最大径59.6cmを測り，外面は格子文の叩き，内面は同心円の叩きを施す。焼成は普通，器面は灰色を呈す。

土師器（Ｈ１～Ｈ４）

いずれも高杯であり，大型と小型の２種類ある。**Ｈ１**は杯部の破片であり，底部に大きく外湾して開く口縁部を接合する。**Ｈ２**は口径15.6cm，復原器高16.5cmを測り，杯部に長い脚を連結する。杯部の形態は**Ｈ１**と似るが，口縁の延びがやや小さい。脚部は屈折して外開する。**Ｈ３**は杯部は内湾し，**Ｈ４**は脚が短かく裾の開きが大きい。これらの土師器の調整はすべてヘラミガキであり，胎土は精良，色調は赤褐色を呈する。

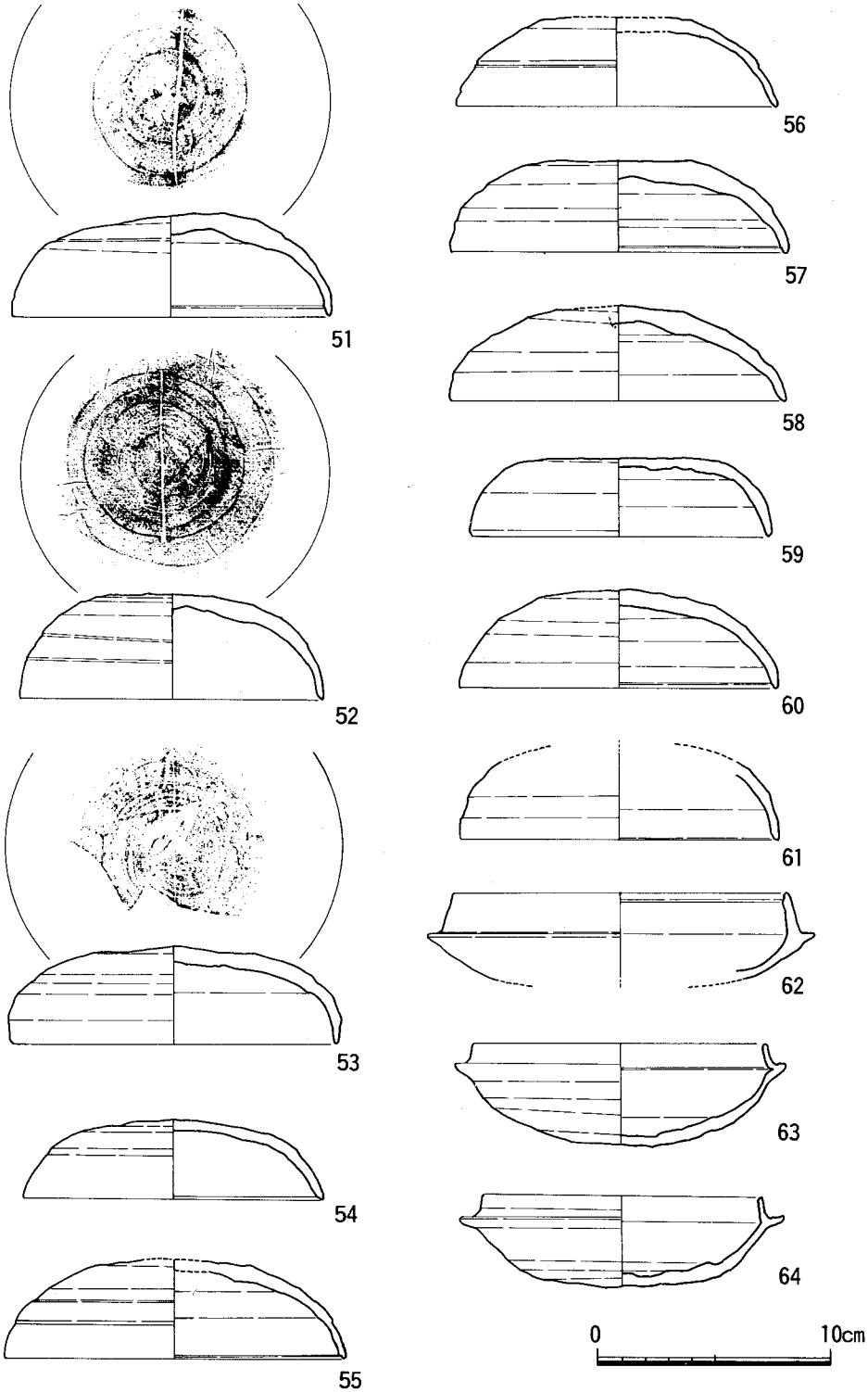


Fig. 25　4号墳遺物実測図　須恵器Ⅰ　(1/3)

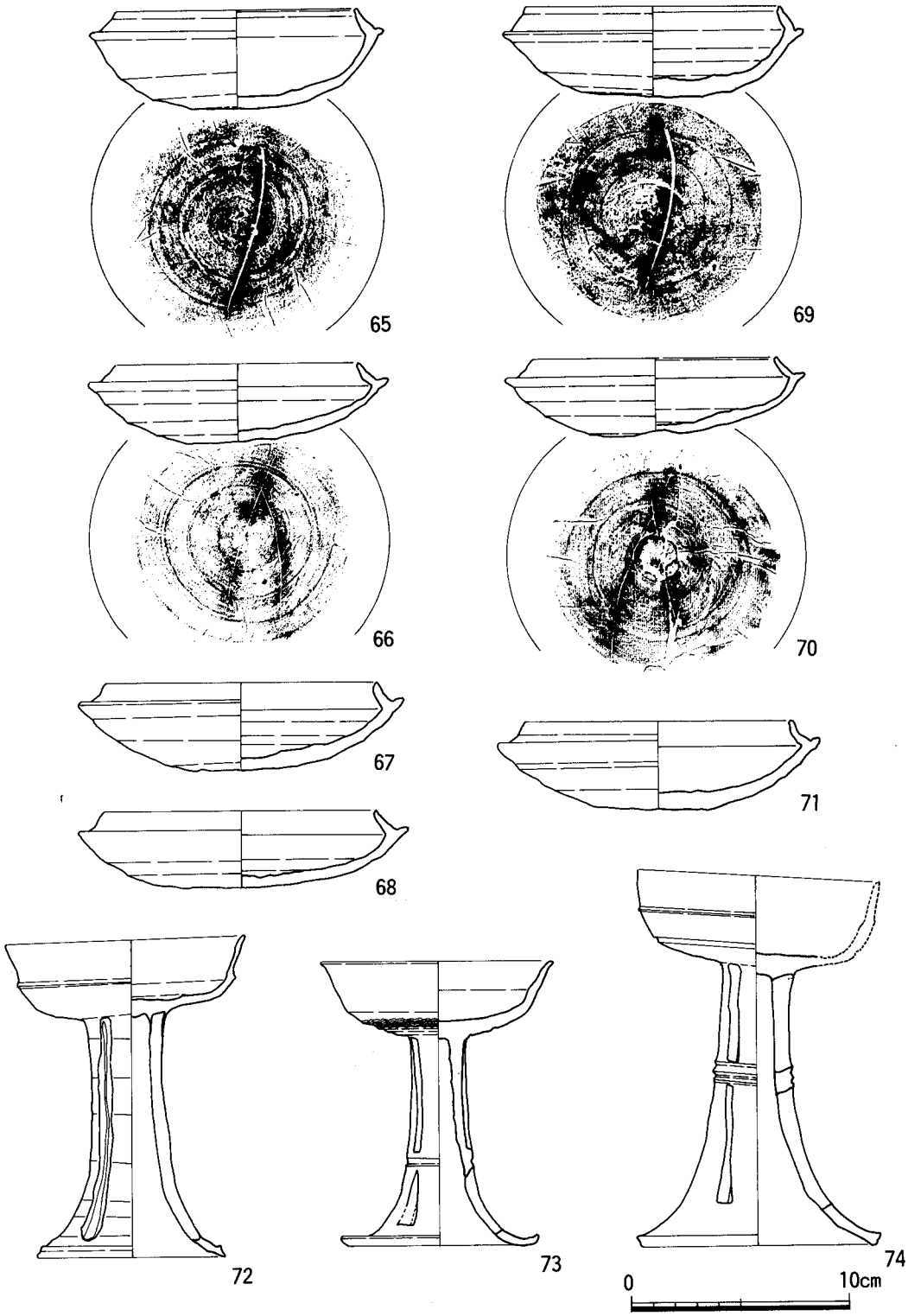


Fig. 26　4号墳遺物実測図　須恵器Ⅱ　(⅓)

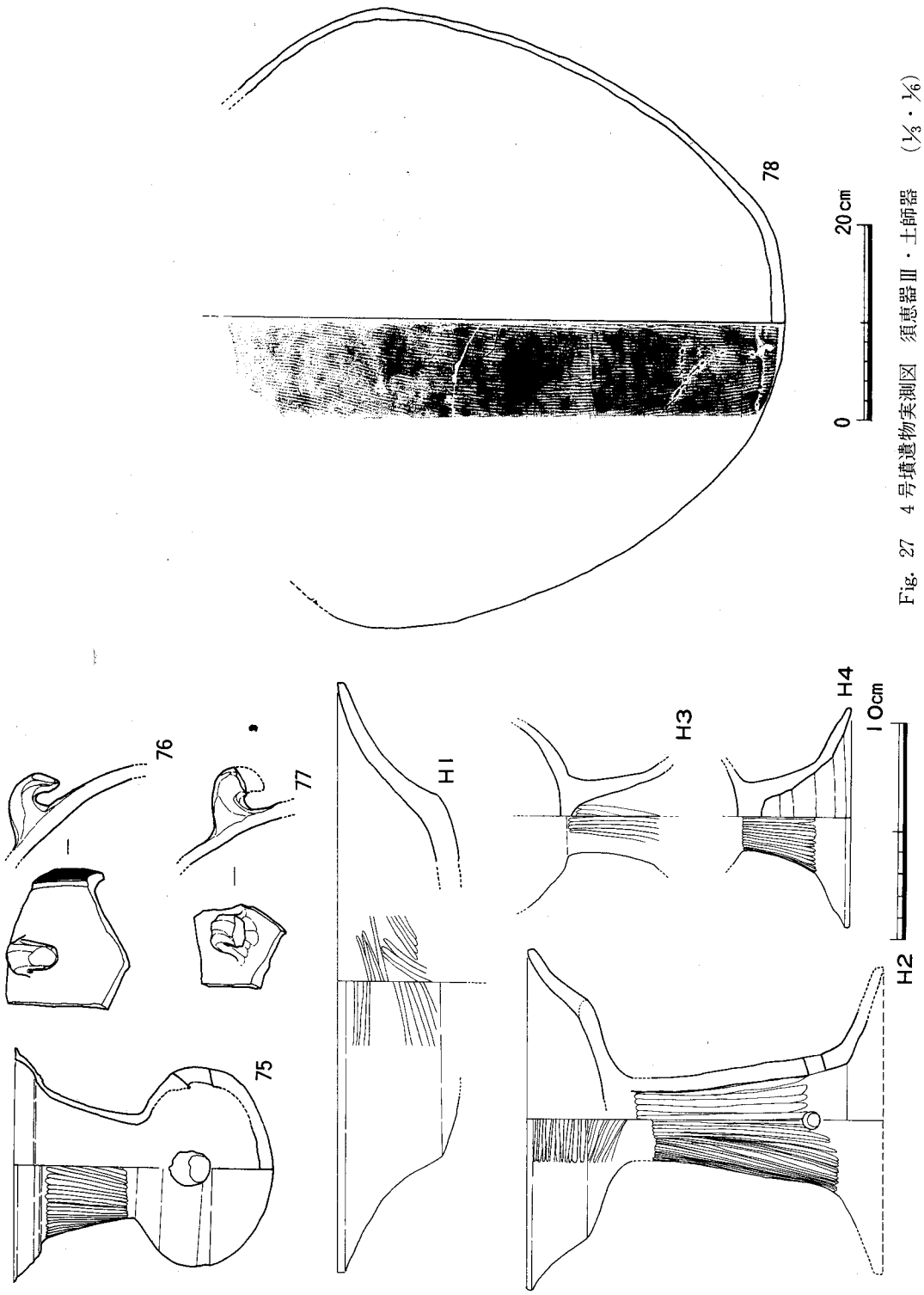


Fig. 27　4号墳遺物実測図　須恵器Ⅲ・土師器　(1/3・1/6)

5．アラタ5号墳

1）位置と現状

本墳は，独立したように高まっている丘陵尾根の南端にあたる位置に立地しており，4号墳及び5号墳と溝を介してそれぞれに対峙する。墳丘の遺存状況は本墳がもっとも良好であり，往時の墳形をよく留めていた。しかし他の古墳同様盗掘を受け，墳丘頂部は陥没していた。

2）墳　丘（Fig. 28）

地山整形　トレンチ観察のため十分な検討はできなかったが，3号墳同様の尾根頂部の削平が考えられる。その範囲は，石室の主軸方向に約12m，それと直交して8～9mほどで，墳丘北側裾部に設けられた馬蹄形溝により区画されたものと思われる。

墳丘　現存径約9.70m，玄室床面から約1.70mを測る。各トレンチで，盛土の堆積状況は異なった様相を呈しているが，ほぼ裏込め，石室の被覆および墳丘形成の過程が観察できる。Atrにおいては，石室掘り方はなく，整地面から盛土を行なっており，したがって裏込めを行なう代りに，腰石の高さまで土砂を叩きしめながらいったん構築した後，墳丘形成に移っている。B，Ctrでの土層の整った堆積と比べ，Atrで乱れているのはこのためである。

3）石　室（Fig. 29）

石室は単室の両袖型横穴式石堂である。その主軸をN－31°40′－Eにとり，南南西に開口する。その平面形は，ややすんづまりの長方形の玄室に，羨道端がやや開き気味で「ハ」の字状をなす羨道を付した形態で，規模は異なるものの2号墳にその平面形は似る。

石室掘り方　堀り方は，約3mほど離れた地点から，馬蹄形溝を背にして，半円状に掘削されているものと思われる。その床面は，石室主軸方向に沿って徐々にせり上がり，また尾根の西側斜面にあたる左側壁ではほとんど整地面のままの高さで続いている。掘り方の深さはBtrで1m強を，Ctrで0.6～0.8mを測る。腰石を据えるにあたってはさらに一段掘り窪め，その安定を計っている。

玄室　平面形は長方形である。右袖石が若干内へ張り出しやや歪んでいる。奥壁および側壁にはそれぞれ2石の大石（割石）を横位に据え腰石とする。二段目から上は，やや小ぶりの石を，その目路が水平に通るように腰石との間に小石をつめこみ調整しつつ，積み上げている。二段目までは，壁体は垂直に立っている。

羨道および閉塞状況　羨道は，2号墳と同様に「ハ」の字状に開く平面形をなすが，やや長めとなっている。玄門近くに第2梱石を配し，羨道を2分するが，これは，1・6号墳と共通した様相を呈すものである。床面には敷石がなされている。閉塞石は，0.72×0.80cmを測る，

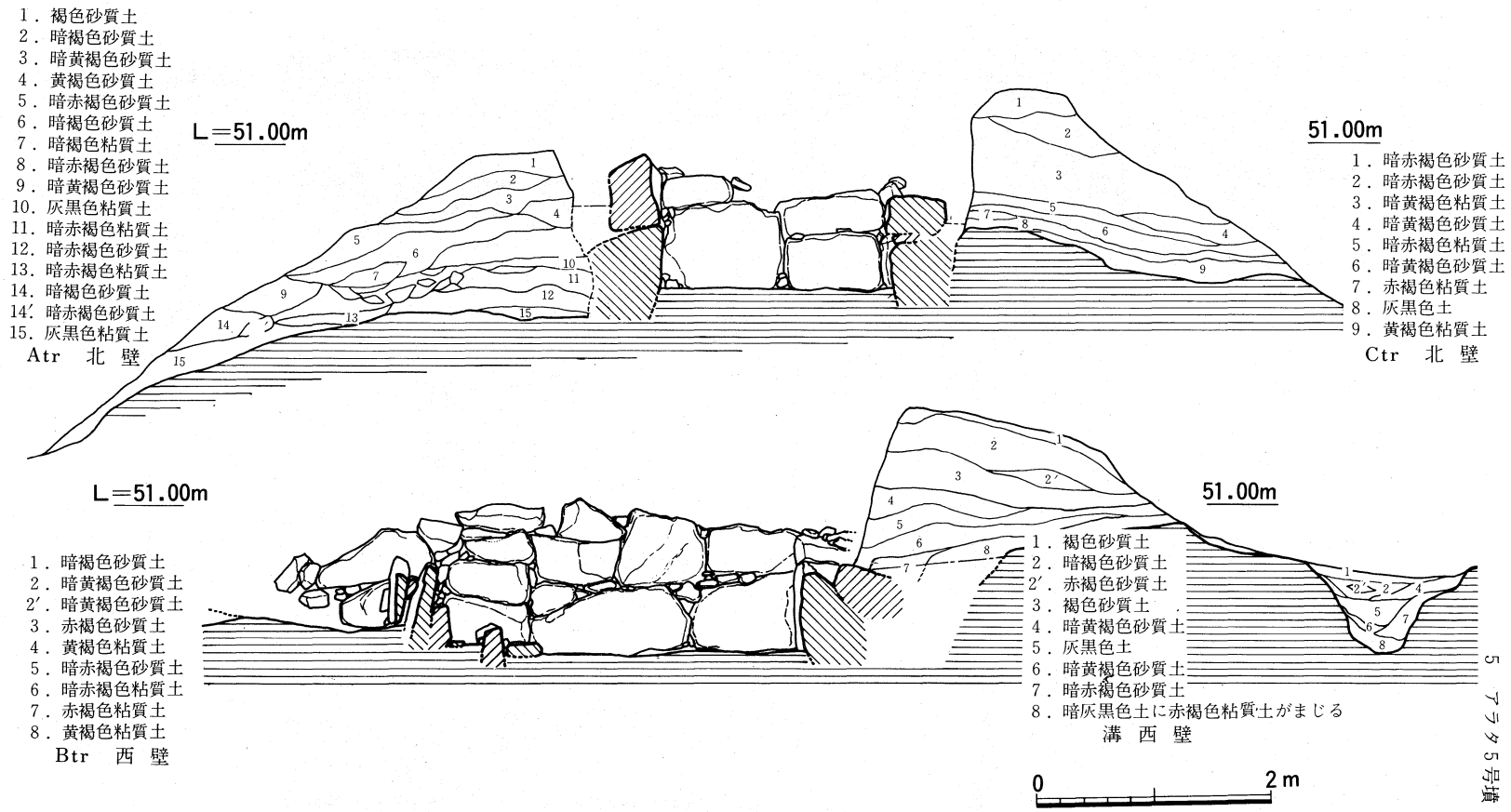


Fig. 28　5号墳墳丘土層断面図　上．A·Ctr 北壁　下．Btr 西壁　(1/60)

扁平な割石を用いており，第２梱石を根石として，それにたてかけ閉塞している。

馬蹄形溝　　墳丘北側から北東側にかけて，墳丘裾に接しながら断面U字状の溝が設けられている。これは４号墳の墓道を切っており，５号墳と４号墳の先後関係の１目安となるものである。また，１号および２号墳の溝が，地山整形時の掘り方の一部であり，整形面上の墳丘盛土の結果，溝状の形態をなすのに対して，本墳の溝は，明らかに墓域設定の意図を持って設けられたものと考えられる。なお溝の幅はその中央で1.85m，深さ0.78m を測り，両端は削平されており途中で消滅している。

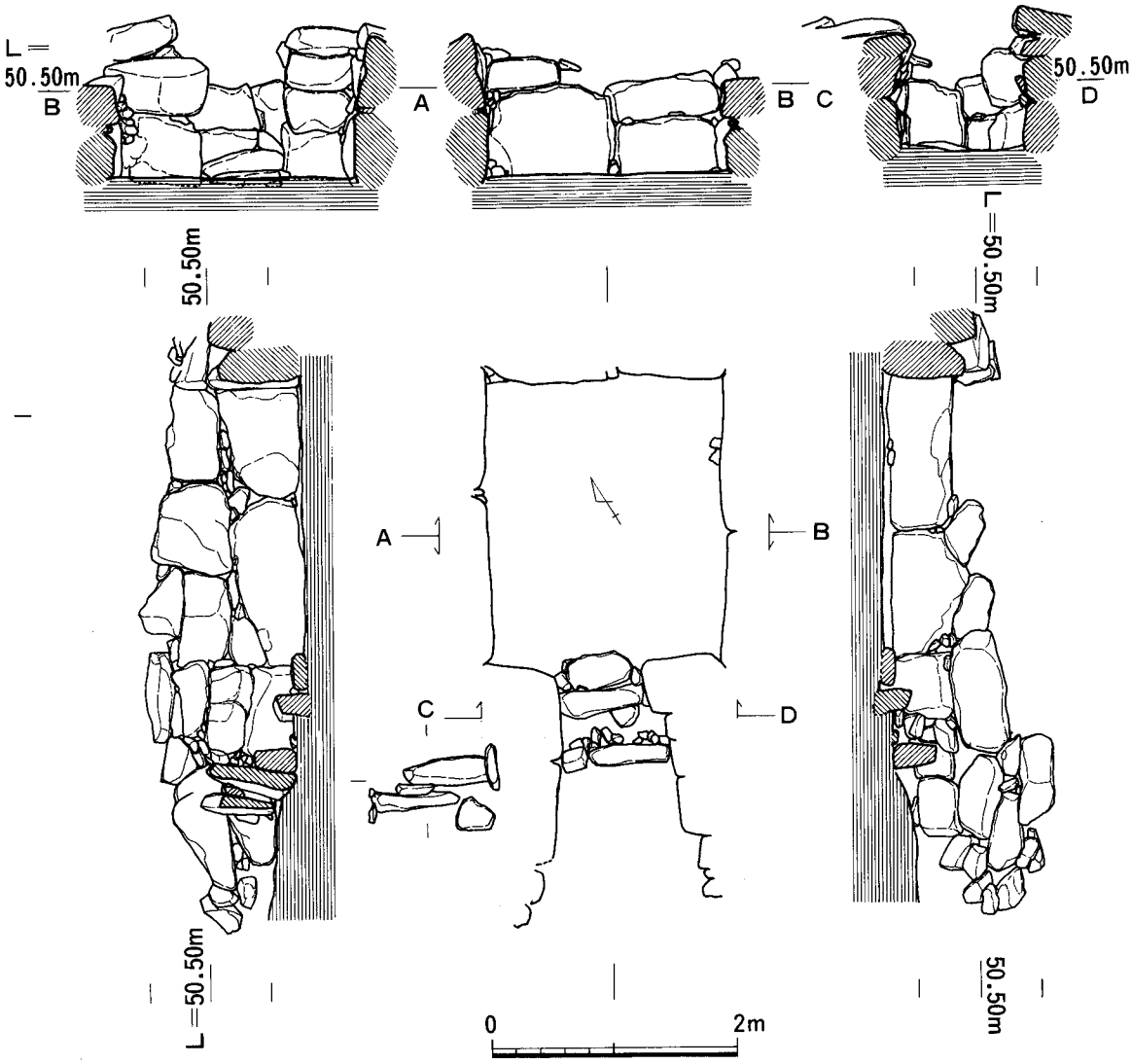


Fig. 29　５号墳石室実測図　(1/60)

4）遺　物（Fig.31・32）

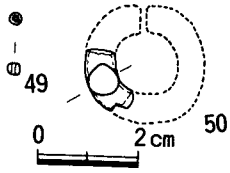


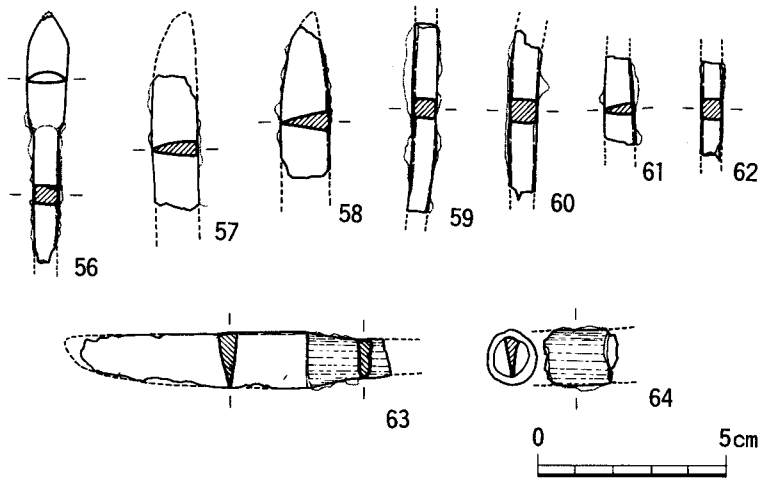
Fig.30　5号墳遺物実測図　小玉　耳環　(⅔)

出土状況　本墳の遺物の出土量は少ない。小玉，耳環，鉄鏃，刀子，杯蓋，杯，平瓶，脚付坩，鉄滓等，が出土している。いずれも墳丘盛土の二次堆積土中からの出土であり，原位置をとどめるものはなかった。ただし小玉，耳環，鉄滓は水洗選別で検出された。

小玉・耳環（Fig．30の49・50）　**小玉　49**　1点出土している。青色を呈し，透明である。ガラス製。**50**は耳環の一部である。銅環を芯体とし金張りするが，緑青が表面には吹いている。

鉄製品（Fig.31）　**鉄鏃**　**56**は尖根の柳葉形式である。身は片丸造りで，篦被は断面やや扁平な方形をなす。**57・58・61**は，尖根の片刃式である。身は断面二等辺三角形を呈す。**59・60 62**は，尖根式鏃の篦被部である。いずれも断面は扁平な方形となる。**刀子**　**53**は身の先端および，茎の末端を欠失する。調部は若干内湾し茎へ続く。茎には本質が残る。身の断面は二等辺三角形をなす。**54**は茎部破片で柄の木質が残る。茎の断面は二等辺三角形である。

須恵器（Fig.32）　**杯蓋**　**79**は口径14.0cm，器高4.0cmを測る。天井部にはヘラ削りを残す。天井部と体部との境には純い凹線がはいる。口縁端部は外方へややつまみ出され，その内面には段を有す。内面および体部はナデ仕上げ。ロクロ回転は時計まわりである。**80**は復元口径13.2cm，器高4cm。丸みを滞びた天井部から波打ちながら口縁端部へ続き，口縁部内面には純い沈線がめぐる。**杯**　**82**は口縁部破片である。復元径12.5cm程度。立ち上がりは 1.4cmでやや内傾する。受け部は若干上向きに横へ伸ばされ，立ち上がり基部との間に沈線がは入る。**83**は復元径11.5cm。立ち上がりは 1.1cmでかなり内傾する。口縁端部は角張る。受け部は下向きにつまみ出され，丸く仕上げられる。焼きはあまい。**84**は完形である。口径12.5cm，器高 3.8cmを測る。立ち上がりは0.75cmでかなり内傾する。受け部は，やや上向きにつまみ出され，立ち上が



Fig．31　5号墳遺物実測図　鉄製品　(½)

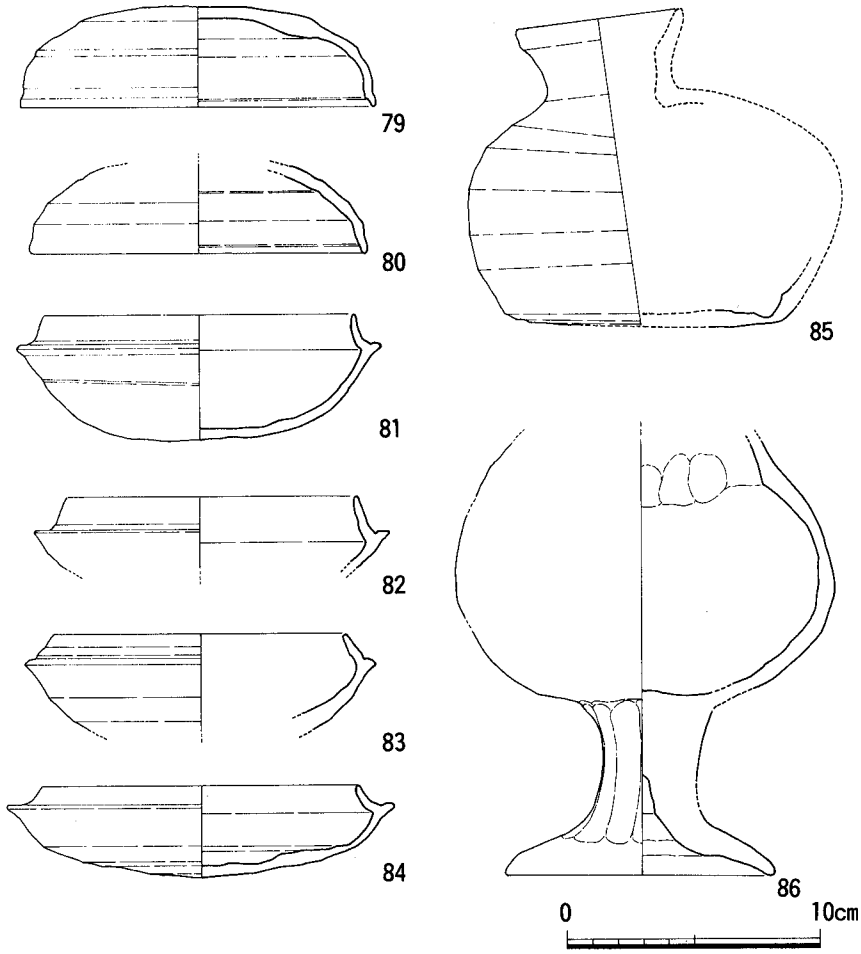


Fig. 32　5号墳遺物実測図　須恵器　土師器　(1/3)

り基部には明確な沈線がはいる。底部と体部との境は不明瞭である。全面ナデ仕上げ。ロクロ回転は時計回り。

平瓶　85は体部からやや外反して口頸部が伸び，端は丸くおさまる。口頸部内面には一段の稜を有しており体部内面へと続く。体部は，その上半部の張りが強く，底部はやや上げ底気味になっている。ヘラ削りが体部全面に残っている。焼成はあまい。

土師器（Fig. 32）　86は脚付坩である。口縁部が欠失するが，器形はワイングラスに似る。体部はヨコナデにより仕上げられ，内面の口縁付近には指圧痕が残る。脚部は，その脚筒部がヘラ削りにより造り出され，やや内湾するが，脚底部はやや外へ張り出しながら端部へ続く。脚内面はヘラ削りによりまず脚筒部を作り，その後ナデ仕上げ。体部の最大幅は，15.10cm。

6．アラタ6号墳

1）位置と現状

高祖山から延びる丘稜尾根は，本墳の南側約20mほどの位置で，3～5号墳の占地する尾根との比高差約10mをもっていったん終り，両者の間に狭い谷地形を形成する。西に面する側は造成され松の植林等が行なわれ緩斜面をなすが，東南部はやや急な斜面となっている。本墳はこの急な谷地形に接した地点に位置している。馬蹄形溝を介して，真北には5号墳が位置する。墳丘は¼ほどしか遺存しておらず，石室はその上半部が崩壊していた。

2）墳　丘（Fig.33）

地山整形　本墳の地山整形は，3号墳同様に，尾根の末端部にあたる地点を選んで，その頂部の削平ならびに整地を行なったと考えられる。区画にあたっては，北から北東部にかけて設定した馬蹄形溝を基準とし整形の範囲を決定したと思われる。平坦に地山が整形されている範囲は，石室の主軸方向に約7.0m，直交する方向に約8.0～9.0mを測る。

墳　丘　盛土は，地山整形面を基底面として行なわれている。南斜面側にあたるCtrにおいては，平坦な足場の確保の目的のためか，裏込めと併行もしくはその前後に，盛土することによって，整形面の整地を行なっている。そしてある程度裏込めが終えた段階で，今度は，墳丘形成と，石室掘り方の埋め戻し（石室の被覆と同じ）を併行して行なっているようである。
墳丘は，玄室床面より，現存高3.30mを測る。溝の配置などより，復元径10～11m程度の墳丘が形成されていたと考えられる。

3）石　室（Fig.34）

石室は，単室の両袖型横穴式石室である。その主軸はN－39°10′－Eの方向をとり，西南に開口する。石室上半部は石室内に大量の土砂とともに崩落していた。他の古墳と異なり羨道がかなり長く（玄室長より若干長い），石室壁体の構築も整美である。

石室掘り方　掘り方は，整地面中央よりやや南側へずれた地点に位置している。石室の形態にあわせて地山は掘削されており，玄門部より次第にすぼまり，羨道部へいたり，さらにその先に墓道を連結している。最大幅で約5.0m，羨道端部まで8.30mを測り，玄室床面まで，2.6mほどの深さで掘削している。腰石，梱石の配置時にはさらに一段掘り下げている。

玄　室　奥幅 2.1m，前幅 2.1m，右側壁長2.78m，左側壁長2.75mを測る。左袖石がやや内側へ張り出すが，ほぼ長方形をなす。高さ 1.3m，幅 2.0mの面どりのされた大石をまず奥壁に据え，その後，両側壁からはさみこむようにして，壁体の構築がなされている。左右両

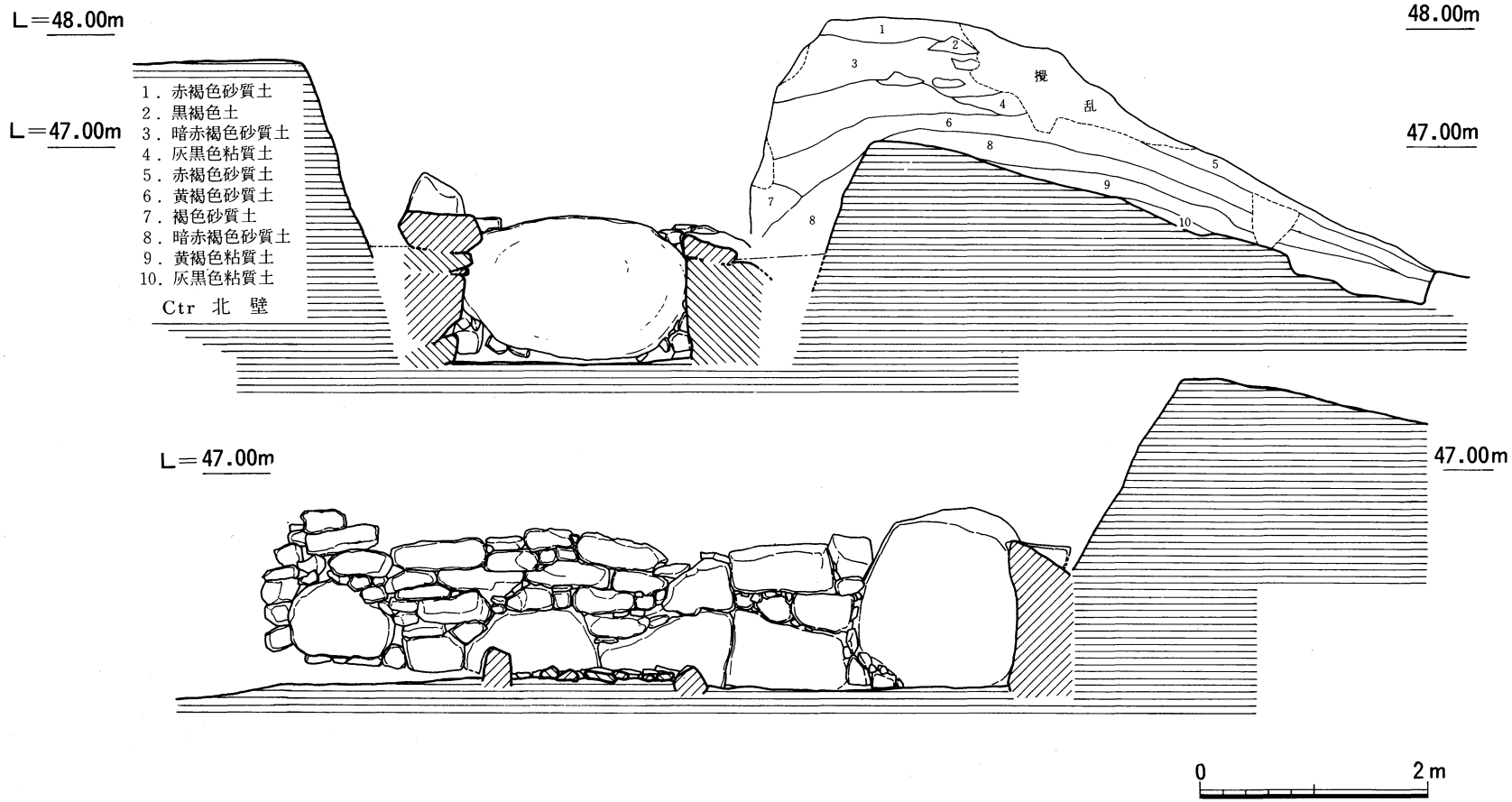


Fig. 33　6号墳墳丘土層断面図　上．Ctr 北壁　下．Btr 西壁　(1/60)

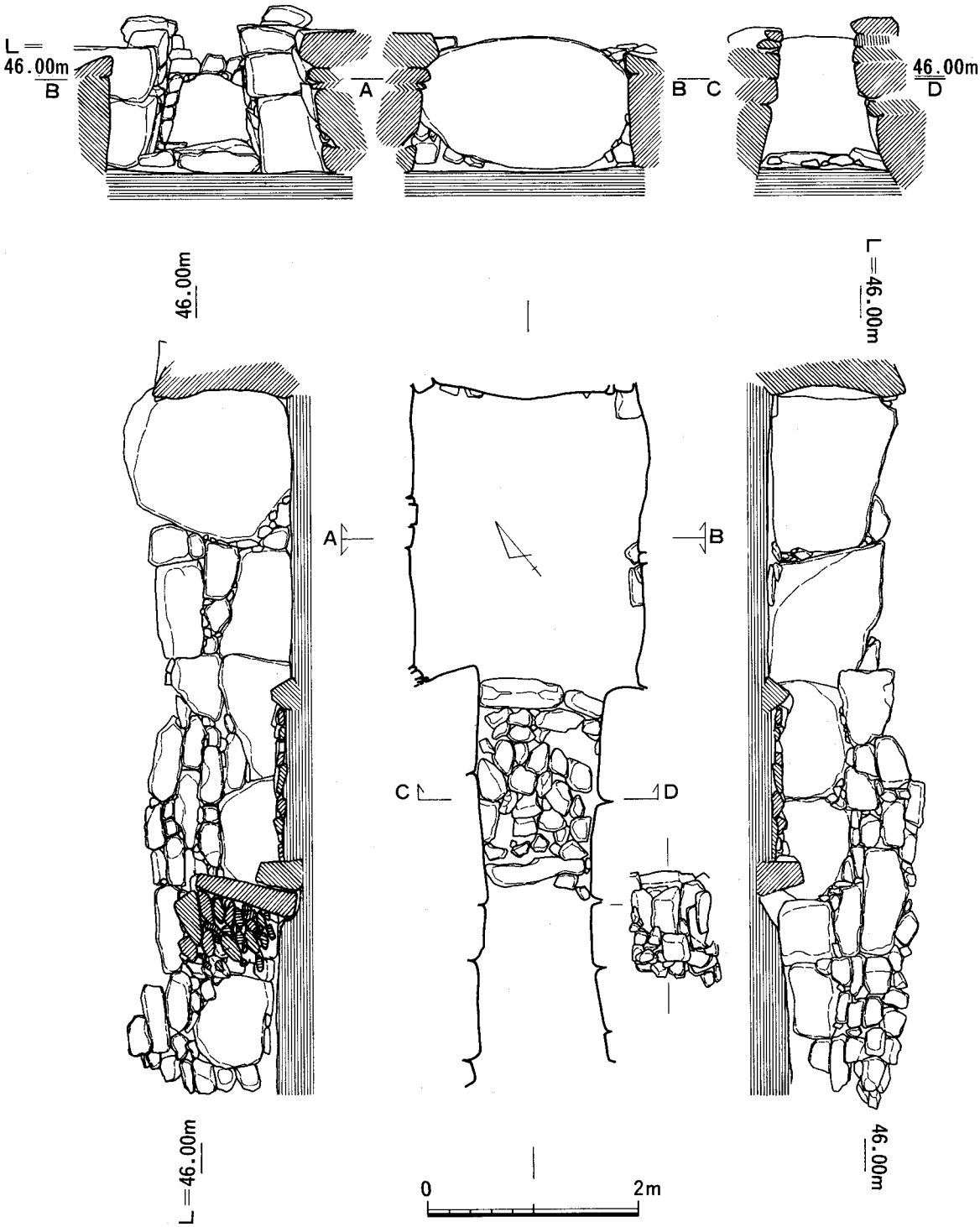


Fig. 34　6号墳石室実測図　(1/60)

壁とも構築法は共通しており，腰石には，奥壁に開いた大石よりはやや小ぶりの転石（面どりがなされている）を用いており，すでに腰石から若干内傾させ壁体の構築を計っている。床面には敷石がなされていたと思われるが，盗掘時に攪乱されており，原位置をとどめているもののはなかった。なお腰石下端には根石を挿入し，その安定を計っている。石室の復元高は，壁体の傾斜等より考えて，床面より2.7～3.0m ほどであろう。

羨道および閉塞状況　羨道長は右側壁で，3.52m，左側壁で3.94m を測る。奥幅1.17m，前幅1.30m である。両壁はこの中央付近で若干せり出しておりややすぼまるが，ほぼ直線的に玄門から羨道端へと続く。羨道はその中央に配置された第２梱石によってほぼ２等分されている。第１梱石と第２梱石間には扁平な転石が敷きつめられており，明らかに羨道前半部とは異なった意味と機能を持たせた空間を造り出している。羨道壁体の構築は，0.6×0.5m ほどの割石を腰石として据え，その上方には扁平な転石，割石を水平に目路が走るように面を合わせて横積みしている。壁体は腰石よりすでに内傾させており，水平面に対して75°の角度を持たせている。閉塞は，高さ１m，幅 1.2m の扁平な方形をなす割石を閉塞石として用いており，第２梱石を根石として，それにたてかけ閉塞したのち，拳大から人頭大の転石を無造作に積み上げている。

墓道　石室掘り方に付設して掘削されており，羨道端よりほぼ直線的に南東方向へ延びる。床面は除々に低くなり，その先端では，玄室床面との比高差が0.56m を測る。さらに延長されると思われるが，畑の造成によりその先は消滅している。

馬蹄形溝　その中央で幅2.15m，深さ0.70m を測る。ゆるいカーブを描いて，５号墳墳丘裾近くに接して設けられている。

4）遺　物（Fig.35～42）

出土状況　本墳も盗掘に遭っており，遺物はほとんどが二次堆積によるものである。玄室の右袖石付近の床面直上から土師器高杯脚部（Fig42の**H15**）が検出されたのみである。閉塞石から羨道端部および墓道にかけて，多量の土師器，須恵器が検出されたが，いずれも，盗掘時に玄室内よりかき出されたか，あるいは，墳丘からの流れこみによるものと判断された。大甕は墳丘

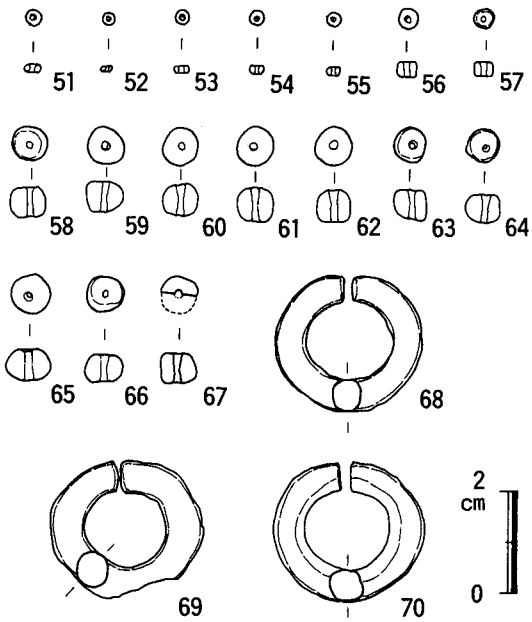


Fig. 35　6号墳遺物実測図 小玉 丸玉 耳環（2/3）

Ⅰ区，およびⅣ区より出土している。いずれも据え置かれていたものと思われる。

小玉・丸玉・耳環 (Fig. 35)　**小玉　51～57**　7点出土している。いずれも青緑色で透明である。法量は径が0.21～0.4cm，厚さ 0.1cm～0.3cmで小粒である。すべてガラス製である。**丸玉　58～67**　10点出土している。色調は黒色を呈す。すべて滑石製である。法量は径 0.7～0.8cm,厚さ0.6～0.7cmを測る。穿孔は両端から行なわれている。**耳環　68～69**　いずれも銅環を芯体として金張を行なっている。金箔の残りは悪く，表面には緑青が吹く。

鉄製品 (Fig. 36)　**65～67**は,尖根の柳葉形式の鏃身である。いずれも身は片丸造りである。**65**にはかすかに鎬がはいる。**66**はやや幅広となる。篦被断面はやや扁平な方形となる。**68～76**は尖根式の篦被部もしくは茎部の破片である。断面はやや扁平な方形となる。**68**は，広根の変形三角形式ともいえるもので，逆刺が横位に強調される。篦被は隅丸の扁平な方形となり，茎部との境にはゆるやかに内湾する段を有している。茎部断面は円形をなす。

須恵器 (Fig. 37～41)

杯　蓋 (Fig. 37)　形態上の属性から3類に大別される。**Ⅰ類 (87)** は，丸みのある天井部とほぼ直立する体部との境に弱い稜を有し，口縁端部内面に段を有すものである。全面横ナデによる丁寧な調整が施こされている。天井部内面にヘラ記号が付されている。口径12.8cm，器高 4.5cmを測る。**Ⅱ類 (89・91)**　鈍重な造りであり，器壁が厚く成形も雑である。天井部はヘラ削りが施こされている。天井部と体部との境は不明瞭である。口縁部は若干開き気味で丸く仕上げられる。**89**の天井部にはヘラ記号が付される。口径13.0～13.1cm，器高3.8～4.2cmを測る。**Ⅲ類 (88・90)**　やや小型品となる。焼成は甘いが丁寧な横ナデで整形されている。天井部から口縁部までゆるいカーブを描き，その境は不明瞭である。口縁端部は丸くおさめられる。体部外面にはヘラ記号が付される。口径12.2cm～12.4cm，器高3.5～3.8cmを測る。

杯 (Fig. 37)　2類に大きく分類できる。**Ⅰ類 (92・93)**　口径12.3cm，器高 4.3cm，立ち

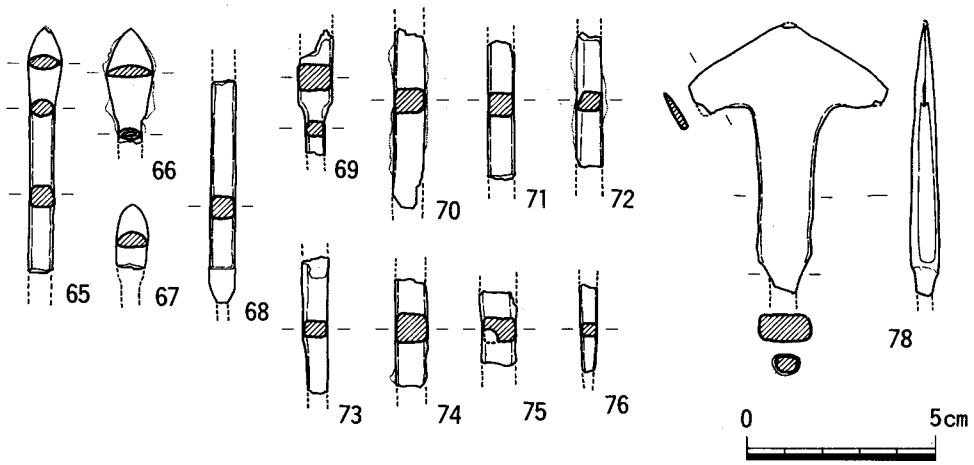


Fig. 36　6号墳遺物実測図　鉄製品　(½)

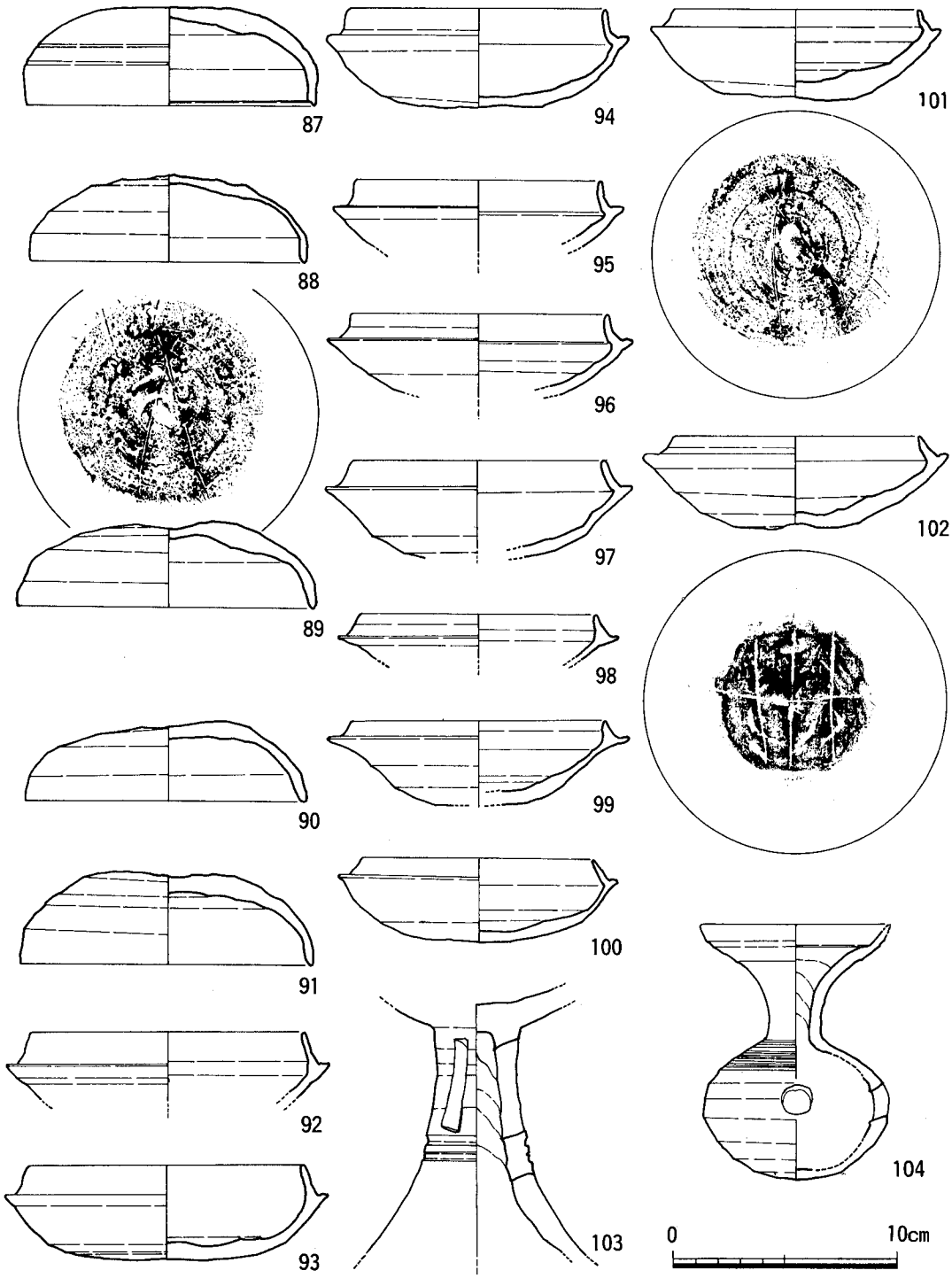


Fig. 37　6号墳遺物実測図　須恵器Ⅰ　(1/3)

上がり 1.5cmを測る。立ち上がりは受け部からやや内傾して直線的にのび，口縁端部は丸くおさめられる。受け部は，やや上向きに横へつまみ出され，立ち上がり基部との境には明瞭な沈線がはいる。底部は，丁寧なヘラ削りが施こされ丸味を帯びる。体部と天井部との境は不明瞭である。**Ⅱ類（94～102）**　Ⅰ類と比べ小型であり，立ち上がりの内傾の度合が大きく，成形および焼成が良くないものである。口径は10.5～12.1cmで，器高3.7～4.2cm，立ち上がり 0.8～ 1.1cmを測る。細部の形態差より，4類に細分できる。**Ⅱa 類（94～97）**は，立ち上がりがやや長く，若干内湾しつつ内傾するもので，丁寧な横ナデにより整形されるものである。**Ⅱb 類（100）**　立ち上がりがかなり内傾しながら直線的にのび，受け部がやや上向き，横につまみ出されるものである。底部は丸く，体部との境は不明瞭である。**Ⅱc 類（101・102）**　やや鈍重に作られている。立ち上がりは短かく，かなり内傾しながらのびる。ヘラ記号が平坦な底部に付されている。**Ⅱd 類（98・99）**　立ち上がりは 0.8cmでもっとも低い。立ち上がりは，その基部は分厚く，強く内傾している。受け部はやや長めに横へ引き出されている。体部は内湾しており，丸みのある底部へと続く。

以上述べた杯および杯蓋でセット関係があると思われるのは，杯蓋Ⅰ類とした**87**と，杯Ⅱa類の**94**，杯蓋Ⅱ類とした**89**と杯ⅡC類の **101**である。なおロクロ回転はすべて時計回りである。

高杯（Fig. 37）　1点出土している。**103** は無蓋高杯の脚筒部破片である。脚筒部中央を廻る2本の沈線を介して，3方向より2段の長方形の透しがはいる。内外面には絞りこんだ痕跡が残る。全面横ナデにより仕上げている。焼成，胎土ともに堅緻である。

甕（Fig. 37・39の104・106～109）　5点出土している。**104** は，口頸部が体部から直に立ち上がった後，強く外反し，段を作って外上方にやや内湾気味にでるもので，口縁端部は丸くおさめられる。段のやや上方には鈍い沈線を入れる。口頸部内面には，シボリ痕が残る。体部は球形をなし，ゆるく張った肩には，カキ目が，胴から底部にかけてはヘラ削りが残る。**106** ～ **108**は口頸部破片である。いずれも，頸部から口縁にかて内湾しつつ外方へのび，段上もしくは段のやや上方に一本の沈線を廻らす。**109** は口縁部および底部を欠く。体部から外反しつつ長めにのびる頸部のほぼ中央に二本の沈線を廻らして，その下に接するように，斜行列点櫛描文を施文しており，体部の肩

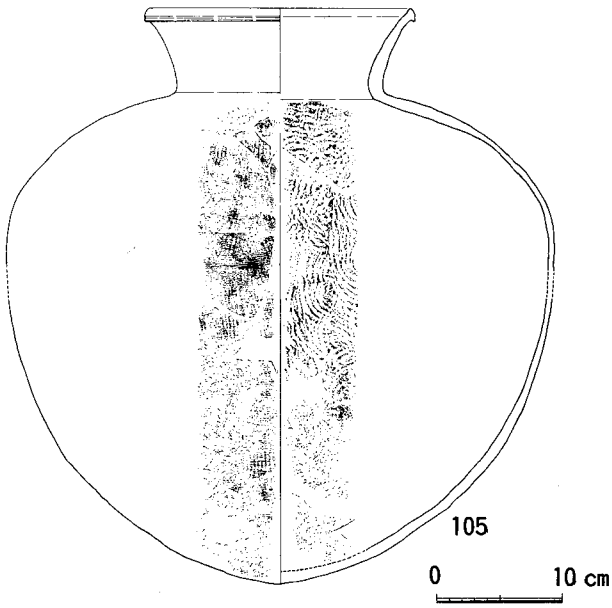


Fig. 38　6号墳遺物実測図　須恵器Ⅱ　(1/6)

にも同様に施文が行なわれている。**104** は口径8.2cm，器高11.4cmを測る。

脚付甕 (Fig. 39)　**110**の１点のみである。球形をなす体部から，外反しつつ長くのびる頸部は,その途中で段を作って，さらに強く外反して口縁端部へ続く。段上には一本の沈線を廻らす。体部の肩および底部には斜行列点櫛描文を施文する。脚は外方へかなり開きラッパ状をなす。色調は赤褐色を呈しており，焼成は甘く生焼けである。口径11.9cm，器高16.7cmを測る。

壺 (Fig. 40)　**116**の１点のみである。口径12.1cm，器高16.6cmを測る。口頸部には櫛状施文具による波状文が描かれている。体部の肩の張りはやや強く，肩部で最大径を測る。口縁部は若干尖り気味でその下部に一本の沈線を廻らす。底から胴部にかけてヘラ削りが残る。

提瓶 (Fig. 40)　２点出土している。**117**は口頸部が外反し，口縁端部は丸くおさめられるもので，口頸部の中央よりやや上に一本の沈線を廻らしている。体部と口頸部との接合部にはカキ目が残る。**118** は，口縁端部が肥厚し，一本の沈線を廻らす。いずれも体部前面には，ヘラ削りが残り，またその張りは弱い。口径9.3cm，8.2cm，器高16.5cm，18.0cmを各々測る。

甕 (Fig. 38・39・41)　８点出土している。それらは，口径18.0～21.0cm，器高(復元値)40cm前後を測る中型のもの（**105** ・ **111**～**115**）と，口径37.8～42.6cm，器高58.6～75.2cmを測る大型のもの（**119** ・ **120**）とに分けられる。**105** は口径20.7cm，器高40.5cmを測る。口頸部は外反し，口縁端部は肥厚し，端部下面に一本の沈線を廻らす。体部外面は平行叩き目文の上に目の細かいカキ目を施こす。内面には同心円状叩き目が残る。底部はやや尖り気味の丸底である。**111** ～ **114**は口縁部破片である。**111** は，口縁端部が成形時に巻きこまれ丸く肥厚し，外へ若干突き出る。**112** は口縁端部が段をもつもので，内面はやや内湾する。**113** は，口縁端部に二本の沈線を廻らす。**114**は，口径24.7cmを測り，他のものと比べやや大きい。口頸部はやや強く外反し段を有している。外面は平行叩き目が残るが，内面はナデ仕上げが行なわれている。**115** は，口縁部を欠く。復元器高30cm前後で，最大幅は26.2cmである。胴部中央で最大幅を測る。外面は平行叩き目が，内面には同心円状叩き目が残る。**119** と **120**は，４区墳丘において据えられた状態で出土したものである。いずれも口頸部が長く外反しており，頸部の中央もしくは，中央よりやや上位に２本の沈線を廻らし，斜行列点櫛描文を施文している。**119** は若干肩が張るが,**120**の胴部は球形をなす。外面に格子文，内面に同心円状叩き目文が残る。

土師器 (Fig. 42)　多量の土師器片が出土したが，残りのよい14点を図示した。

高杯 (121 ～ 133)　９個体分以上出土しているが，全体の器体を識別できるものはない。杯部は，体部の中央付近に段を有し内湾気味に外反しつつ口縁に続くもの（**121**・**122**・**125**)と杯部底部付近で体部が屈曲するもの（**129**）とがある。脚部は，いずれも縦位のヘラ削りで整形しており，脚筒内面は横位のヘラ削りにより作り出している。**133** は，脚部が長大であり，内面には指圧痕が残る。以上のものはかなり器表面が風化し，剝落している。

椀 (134)　口径12.7cm，器高6.6cmを測る。内外面ともナデ仕上げである。

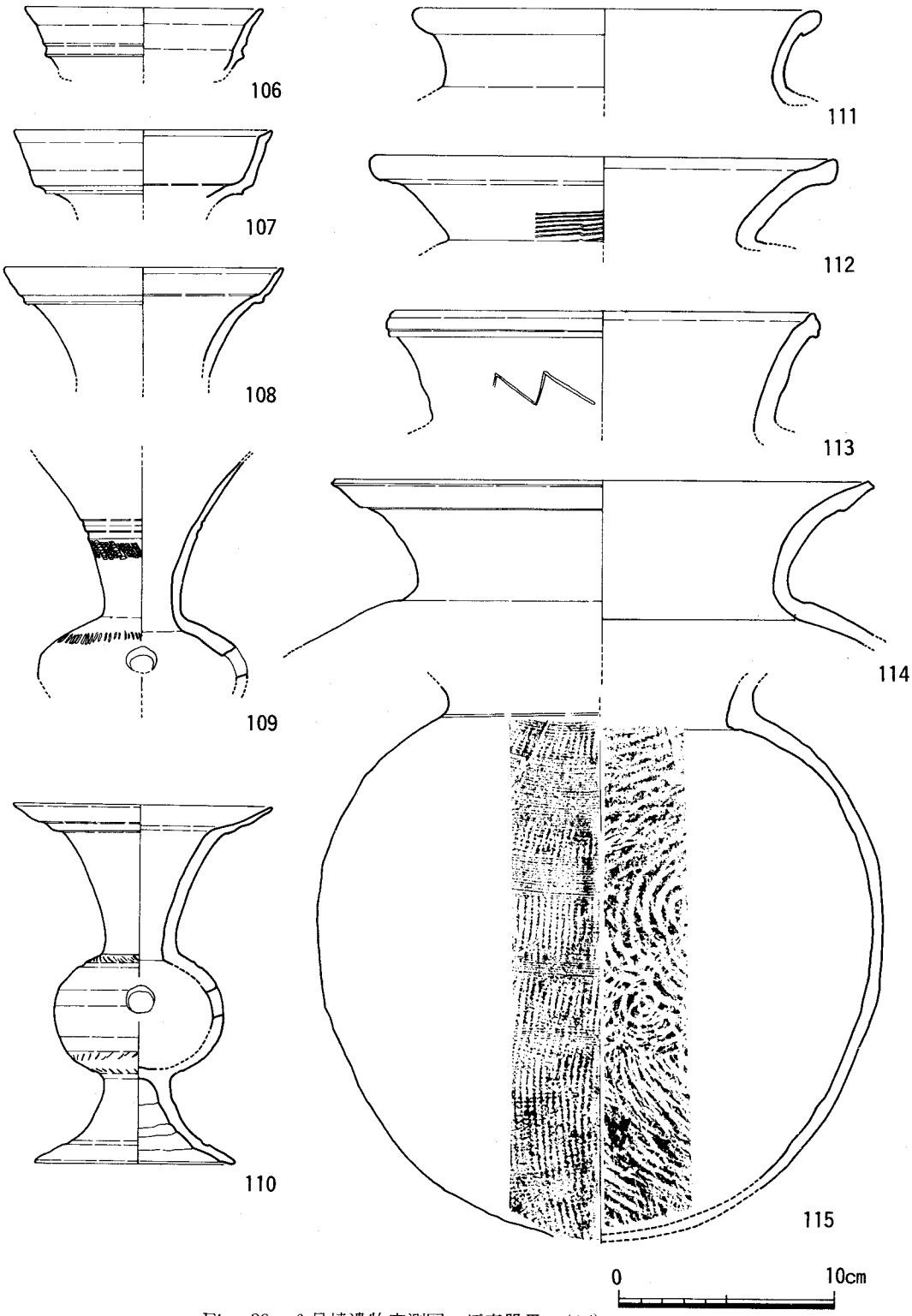


Fig. 39　6号墳遺物実測図　須恵器Ⅲ　(1/3)

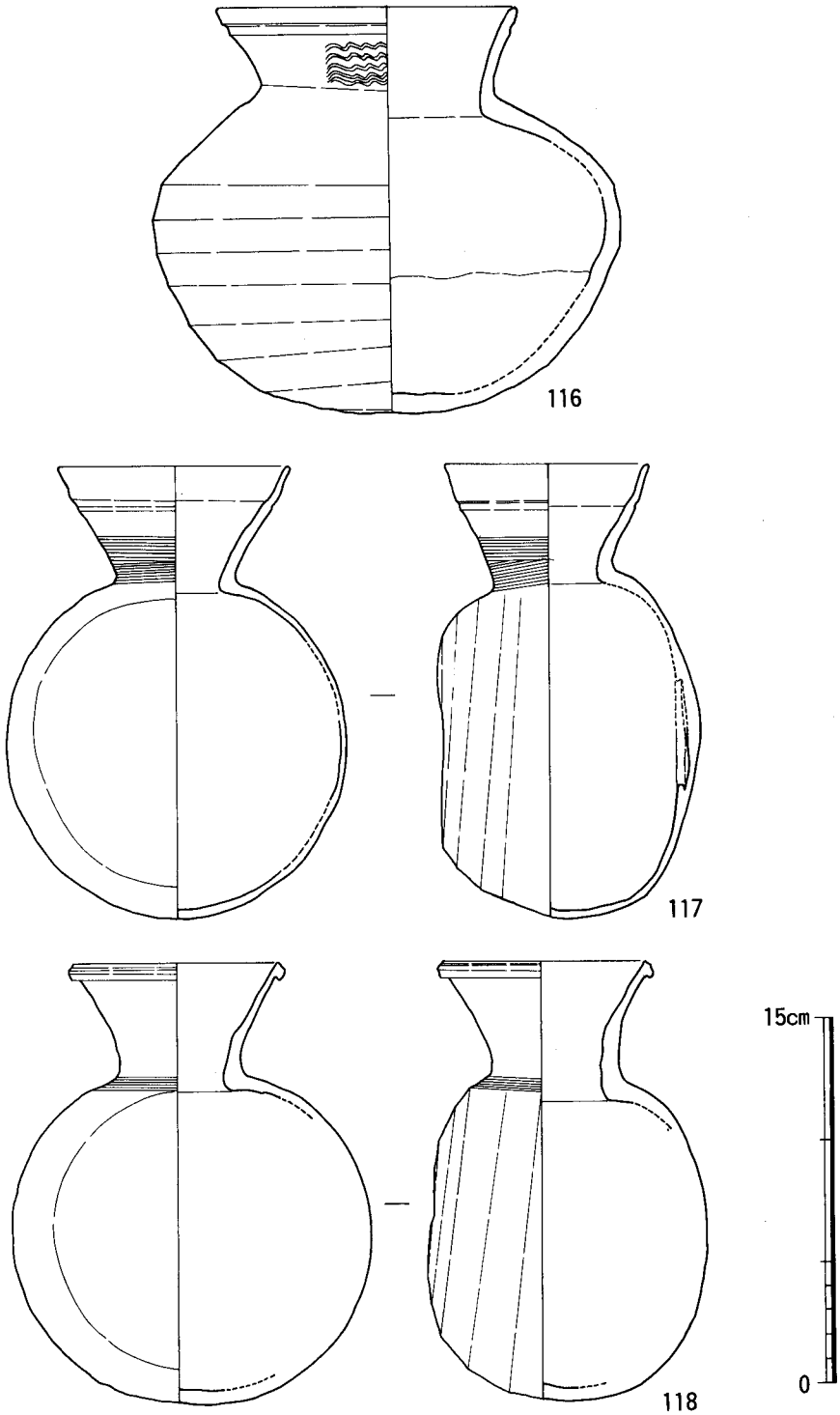


Fig. 40　6号墳遺物実測図　須恵器Ⅳ　(⅓)

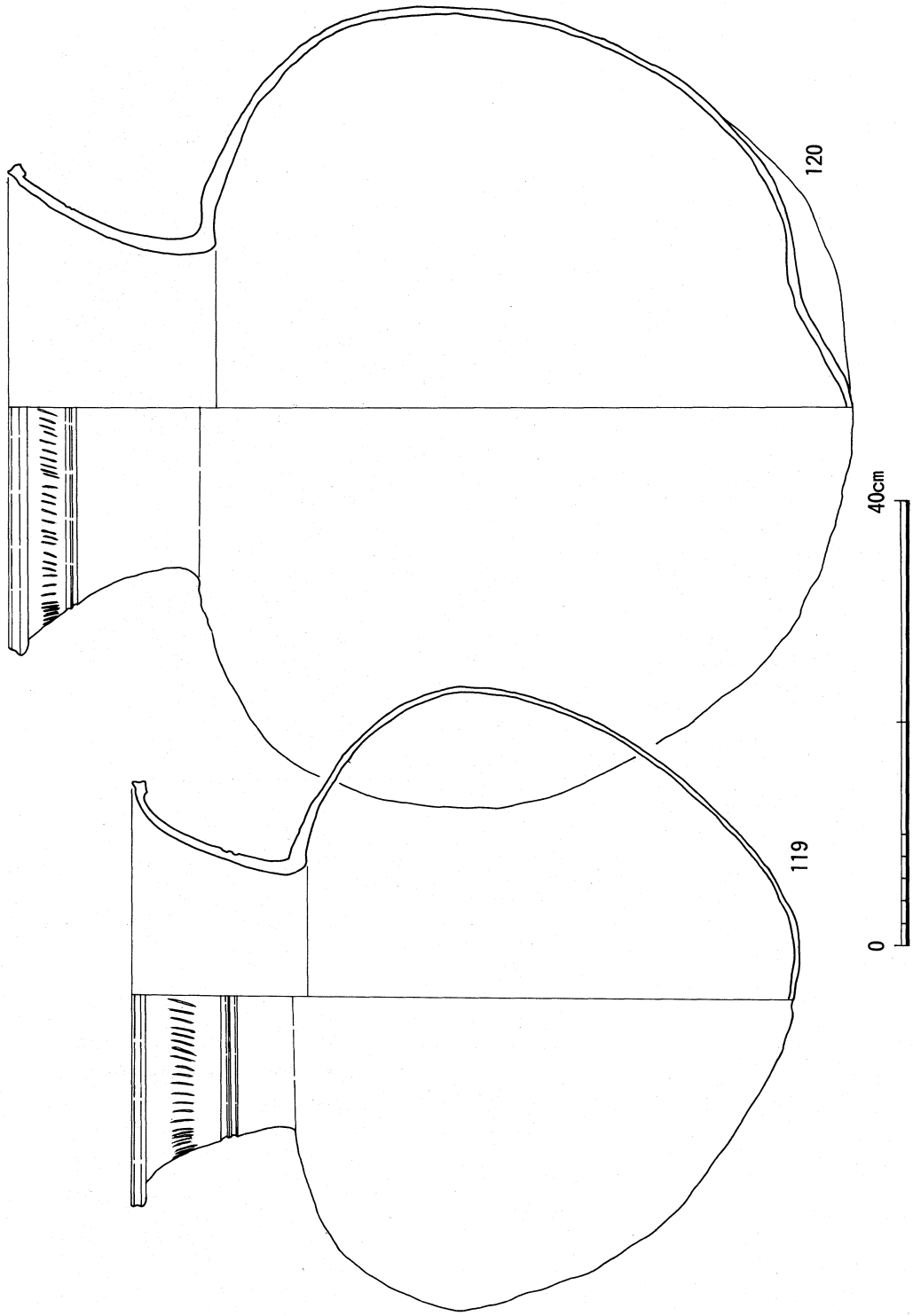


Fig. 41　6号墳遺物実測図　須恵器Ⅴ（1/6）

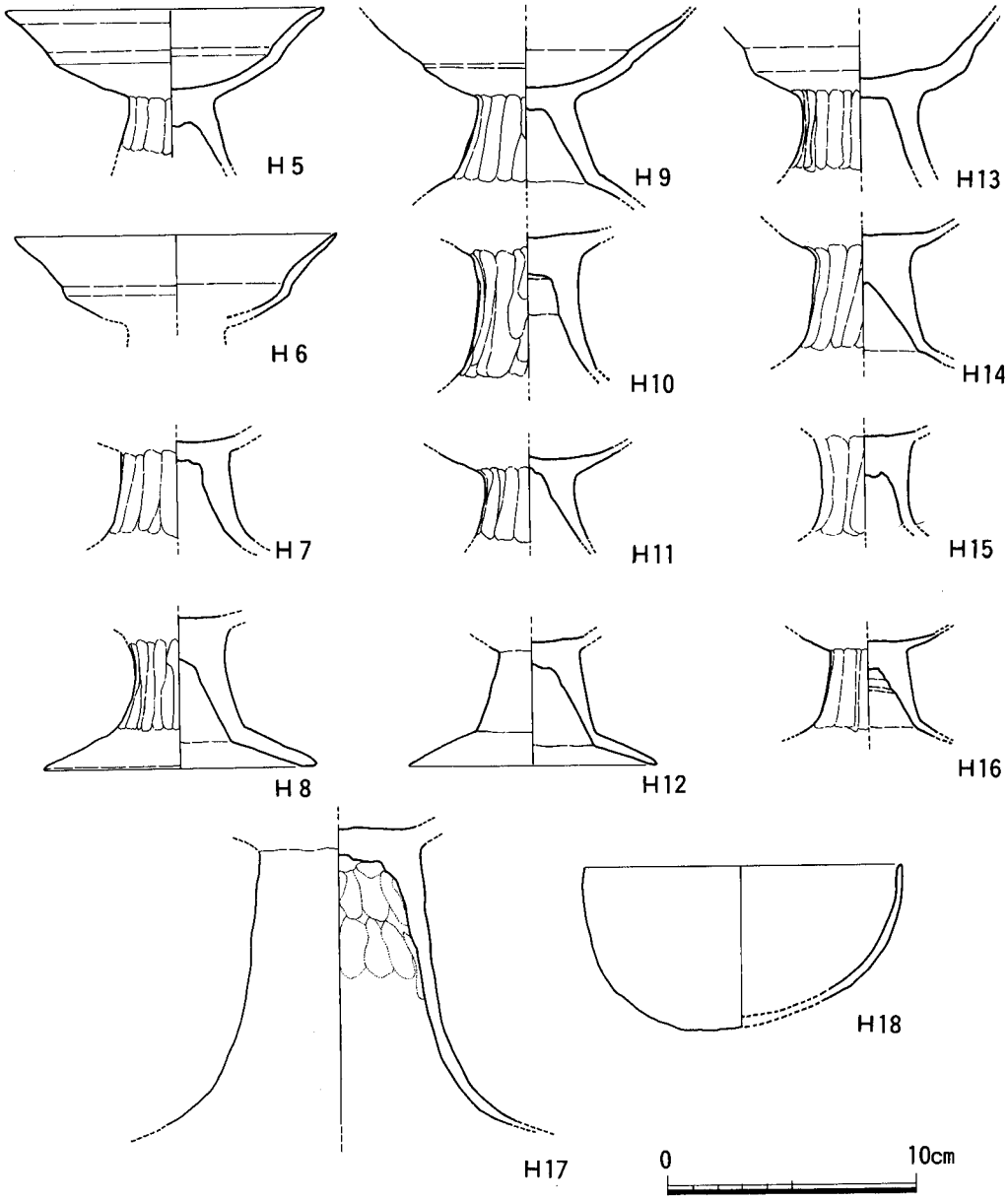


Fig. 42　6号墳遺物実測図　土師器（1/3）

7．アラタ7号墳

1）位置と現状

3号墳～6号墳が占地する丘陵尾根の西側は，緩やかな斜面となって谷の方へ続いている。本墳は標高46mの等高線が走るこの斜面上に占地している。墳丘は削平され遺存していなかったが，盗掘に遭うこともなく，比較的良好な状況で主体部は遺存していた。

2）墳　丘

地山整形　整地は，斜面の傾斜走向に対し直交して，半円を描くように地山を掘削して行なっている。したがってその掘り方は東から西へゆくにつれ浅くなり自然に消滅する。

墳　丘　地山整形面を基底面として墳丘は築造されたものと思われる。図上操作では，地山整形の範囲が径5～6mの円形をなしており，これより若干径の少ない円墳が想定できよう。

3）石　室（Fig.43）

石室掘り方　地山整形面のほぼ中央に，一辺1.82～1.85mを測る隅丸方形の竪穴を掘り，石室掘り方としている。深さは0.80mほどで，側壁構築の際，さらに一段掘り下げている。

石室　本墳の埋葬主体部は，南壁が梱石に立てかけられ閉塞を行なう小石室である。その主

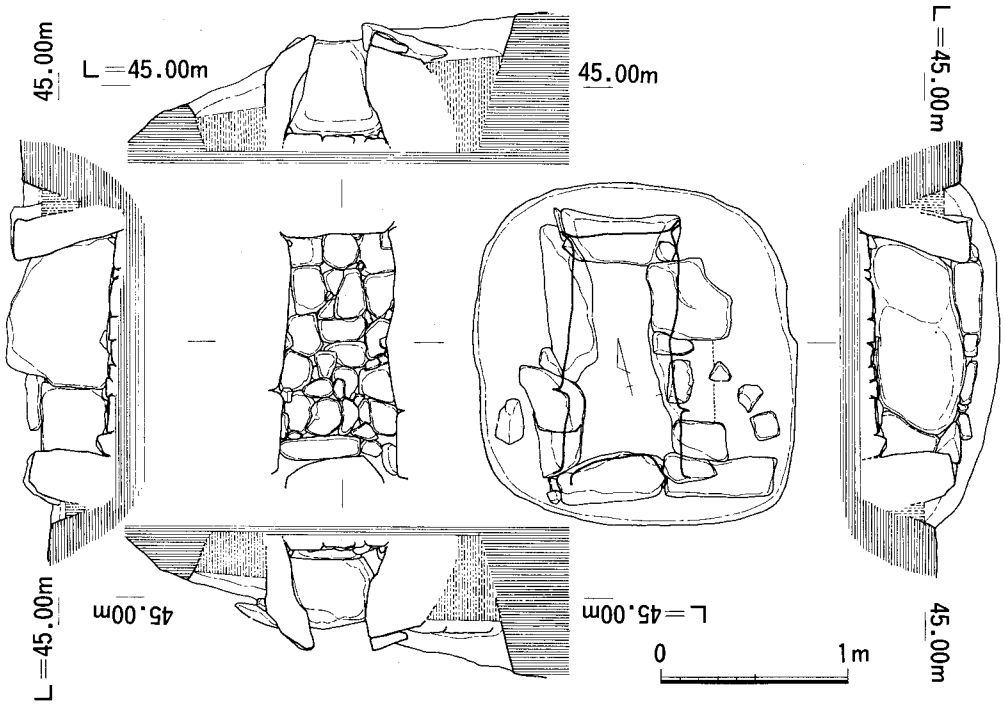


Fig. 43　7号墳平面・断面図　(1/40)

軸は，N -14° 30′-Wの方向をとる。平面形は北壁がややすぼんだ長方形をなす。北壁幅0.52m，南壁幅0.62m，東壁長1.18m，西壁長1.15m を測る。壁体の構築は，東西両壁が２石，南北両壁が１石をそれぞれ用いており，それらをかなり内傾させ石組みを行なっている。北壁→左右両壁→南壁の順で構築を行なったと思われる。床面には扁平な転石をかなり整然と敷きつめている。小玉の出土地点は北壁より約17cm～20cm離れた主軸線上にあたっており，被葬者の頭部は北向きであったと思われる。梱石が南壁際にみられる。

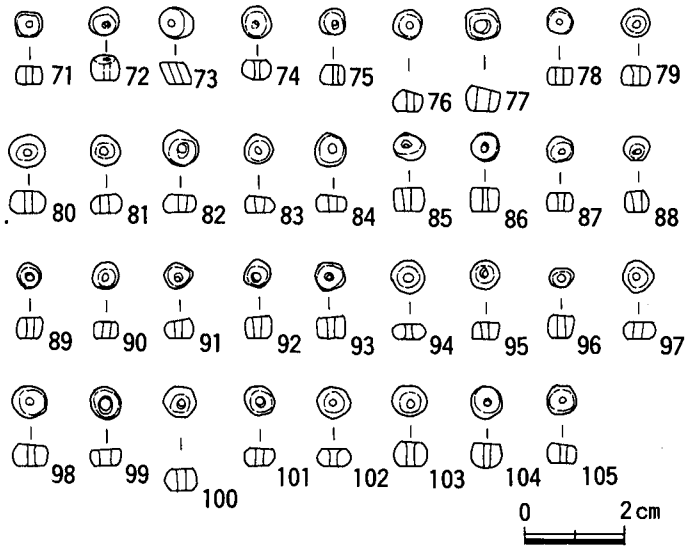


Fig. 44　７号墳遺物実測図　小玉　(⅔)

遺物は，小玉が35点出土したのみで，他の遺物は検出されなかった。小玉はすべてガラス製である。緑色のもの（**105**），青緑色のもの（**99**～**104**），**71**～**98**はすべて濃紺色である。径は0.5cm～0.61cmで，厚さ0.3～0.5cmを測り比較的大粒である。いずれも穿孔の後，裁断面は丁寧に磨研されている。

8．その他の遺構と遺物（Fig. 45・46）

1）　竪穴遺構（Fig. 45）

各古墳の墳丘裾部周辺に，数基ずつ点々と竪穴遺構が検出された。総数で13基検出されたがそのうち，遺存状況が比較的良好だった６基について記述する。

形　態　平面形は，隅丸の長方形をなすもの（**6号・10号**）と，隅丸の台形状(羽子板状)をなすもの（**2号・4号・9号・11号**）とがある。大きさは主軸長が 1.5m 前後で，最大幅が1.3m 強のもの（**2号・6号・9号・10号**）と，主軸長1.15m，最大幅0.85m ほどのもの（**4号・11号**）とがある。深さは，検出面が削平されているため正確な値は出せないが，0.3m ～0.6m ほどと思われる。

構　造　各々の掘り方は，傾斜の走向に沿って，その主軸をとっていることが特異な点としてまずあげられる。さらに，隅丸の台形状を呈するものの場合は必ずといっていいほど，最大幅をとる縁辺側を高い方の斜面に設定していることが次にあげられる。ところで，これらの掘り方の構造は，地山をほぼ垂直に掘削した後，壁体に粘土を貼付けるという特徴をもつ。な

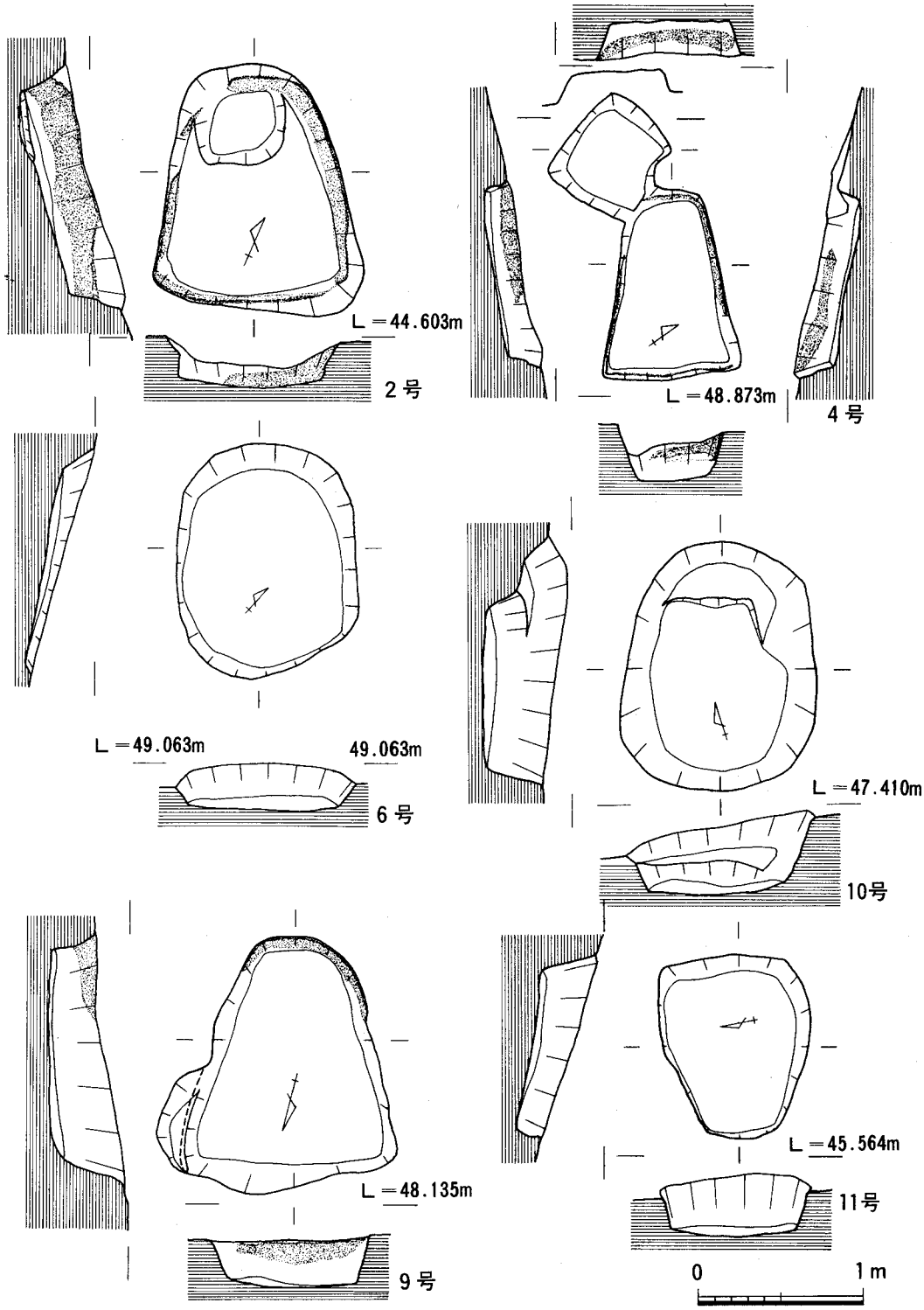


Fig. 45　竪穴遺構実測図　(1/40)

お，貼付けられた粘土は火の使用によって，赤燈色に焼けている。掘り方内の埋土の堆積状況は，床面から数えて2層目以上に木炭が多く含まれる傾向があり，堆積は除々に進行している。

共伴遺物　遺物が検出されたのは，**5号・11号・12号**の3例である。5号からは土師器の小片（器種は不明），**11号**では鉄滓と土師器，**12号**では土師・須恵器が出土している。しかしいずれも，床面直上ではなく，ある程度埋没した後堆積したものである。**11号**出土例は，12世紀を下るものであり，古墳築造時期および造営時期とは大きくかけはなれている。

遺構の性格　この種の遺構については，早くからその性格について憶測されてきており，また機能の意味もこめてか，窯状遺構，炉址，製鉄炉址等の名称を付して報告されている。最近では，発掘面積の拡大とともに，遺跡における構造的な解釈がより具体的に行なわれておりこの種の遺構の性格についても，類例の増加とともに次第に明らかにされつつある。広石古墳群の調査において，墳丘基底面に1基，墳丘周辺より4基検出された土坑の性格について，報告者は，「古墳に対するひとつの祭祀形態と想定してよい」とする。類似する資料の検討から導びかれたものと思われるが，遺構それ自体の持つ特性についての分析が不充分であるように思われる。類例を他に求めれば，アラタ古墳群で検出された隅丸台形状の平面形を持つ竪穴遺構に酷似する例は，福岡市西区野方勧進原遺跡（弥生後期末～古墳時代の集落址）における最近の調査によって確認されており，一概に古墳のみに関係する遺構であるとは言えない面も持っている。この種の遺構の性格については検討の余地を残しており，資料の増加を待ちたい。

2）　その他の遺物（Fig. 46）

1は4号墳4区墳丘二次堆積土中より出土。須恵質土器の底部である。釉はほとんど剝落している。見込内底に沈線を廻らす。**2**は玉縁状口縁をもつ白磁碗で高台付近は露体である。玉縁は折り返しが顕著。1号墳溝より出土。**3**は青磁碗で，高台から体部にかけて描掻手文が施文される。3号墳副室埋土中より出土。**4**は玄武岩製蛤刃石斧で，基部を欠失。刃部は磨耗し丸くなる

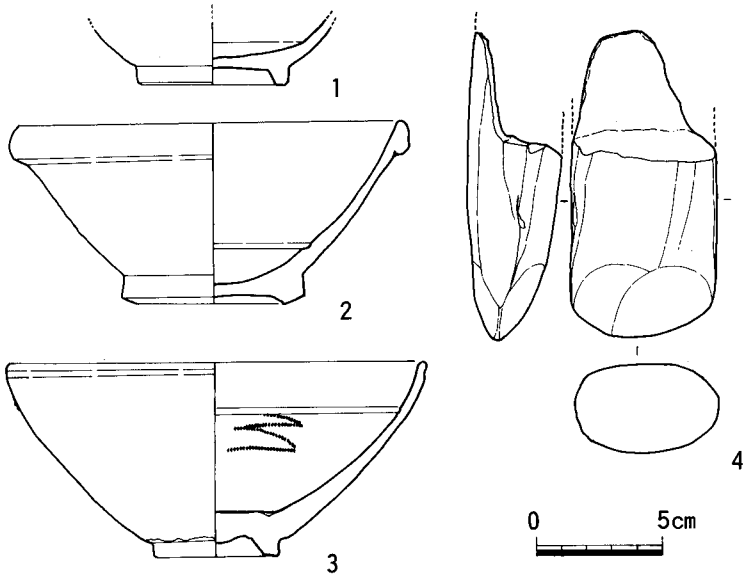


Fig. 46　その他の遺物実測図　(1/3)

Ⅳ まとめ

以上の調査の結果を踏まえ、若干の考察を行ないまとめとする。

石室構造　調査を実施した7基の古墳の石室構造を類型化すると次のようになる。

- 横穴式石室
  - 単室
    - 2号・4号・5号墳（Ⅰa₁類）
    - 1号墳（Ⅰa₂類）
    - 6号墳（Ⅰb類）
  - 複室
    - 3号墳（Ⅰc類）
- 小石室
  - 7号墳（Ⅱ類）

Ⅰ類とⅡ類との差異は、それぞれの構造上の特徴が、複次葬と単次葬といった石室の機能的違いを反映している点である。Ⅰ類が一般にいわれているように家族墓としての性格をもつのに対して、Ⅱ類は個人墓としてのそれであろう。なおⅡ類は既に述べたように一側壁体が横口的な構造を持っている点が注意されよう。Ⅰa₁類はやや寸詰まりの長方形の平面形を持つ玄室に、開き気味の短かな羨道を付設したものである。全体的に規模は小さく、羨道は石室掘り方の基底面に直接小さな割石ないし転石を据えている。またその底面は玄室床面より高く、梱石より除々にせり上がって羨道端部へと続く。Ⅰa₂類はⅠa₁類と同様な平面形をなす玄室に、やや長めで、直線的な羨道を付するものである。羨道は石室掘り方にやや大ぶりの腰石を据え、その上方に扁平な石を横積みする。奥壁がかなり強調された作りとなり、一枚岩を据えている点が注意される。Ⅰb類は玄室長よりやや長めで、直線的な羨道を付設するもので、羨道から玄門を経て玄室へ至る途中に「羨室」とも言うべき空間を設ける特徴をもつ。この種の空間を持つものは、Ⅰa₁類とした4号墳・5号墳、Ⅰa₂類とした1号墳にも若干の拡がりをなしてみられるが、羨道の構造の消長を考える上で注意されよう。Ⅰb類は規模が大きく、石室用材も巨石を用いており、Ⅰa₂類同様奥壁が強調された造りとなっている。Ⅰc類（3号墳）は複室墳である。7基中最大の規模を持っており、石室用材も巨大である。羨道は小さな転石を石室掘り方基底面に直接積み重ねる手法を用いており、その点では、Ⅰa₁類に共通した様相を示すがその床面は、玄室とほぼ同じ高さである。

築造時期の先後関係　以上の類型化と、各古墳の選地のあり方、古墳に伴なう墓道等の切り合い関係を考え、築造時期の先後関係を推定すると右下のようになる。

- 2号 …… 1号（形態、選地）
- 2号 …… 4号（形態）…… 5号（切り合い）…… 6号
- 4号 …… 3号（選地）…… （?）
- 7号（?）

Ⅰa₁類はその石室構造と形態に、竪穴系横口式石室の名残りを若干留めていると考えられ、7基中では最も古いタイプで、2号、4号、5号の順で築造されたものと考える。2号と1号との先後関係は、形態差と選地の面から考えられよう。6号はその築造企画の時点で、5号を意識したと思われる溝を設けており、また形態的な差異も考慮して先後関係は把えられる。4号と3号とは主に形態的差異から考慮した。7

号の築造時期については判断を下す直接的な材料に欠けるが、1～6号の築造時期より若干下るのではないかと考えられる。

遺物からみた築造時期と造営期間　石室内から出土した遺物で、時期比定の目安となる遺物は極めて少ない。3号墳の副室より出土した提瓶（Fig 22の**50**）と、6号墳玄室から出土した土師器高杯脚部破片（Fig42の**H15**）の2点のみである。3号墳の出土例は、追葬時の副葬である可能性もあることも考慮せねばならないが、供献用の土器群の検討も伴ない判断すると、6世記後半の時期（須恵のⅢb 期）に3号墳の築造時期が求められる。6号墳の出土例は7世紀初頭まで下ると考えられるが、羨道端部の埋土中出土の、須恵器類（Fig 37の**87**～**104**）をみると、これも6世紀後半の始めまで遡るもの（杯Ⅰ類は、須恵Ⅲb期に相当する）を含んでいる。4号墳墳丘より出土した杯身Ⅰ類・甕（Fig 25・27の**62**）、土師器（Fig 27の**H1**）は、須恵Ⅲa期に相当するものと思われ、したがって4号墳を含めたⅠa_1 類は6世紀中葉まで遡る可能性もある。なお1号墳は、Ⅰa_1 類とⅠb類（6号）との間に築造時期が考えられよう。

以上のようにみてくると、7基の古墳はⅠa_1 類とした2号墳を始めとして、4号墳、5号墳が、6世紀後半のやや早い時期に築造され、Ⅰa_2 類の1号墳、Ⅰb類の6号墳、Ⅰc類の3号墳の順（3号墳と6号墳の先後関係は逆転する可能性もある）で6世紀後半頃、その後Ⅱ類の7号墳が7世紀初頭にかけて築造されたと考えられる。造営期間は、下に示した杯の形態分類も伴なわせて考えると、築造時期と重複して7世紀前半まで下るものと考えられる。

	1号墳		2号墳		3号墳		4号墳		5号墳		6号墳	
	杯蓋	杯身	杯蓋	杯身	杯蓋	杯身	杯蓋	杯身	杯蓋	杯身	杯蓋	杯身
須恵Ⅲa期							Ⅰ	Ⅰ	⑲	㉒		
Ⅲb期	③,⑤	⑥			Ⅰa Ⅰb Ⅱ,Ⅲ Ⅳ	Ⅰa,Ⅲ Ⅰb,Ⅱ	Ⅱ Ⅲ	Ⅱ Ⅲ	⑳	㉑ ㉓ ㉔	Ⅰ Ⅱ Ⅲ	Ⅰ,Ⅱa Ⅱb,Ⅱc Ⅱd
Ⅳa期												
Ⅳb期												
Ⅴ 期												

Tab 2. 各古墳出土杯形態分類対比表

使用尺の検討　石室の20分の1実測図を、普尺（≒24cm）と高麗尺（≒35.5cm）によって方眼操作を行なった結果、1号～6号墳は普尺を利用して、平面企画がなされたものと判断された。詳細な数値は紙面の都合上省略するが、例えば、Ⅰa_1 類の4号墳は、玄室長10尺、幅8尺で、5：4の比をなし、玄室長と羨道長（8尺）の比と等しいなどの企画性が窺がわれた。

残された問題　以上、築造時期を中心にまとめたが、群としての形成過程や、被葬者の性格など、不明な点が多い。また今宿地区全体のなかでの当古墳群の歴史的評価をどのように行なうのかといった問題が残るが、今後の資料の増加を待って検討されるべきものと思われる。

（田　中）

号	図版番号	径 mm	厚さ mm	孔径 mm	材質	色調	備考
1号墳	1	6.1	2.0	2.2	ガラス	青色	小玉
	2	4.3	2.0	1.1	〃	〃	〃
	3	4.9	2.5	1.1	〃	〃	〃
	4	5.0	2.0	1.1	〃	〃	〃
	5	2.9	1.3	1.0	〃	〃	〃
	6	5.0	2.9	1.0	〃	〃	〃
	7	5.0	2.1	1.0	〃	〃	〃
	8	3.6	2.0	1.0	〃	〃	〃
	9	4.0	3.1	1.1	〃	〃	〃
	10	4.9	2.3	1.5	〃	〃	〃
	11	3.3	1.6	1.0	〃	〃	〃
	12	3.0	1.9	1.0	〃	〃	〃
	13	3.9	2.0	1.4	〃	〃	〃
	14	4.8	2.7	1.2	〃	〃	〃
	15	4.5	3.0	1.0	〃	〃	〃
	16	3.9	2.5	0.9	〃	〃	〃
	17	3.7	2.5	0.9	〃	青緑色	〃
	18	3.6	2.4	0.9	〃	〃	〃
	19	3.4	2.2	1.0	〃	緑色	〃
	20	3.5	3.0	1.2	〃	〃	〃
	21	4.5	3.2	1.2	〃	〃	〃
	22	4.4	2.2	1.0	〃	〃	〃
	23	3.7	2.4	1.0	〃	〃	〃
	24	3.0	3.1	0.8	〃	〃	〃
	25	4.9	2.9	1.0	〃	〃	〃
	26	2.0	2.1	0.7	〃	〃	〃
	27	4.5	3.2	1.2	泥質粘板岩	灰白色	〃
	28	5.0	3.2	1.2	〃	〃	〃
	29	9.0	27.5	2.2	碧玉	濃緑	管玉
3号墳	33	4.0	3.2	1.4	ガラス	青緑色	小玉
	34	4.7	2.2	1.2	〃	〃	〃
	35	3.5	2.0	1.1	〃	〃	〃
	36	4.0	2.5	1.5	〃	〃	〃
	37	2.9	2.1	0.9	〃	〃	〃
	38	3.1	2.0	1.0	〃	〃	〃
	39	3.6	2.1	1.1	〃	〃	〃
	40	3.8	2.4	1.9	〃	〃	〃
	41	3.3	2.3	1.2	〃	〃	〃
	42	3.4	2.3	1.2	〃	〃	〃
	43	5.9	4.8	1.4	〃	濃紺色	〃
	44	4.5	3.8	1.0	〃	〃	〃
	45	5.0	3.0	1.5	〃	〃	〃
	46	5.0	3.5	1.2	〃	〃	〃
	47	5.1	4.0	1.1	〃	〃	〃
	48	8.1	18.1	3.8	泥質粘板岩	灰白色	一方向より穿孔
5号墳	49	2.6	2.0	0.9	ガラス	青色	小玉
6号墳	51	3.6	2.0	1.8	ガラス	青緑色	小玉
	52	2.5	1.5	0.6	〃	〃	〃
	53	3.0	1.7	1.0	〃	〃	〃

号	図版番号	径 mm	厚さ mm	孔径 mm	材質	色調	備考
6号墳	54	2.9	1.7	0.7	ガラス	青緑色	小玉
	55	2.9	1.9	0.9	〃	〃	〃
	56	3.9	3.0	1.2	〃	〃	〃
	57	3.7	3.0	1.1	〃	〃	〃
	58	7.0	6.0	1.2	滑〃石	黒色	丸玉
	59	7.0	6.0	1.2	〃	〃	〃
	60	7.0	7.7	1.2	〃	〃	〃
	61	6.9	7.0	1.4	〃	〃	〃
	62	7.3	6.5	1.7	〃	〃	〃
	63	6.3	5.5	1.2	〃	〃	〃
	64	7.0	5.9	1.7	〃	〃	〃
	65	8.9	6.8	1.4	〃	〃	〃
	66	7.0	5.8	1.3	〃	〃	〃
	67	7.0	6.0	1.4	〃	〃	〃
7号墳	71	5.1	3.6	1.0	ガラス	青色	小玉
	72	5.9	5.0	1.1	〃	〃	〃
	73	5.0	4.5	1.3	〃	〃	〃
	74	5.6	4.0	1.0	〃	〃	〃
	75	5.0	4.0	0.9	〃	〃	〃
	76	5.8	4.1	1.4	〃	〃	〃
	77	6.5	4.9	2.7	〃	〃	〃
	78	5.0	3.3	1.1	〃	〃	〃
	79	6.0	4.0	1.2	〃	〃	〃
	80	7.6	4.2	1.2	〃	〃	〃
	81	6.3	3.9	1.6	〃	〃	〃
	82	6.3	4.0	2.0	〃	〃	〃
	83	6.0	3.2	2.0	〃	〃	〃
	84	6.0	3.3	1.2	〃	〃	〃
	85	6.1	4.5	1.6	〃	〃	〃
	86	5.4	4.7	1.0	〃	〃	〃
	87	5.1	3.7	1.0	〃	〃	〃
	88	5.0	4.1	1.7	〃	〃	〃
	89	4.0	4.1	1.0	〃	〃	〃
	90	5.0	3.2	1.1	〃	〃	〃
	91	6.0	4.0	1.5	〃	〃	〃
	92	5.4	4.3	1.2	〃	〃	〃
	93	5.6	4.7	1.2	〃	〃	〃
	94	7.0	3.0	1.0	〃	〃	〃
	95	5.1	3.0	1.2	〃	〃	〃
	96	5.0	4.4	1.1	〃	〃	〃
	97	6.3	3.1	1.3	〃	〃	〃
	98	6.8	4.1	1.5	〃	〃	〃
	99	6.1	3.3	2.1	〃	青緑色	〃
	100	6.6	4.3	1.3	〃	〃	〃
	101	6.1	3.2	1.6	〃	〃	〃
	102	7.0	3.4	1.2	〃	〃	〃
	103	6.8	4.9	1.3	〃	〃	〃
	104	6.2	5.1	1.1	〃	〃	〃
	105	5.6	4.0	1.1	〃	緑色	〃

表3　アラタ古墳群出土小玉，管玉計測表

付論　アラタ古墳群5号墳出土鉱滓の調査

大　澤　正　己

福岡市西区今宿徳永に所在し，6世紀後半代に比定されるアラタ古墳群5号墳出土の鉱滓について外観観察と顕微鏡組織について調査を行なった。

肉眼観察　1点出土の鉱滓は，30×40×20mmの流出滓①の破片で40g ある。表皮は小豆色を呈し，シワが多く粘稠性を示す。流出滓は，炉の操業中，排滓口から炉外に流出された鉱滓で低融点を特質とするものである。破面は黒色で気孔も比較的少なかった。

顕微鏡組織　鉱物組成は，PL. 1に示すように白色粒で樹枝状のヴュタイト（Wüstite：FeO）②と淡灰色多角形のわずかな量のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）③，灰色木ずり状のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）④それにスラグから構成されている。ファイヤライトが大きく成長していないのは流出滓であり，冷却速度が早かったためと考えられる。

まとめ

鉱滓の外観からみて流出滓であり，組織的にはヴュタイト（Wüstite：FeO），マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）⑤らの晶出状態からみて製錬滓と判定される。

なお，この鉱滓の化学組成については現在分析中なので，別途報告する予定である。

昭和五十五年二月七日

註

① 丸山益輝「鉄滓による“たたら”炉内反応の解析」『たたら研究』第22号。たたら研究会，1978。

② ヴュタイト（Wüstite：FeO）。Fe—O_2系2元状態図におけるFeとO_2との固溶体のこと。FeO（O_2，22%）はαFeとヴュタイトとの混合物であることが知られる。またヴュタイトを冷却していくと，570℃で分解し，この温度でFe_3O_4とα鉄に分かれる共析反応（eutectoidreaction）をおこす。

すなわち　Wüstite $\xrightleftharpoons{570℃}$ Fe_3O_4＋α鉄　となる。

鉱物特性　光学的性質；マグネタイトと同様に等軸晶系に属し，反射偏光を示さない。屈折率もマグネタイトよりわずかに低く，色調もマグネタイトより灰色を帯びているが，その差はあまり大きくない。形状は一般に球状，樹枝状およびマグネタイトとの共晶の形で観察されるが，光学的性質だけではマグネタイトと識別しがたい。透過光ではマグネタイトと同様，不透明である。

腐食性；ヴュタイトの明確な識別は，エッチ・テストによるのがよく，$SnCl_2$飽和溶液により1～2 min で完全か，それに近い程度まで腐食されるのでマグネタイトと識別される。

微小硬度；焼結鉱中のヴュタイトは一般にマグネタイトと共晶をなしており，微小硬度は450～500Hv程度で，マグネタイトよりいくぶん低い値を示す。

③ マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）。（$FeO \cdot Fe_2O_3$）でも表わされ，FeOの2価のFeは，MgまたはNiで置換され，また別にTiO_2を含むこともある。立方晶で普通正八面体。

鉱物特性　光学的性質；マグネタイトは等軸晶系に属し，屈折率はN＝2.42で，わずかに黄色を含む灰白色を呈し，反射光度は弱い。反射偏光を示さず，このことは屈折率の低いこととともにヘマタイトと明瞭に識別できる。マグネタイトは不規則塊状の大きい結晶を生成し，また往々にして樹枝状，四面体，八面体などで

観察される晶癖の面からヘマタイトとは異なる。透過光では不透明である。

腐食性；マグネタイトは王水により黄変するが，ヘマタイトは変化せず，ヘマタイトと識別される。また$SnCl_2$飽和溶液によって侵されず，ヴスタイトは1～2min で暗灰色を呈するのでヴスタイトと識別される。

微小硬度；500～600Hvでヘマタイトとは相当の差異を有する。

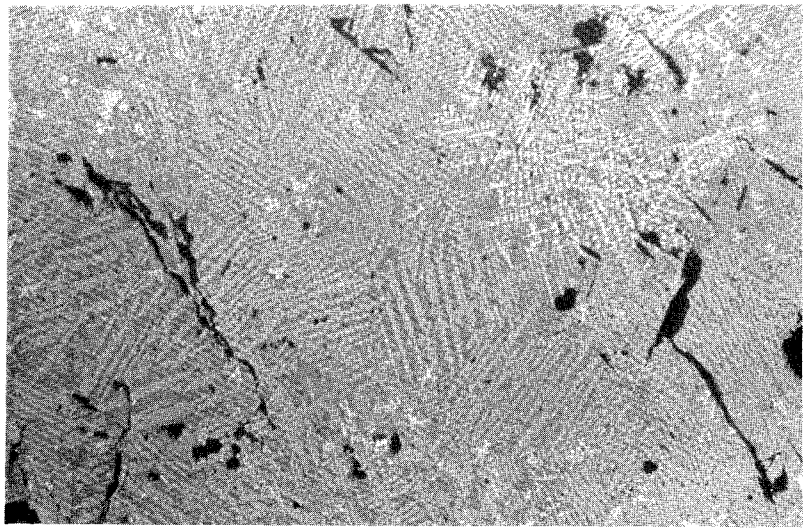
※腐食液の$SnCl_2$飽和アルコール溶液の代用として $SnCl_2$の1％HCL飽和溶液を代用してもよい。

④ ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）。斜方晶系に結晶する鉄ケイ化物のこと。溶融点990℃，比重4～4.2。$2FeO+SiO_2 \rightarrow 2FeO \cdot SiO_2$の反応による生成物。

鉱物特性　光学的性質；ファイヤライトは斜方晶系に属し，反射偏光を示す。屈折率（Ng＝1,886）は酸化鉄鉱物に比べれば低く，マトリックスのけい酸塩の中では比較的高い。ファイヤライトは焼結鉱中に現われる場合，スラグ中に，よく木ずり状となって晶出するため，この場合その特徴ある組織から他鉱物との識別は容易である。透過光では，開ニコルで無色であり，交差ニコルで淡黄色，黄緑色，黄橙色などを呈する。

微小硬度；微小硬度は600～700Hv程度である。

⑤ 製錬滓。鉱石や砂鉄その他の原料から含有金属を抽出し精製する冶金学的反応操作で排出された滓をさす。鍛冶滓とは異なる。



PL. 1　アラタ古墳群5号墳出土鉱滓の顕微鏡組織　(×100)

PL. 2　外観写真　(½)

福岡市西区
徳永アラタ古墳群
（本文編）
福岡市埋蔵文化財調査報告書第56集
1980年（昭和55年）3月31日
発行　福岡市教育委員会
印刷　有限会社 松古堂印刷